

石橋崇雄編

清朝『壇廟祭祀節次』訳注(二)  
——園丘壇・方沢壇——

公益財団法人 東洋文庫





目

次

二 園丘壇 1

樂章·簫譜·笛譜

1	迎神礼——始平之章……………	2
2	奠玉帛礼——景平之章……………	4
3	進俎礼——咸平之章……………	6
4	初献礼——寿平之章……………	8
	武生舞譜 10	
5	亞献礼——嘉平之章……………	14
	文生舞譜 16	
6	終献礼——永平之章……………	22
	文生舞譜 24	
7	撤饌礼——熙平之章……………	30
8	送神礼——清平之章……………	32
9	望燎礼——太平之章……………	34

三 園丘壇常雩礼

37

樂章・簫譜・笛譜

1	迎神礼	—	霽平之章	……	38
2	奠玉帛礼	—	雲平之章	……	40
3	進俎礼	—	霽平之章	……	42
4	初献礼	—	霖平之章	……	44
	武生舞譜				46
5	亚献礼	—	露平之章	……	50
	文生舞譜				52
6	終献礼	—	霽平之章	……	56
	文生舞譜				58
7	撤饌礼	—	靈平之章	……	62
8	送神礼	—	霽平之章	……	64
9	望燎礼	—	霽平之章	……	66

四 園丘壇大雩礼

69

樂章・簫譜・笛譜

青衣童子上舞礼

93

青衣童子舞譜

御製雲漢詩八章……………96

——第一章——第二章——

——第五章——第六章——第七章——第八章——

1 迎神礼——霑平之章……………70

2 奠玉帛礼——雲平之章……………72

3 初献礼——霖平之章……………74

武生舞譜 76

4 亚献礼——露平之章……………80

文生舞譜 82

5 终献礼——霑平之章……………86

文生舞譜 88

6 撤饌礼——靈平之章……………158

7 送神礼——霑平之章……………160

8 望燎礼——霑平之章……………162

五 方沢壇

165

楽章・簫譜・笛譜

1	迎神礼	——	中平之章	……	166
2	奠玉帛礼	——	広平之章	……	168
3	進俎礼	——	含平之章	……	170
4	初献礼	——	大平之章	……	172
	武生舞譜				174
5	亚献礼	——	安平之章	……	178
	文生舞譜				180
6	終献礼	——	時平之章	……	184
	文生舞譜				186
7	撤饌礼	——	貞平之章	……	190
8	送神礼	——	寧平之章	……	192

# 凡例

本書は、公益財団法人東洋文庫所蔵『壇廟祭祀節次』(以下、『節次』)一帙(全函・全六冊・請求記号・貴H13C8)の訳注の二冊目で、『節次』第一冊「壇廟祭祀節次」収録の「圜丘壇」(13a~21a)、「圜丘壇常雩礼」(22a~29b)、「圜丘壇大雩礼」(30a~49b)、「方沢壇」(50a~57a)の訳注を収録している。『節次』は、内容から大きく『文章部分』と『舞譜部分』に分けることができる。

## 【文章部分】

原書の文章部分は、原文画像・原文画像の下・原文画像の左側(ないし見開き左頁)の3つに大きく分かれる。

### 原文画像

1. 原文の揭示には、史料の画像を掲げた(郭内のみとし、内容で分けた)。
2. 原文で色がついている文字は、語注・訳文もそれぞれ同じ色で表した。

### 原文画像の下

3. 漢文の語注(語注がつけられたものには、訳文などで\*をつけることで目印とした)

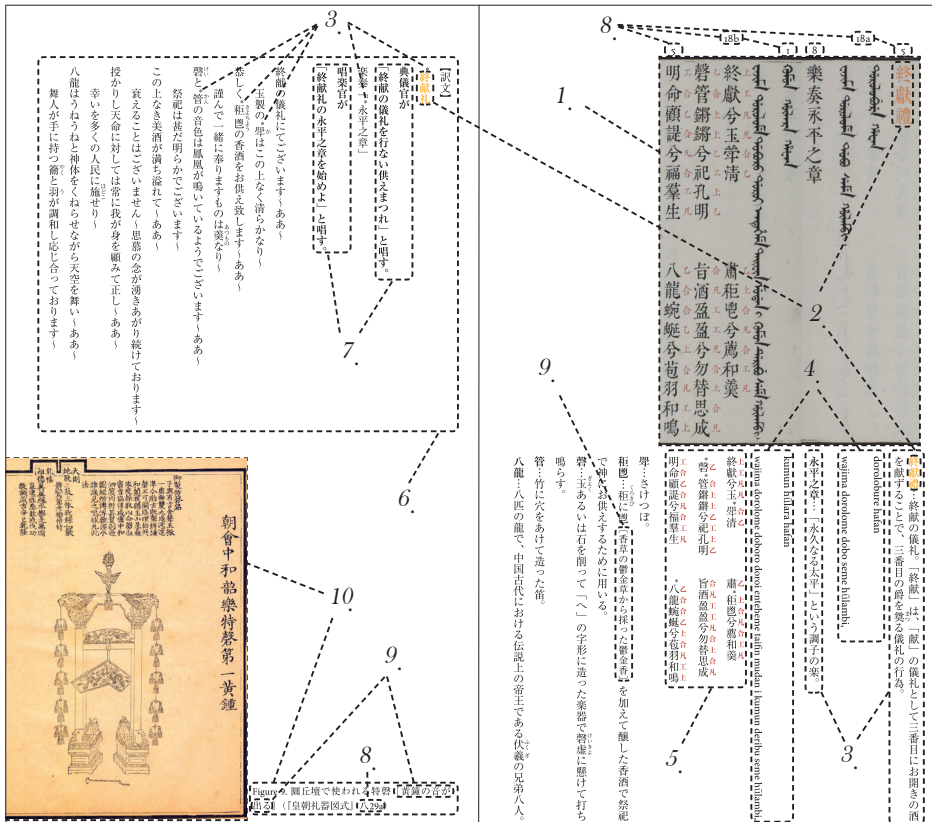
4. 満洲文のローマ字転写(メレンドルフ方式による)

5. 唱の歌詞とその音階(赤色)

### 原文画像の左側(見開き左頁)

6. 日本語の訳文は、原文画像の左隣(あるいは見開き左頁)に掲示した。
7. 満洲語部分の和訳は太字で示した。
8. 漢数字は『節次』など古典籍の巻数(冊数)、2ケタの数字は葉数、

a



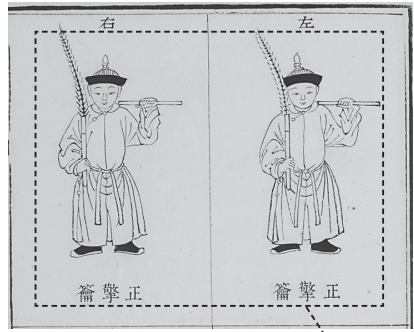
／bはそれぞれオモテ／ウラ、1ケタの数字は半葉における行数を表して  
いる。

- 9. 「        」は訳注者による補足、        は原文における擡頭箇所を示す。
- 10. 内容の理解を助けるため、適宜、Figureでナンバーを付した図版を掲載した。巻末の画像出典一覧には、書誌情報やソースについての情報をまとめた。

【舞譜部分】

原文画像を頁の右側(ないし見開き右頁)に掲げ、その下に語注を付すスタイルは【文章部分】と同じである。

- 11. 舞譜は、原文を【文章部分】同様に掲げた。
- 12. 原文画像の左側(ないし見開き左頁)以降には、演舞の形や流れが視覚的に直感的に理解できるよう、演舞の型のイラストを歌詞とともに掲載した。
- 13. 演舞の型は、「文生武生舞譜」〔節次〕五・「青衣童子舞譜」〔節次〕六から該当舞型の画像をモノクロにしイラストのように加工して転載した。



13

Figure 11 details: The top section contains lyrics from the 'Text Part' (文章部分) and 'Dance Part' (舞譜部分). The lyrics are:
   
第一句 終正撃當獻對托羽分外雙舞玉管托羽
   
第二句 肅正別足相對當舞鳴裏監當分搭羽
   
第三句 磬外肩羽對當舞鏘背一掛鏘背平身
   
第四句 皆微羽祝裏當孔背當舞明裏一掛
   
第五句 明裏肩羽命當舒當顧斜托羽誕裏雙舞
   
第六句 八對料當龍正橫羽宛背斜當蛭正羽舞
   
第七句 今背當羽苞一朝上羽正一掛和一長跪
   
第八句 鳴即當
   
The bottom section contains 24 small illustrations of dancers in various poses, labeled with terms like '外肩羽', '正別足', '對落舞', '對托羽', '對落舞'.

【青衣童子舞譜部分】(100~155頁)

原文画像を頁の右側(ないし見開き右頁)に掲げ、その下に語注を付すスタイルは【文章部分】と同じである。

緑色で示される舞型は、武生舞譜や文生舞譜では数文字の名称なのに対し、青衣童子舞譜では簡単な文章として説明されている点が大きな違いとして注目される。

しかも、青衣童子舞譜の舞型の説明は、本文(「節次」一、i参照)と「青衣童子舞譜」(「節次」六、ii参照)では、左に挙げるように異なっている(「節次」一では左班だけ、「節次」六では左班と右班それぞれに説明が付されている)。

そのため、【青衣童子舞譜部分】では、【舞型部分】の11、13にかわり、以下のように訳文と舞型を掲げている。

11' 舞譜は、原文を【文章部分】同様に掲げた。そのすぐ左側に、緑色で示される舞型の説明文の訳文を載せた。

12' 訳文の左側(ないし見開き左頁)以降には、演舞の形や流れが視覚的・直感的に理解できるよう、演舞の型のイラストを歌詞とともに掲載した。

13' 演舞の型のイラストは、「青衣童子舞譜」(「節次」六)から選び、左(班)・右(班)で異なる説明(ii参照)は一文にした上で適宜改行を加え、イラストの下に配置した(ii参照)。

12'

11'

13'

ii

iii

**原文**

**第一章** 第一句 首 儀 飾 左 羽 儀 飾 右 羽 儀 飾 彼 左 羽 儀 飾 右 羽 儀 飾

**第二章** 朱 轉 面 向 左 羽 儀 飾 鳥 而 正 左 羽 儀 飾 實 鳴 身 而 向 右 羽 儀 飾 居 轉 正 沈 轉 正 紀 左 羽 儀 飾 右 羽 儀 飾

**第三章** 辨 左 羽 儀 飾 律 正 立 雙 曲 尺 直 角 曲 尺 雙 羽 儀 飾

**原文**

**第一章** 瞻 首 を 微 かに 傾 加 減 して 左 手 の 羽 は 横 として 眉 の 位 置 に 掲 げ、 右 手 の 羽 を 垂 直 に 立 てる。

**第二句** 彼 左 手 の 羽 は 西 を 指 し 示 す よう に、 右 手 の 羽 は 変 わ ら ず 垂 直 に 立 てる。

**第三句** 朱 顔 を 回 して 相 方 の 方 を 向 き、 左 手 の 羽 は 眉 に 寄 り か っ せ、 右 手 の 羽 は 変 わ ら ず 垂 直 に 立 てる。

**協** 左 手 の 羽 は 垂 直 に 立 てる、 右 手 の 羽 は 左 羽 に 寄 り か っ せ、 右 手 の 羽 は 垂 直 に 立 てる。

**紀** 正 立 し、 両 手 に 持 っ て いる そ の ぞ れ 羽 を 垂 直 に 立 てる。

**實** 左 手 の 羽 は 垂 直 に 立 てる、 右 手 の 羽 は 垂 直 に 立 てる、 右 手 の 羽 は 垂 直 に 立 てる、 右 手 の 羽 は 垂 直 に 立 てる。

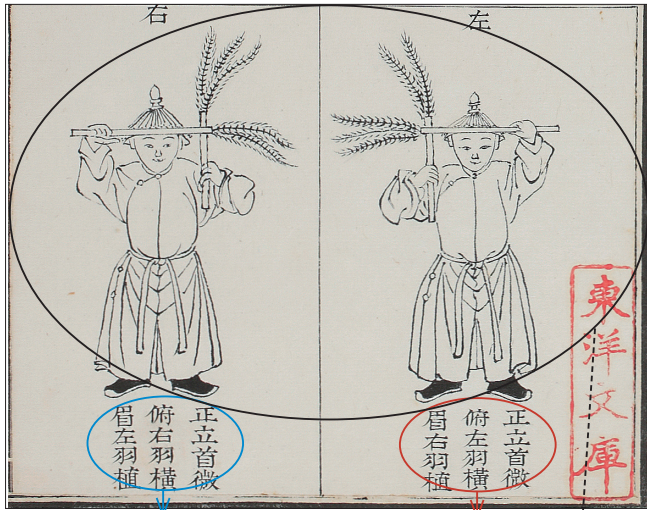
**律** 正 立 し、 両 手 に 持 っ て いる そ の ぞ れ 羽 を 垂 直 に 立 てる。

**沈** 正 立 し、 両 手 に 持 っ て いる そ の ぞ れ 羽 を 垂 直 に 立 てる。

**鳥** 正 立 し、 両 手 に 持 っ て いる そ の ぞ れ 羽 を 垂 直 に 立 てる。



凡例



ii. 『節次』六01a下

第一章  
第一句瞻

i. 『節次』一37b・l.3-4

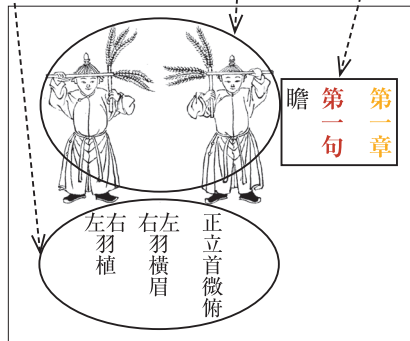
首微俯左羽  
横眉右羽植

首微俯左羽  
横眉右羽植

正立首微  
俯右羽横  
眉左羽植

正立首微  
俯左羽横  
眉右羽植

正立首微俯  
右左羽横眉  
左右羽植



iii. イラストにした舞型と一文にまとめたその説明

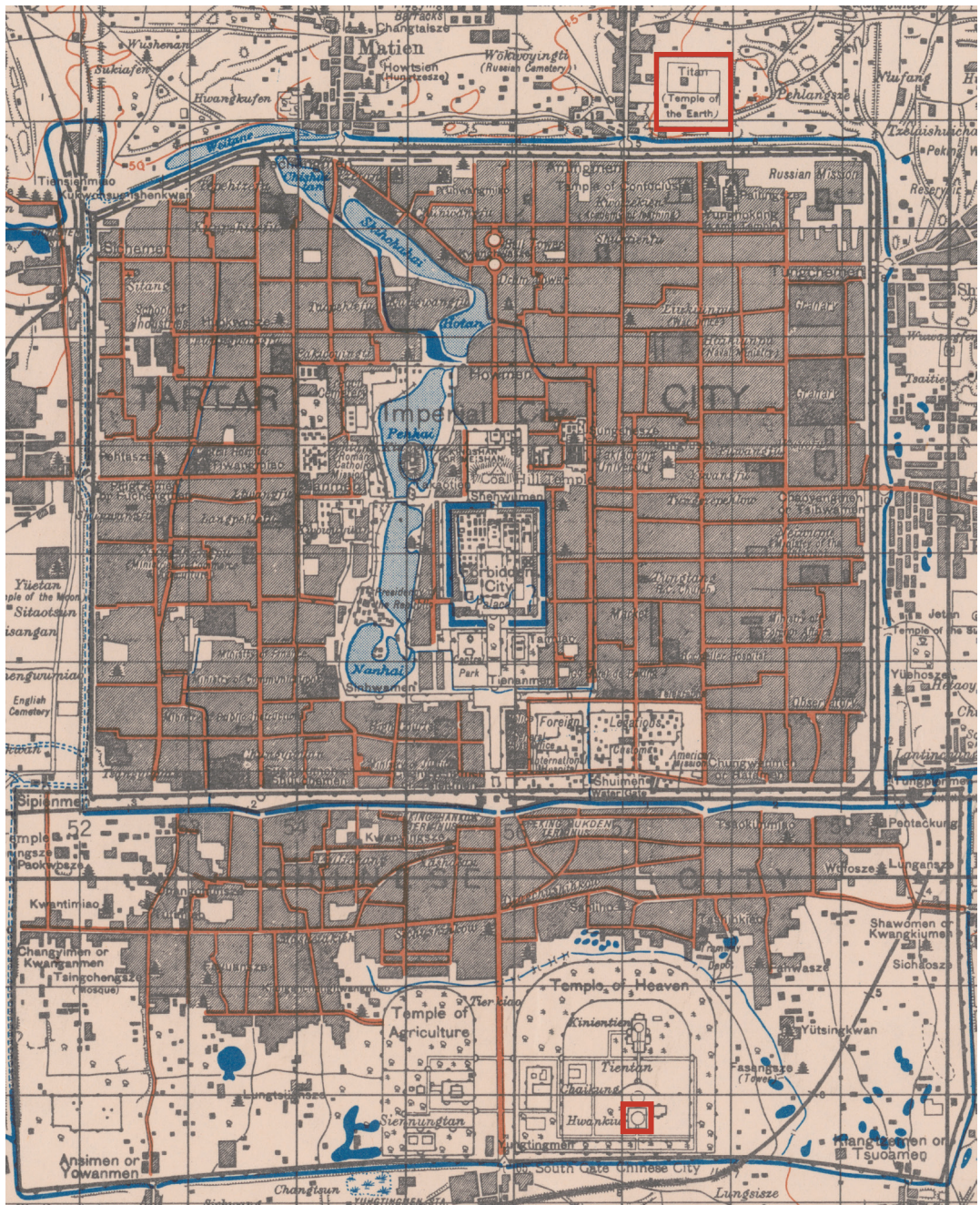


Figure 1. 圓丘壇（下）と方沢壇（上、地壇）の位置

二  
園  
丘  
壇



園丘壇

冬至日祭 致齋三日  
日出前七刻祭

樂章黃鐘宮

倍夷則起調

簫譜 各章皆係頭一字末一字用上字皆係尺四  
二字除而不用 此本樂章皆係單註簫譜

笛譜 各章皆係頭一字末一字用凡字皆係合尺  
二字除而不用

迎神禮

迎神禮

樂奏始平之章

樂奏始平之章

樂奏始平之章

欽承純祐兮於昭有融  
輪忱元祀兮從律調風  
淵思高厚兮期亮天工  
雲駟延佇兮鸞輅空濛  
肅始和暢兮恭仰蒼穹

時維永清兮四海攸同  
穆將景福兮迺眷微躬  
聿章彙序兮夙夜宣通  
翠旗紛裊兮列缺豐隆  
百靈祗衛兮齋明辟公

協昭慈惠兮遯鑒臣衷

協昭慈惠兮遯鑒臣衷

協昭慈惠兮遯鑒臣衷

協昭慈惠兮遯鑒臣衷

協昭慈惠兮遯鑒臣衷

協昭慈惠兮遯鑒臣衷

2

13a

8

1

13b

8

14a  
1

【訳文】

圓丘壇

\*冬至の日に祭を行う。\*致齋は三日間。

太陽が昇る時刻より\*七刻前から始める祭。

\*楽章\*黄鐘 「楽章」は、「黄鐘」の音律、「五音」の「\*宮〔土〕」の音声。

\*倍\*夷則 夷則の倍律に楽声と音律を合わせる。

簫\*譜 「圓丘壇の祭祀において簫譜を」楽奏するそれぞれの章では、全て、

冒頭の二字と末尾の一字に「上」字の音符を用い、全て「尺」と「四」

の二字の音符は除いて使用しない。この本楽章では全体に亘って、

ただ「簫譜」だけを記載している。

笛\*譜 「圓丘壇の祭祀において笛譜を」楽奏するそれぞれの章では、全て冒

頭の一字と末尾の一字に「凡」字の音符を用い、全て「合」と「尺」

の二字の音符は除いて使用しない。

迎神礼

典儀官が

「神をお迎えたまえ」と唱す。

楽奏 「\*始平之章」

唱楽官が

「迎神礼の始平之章を始めよ」と唱す。

慎んでお受け致しまするは純一なる厚き幸いゝああゝ

ああ何とはつきりと光り輝きて隅すみまで行きわたりしことよゝ

常づね地を繋ぎとめたる道義のおおもとは常しえに清らかなりてゝああゝ

天下は瞬く間に仁の道を同じくするのみゝ

このうえなき誠の心を尽くしますゝ大いなる祭祀にゝああゝ

定められましたとおりに天下の風俗を整えまするゝ

満ち満ちておりますゝ大いなる幸福がゝああゝ

この慈しみいだいております微賤の我が身にゝ

深き思いは気高く厚くゝああゝ

乞ひ願いまするは少しでもお援け致したいことゝ皇天上帝が天下を御

治めになる御仕事をゝ

したためまする文にしてゝ不変の法を順序だててゝああゝ

早朝より夜更けまで怠ることなく普く行き渡らせまするゝ

\*雲輶は長いことたずんだまゝゝああゝ

\*鸞輅は霧雨煙つて霞んだまゝゝ

御車に付したるみどり色の旗は乱れもつれたなびきゝああゝ

稲光と雷が光り轟けるばかりゝ

厳かなる始まりは普く和らぎのどかに静まることゝああゝ

恭しく仰ぎ見上げまするは大いなる蒼き穹ゝ

多くの神神が御護り下さりゝああゝ

物忌みして心身を清めるは天下の諸侯ゝ

神が来られて寛ぎ楽しまれなさるならゝああゝ

思いまするに皇天上帝は常づね御判り下さっているのだとゝ

叶いまするは明らかなる慈しみの恩恵ゝああゝ

はるかに鑑みましておりまするは皇天上帝の臣下たる予の衷情

奠玉帛禮

玉帛

玉帛

樂奏景平之章

玉帛

靈旂爰止兮樂在縣

靈旂爰止兮樂在縣

聿昭誠敬兮駿奔前

來格洋洋兮思儼然

奠玉帛禮…玉帛 (Figure 3. 参照) を供えまつる儀礼。

dorolobure hafan

gu suje dobo seme hūlambi,

景平之章…「清明なるめでたき太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

gu suje doboro doroi genggiyen taihn mudan i kumun deribu seme hūlambi,

\*靈旂爰止兮樂在縣

聿昭誠敬兮駿奔前

來格洋洋兮思儼然

執事有恪兮奉玉筵

嘉玉量幣兮相後先

臣忱翼翼兮告中虔

靈旂…諸説あるなか、ここ

では後に続く歌詞に鑑み、昇龍を描いた旗と解釈した。



【訳文】

\*奠玉帛礼

典儀官が

「玉帛を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*景平之章」

唱樂官が

「奠玉帛礼の景平之章を始めよ」と唱す。

昇龍を描いた皇天上帝の御旗はここに止まれり〜ああ〜

奏でるは懸け並べたる楽器なり〜

祭祀を執り行うには慎みを保ち続け〜ああ〜

慎みて捧げ用意致しましたるは玉でこしらえたる筵なり〜

ここに明らかに致しまするは皇天上帝に捧げる真心と敬い畏れつつしむこ

と〜ああ〜

迅速に赴きまする御前に〜

優れたる玉と量と幣を〜ああ〜

次から次へとあと先に〜

神がお見えになられます〜祭祀の場に洋洋と〜ああ〜

御心は厳かで厳めしく〜

皇天上帝の臣下たる予の忱は敬い慎むばかりにして〜ああ〜

皇天上帝に訴え申し上げまする心の中は敬虔なる誠なり〜



Figure 2. 神位と供えもの器具の様子 (Figure 3. の黒枠内に相当)

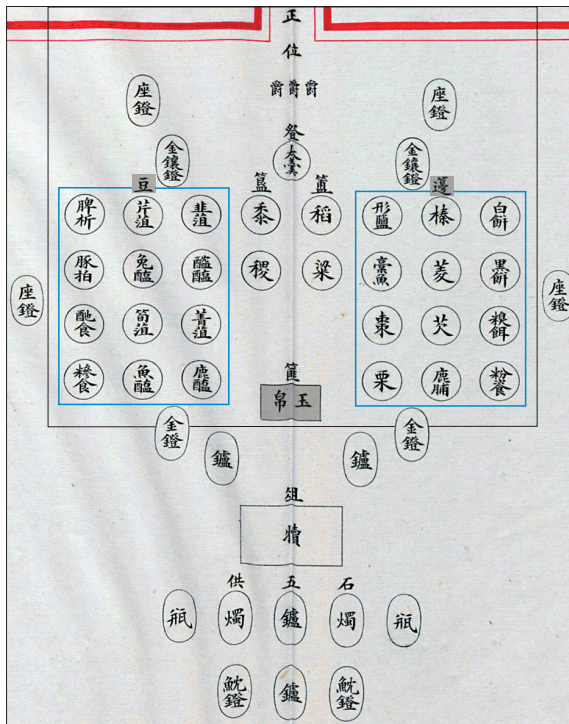


Figure 3. 『大清会典図』にみえる供えもの一覧と配置 (二01b-02a、圓丘壇と常雩の場合)

進俎禮

進俎禮

進俎禮

樂奏咸平之章

進俎禮

進俎禮

吉蠲爲饗兮肅豆籩

毛俎爾栗兮薦膏鮮

願垂降鑒兮駐雲輶

升餗列俎兮敢弗虔

致潔陶匏兮香水泉

錫嘉福兮億萬斯年

進俎禮…俎〔まないた〕に載せた肉を供えまつる儀礼。

doroloburehafan

yali dobo seme hūlambi,

咸平之章…「あまねくゆきわたれる太平」という調子の樂。

kunmun hūlara hafan

yali doboro doroi neigen taijin mudan i kunmun deribu seme hūlambi,

吉蠲爲饗兮肅豆籩  
\*吉蠲爲饗兮肅豆籩  
凡工工凡合工合凡

毛俎爾栗兮薦膏鮮  
合乙合乙上工上乙  
致潔陶匏兮香水泉  
乙凡工工凡合工凡

願垂降鑒兮駐雲輶  
上合工上乙乙工凡  
錫嘉福兮億萬斯年  
合合凡工乙凡工上

吉蠲…吉日と吉士を選んで齋戒滌濯して身を清めて神にお事つかえすること。

豆…木製のたかつき〔Figure 2, 3, 5を参照〕。

籩…竹製のたかつき〔Figure 2-4を参照〕。

餗…肉のごちそう。

俎…祭祀で供える肉を載せるまないた〔Figure 3を参照〕。

爾栗…生まれたての子牛。

膏鮮…あぶら肉。

匏…ひょうり。

雲輶…天女がお乗りになる牛車。



【訳文】

\*進組礼

典儀官が

「[俎に載せた]肉を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*威平之章」

唱楽官が

「進組礼の威平之章を始めよ」と唱す。

\*吉錫きつげんに際しては恭しく用意致しまするゝ酒と肴さかなをゝああゝ

恭しく整えまするゝ\*豆まめと\*籩へんをゝ

恭しく奉りまするゝ\*餽こうを盛った\*俎そをずらりとならべてゝああゝ

どうして畏かしこまらないことなどがありませんようかゝ謹んで額突ぬかいており

まするゝ

謹んで軽く炙りまするゝ\*繭栗けんりつをゝああゝ

謹んで奉りまするゝ\*膏鮮こうせんをゝ

謹んでお捧げ致しまするゝ清らかなる陶製の\*匏かをゝああゝ

神に捧げる薫り高き水が湧き出だしますゝ

乞い願わくはゝ下しゝお示し下されゝ諭す御教えの御言葉をゝああゝ

たらずんでおりますゝ\*雲軒うんげんがゝ

賜らんことをゝこの上なくめでたき幸せをゝああゝ

限りなく続く長き年月に互むたりてゝ



Figure 4. 籩（天壇に保管されていたもの）



Figure 5. 豆（天壇に保管されていたもの）

初獻禮

初獻禮

初獻禮

樂奏壽平之章

樂奏壽平之章

玉筭肅陳兮明光

玉筭肅陳兮明光

臣心迪惠兮捧觴

靈慈徽眷兮喬皇

桂漿初醞兮信芳

醴齊載德兮馨香

勤仰止兮斯徜徉

勤仰止兮斯徜徉

初獻禮…初獻の儀礼。「初獻」は、祭祀儀礼で初めて酒を献ずることで、一番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sucungga dorolome dobo seme hūlambi,

壽平之章…「長寿の太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

sucungga dorolome doboro doroi jalafun tain mudan i kumun derbu seme hūlambi

玉筭肅陳兮明光

桂漿初醞兮信芳

臣心迪惠兮捧觴

\*醴齊載德兮馨香

靈慈徽眷兮喬皇

勤仰止兮斯徜徉

醴齊：祭祀に用いる五齊（五種類の混和酒）の一つ。『周礼』「天官・酒正」

に「辨五齊之名、一曰泛齊、二曰醴齊、三曰盎齊、四曰緹齊、五曰沈齊」とある。

【訳文】

\*初献礼

典儀官が

「初献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*寿平之章」

唱楽官が

「初献礼の寿平之章を始めよ」と唱す。

玉製の罍かを恭しく整え並べまするゝああゝ

この上なく光り輝いておりまするゝ

桂樹の香りが広がる酒を初めて醸かもしゝああゝ

まことにこの上なく芳かぐわしいゝ

皇天上帝の臣下たる予の心は勉みちに恵したうことのみゝああゝ

桂酒を注いだ觴さかづきをお捧げ致しますゝ

\*醴れい齊せいは徳を重ねたあらわれでありまするゝああゝ

芳しき香りに喩えられしゝこの上なく徳化されけることを表わせりゝ

皇天上帝は慈しみ大いなる恵みを繋ぎ止めゝああゝ

万物は美しく栄え続けりゝ

心の底からふり絞しぼって仰ぎ見ますればゝああゝ

かくのごとく彷徨さまようばかりなりゝ



Figure 6. 初献・亜献・終献で用いられる爵と爵墊（三つの爵の台）



武生舞譜

第一句玉正揚舞竿外擺手肅正垂舞陳裏拱手

兮對揚舞明正躬身光裏看尖

第二句桂正揚舞漿背一揖初背擺牌醞裏擺手

兮正垂舞信外一揖芳背揚舞

第三句臣正別足心背一召廸背擺牌惠正開斧

兮正開牌捧背擺牌觴正躬身

第四句醴背一召齊別足正開牌載裏擺牌德外擺牌

兮對拱手馨對沉牌香正開斧

第五句靈對擺牌慈外擺手徽裏擺手脊背一揖

兮外看尖喬對擺牌皇外拱手

第六句勤別足對躬身仰正拱手止對擺牌兮再擺牌

斯正揚舞尙一長跪祥一叩首

武生舞譜：「初獻礼」の「寿平之章」に合わせて舞う。

裏看尖：尖頭よりも身体を低く屈める動作。

揖：胸の前に組み合わせた両手を前に出し、上下させて行う礼。

召：曲げてそる動作。

沉：沈と同じで、かくれる。

16b  
1

8

16a

1

15b

8

5

【舞譜】

\* 武生舞譜

第一句

玉



正揚舞

第二句

桂



正揚舞

第三句

臣



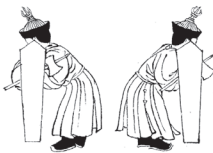
正別足

翠



外擺手

漿



背一掛\*

心



背一召\*

肅



正垂舞

初



背擺牌

廸



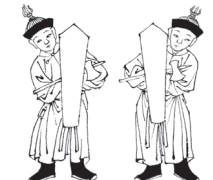
背擺牌

陳



裏拱手

醞



裏擺手

惠



正開斧

兮



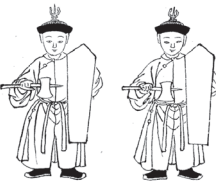
對揚舞

兮



正垂舞

兮



正開牌

明



正躬身

信



外一掛

捧



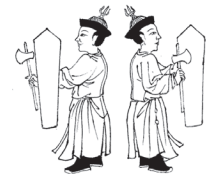
背擺牌

光



裏看尖\*

芳



背揚舞

觴



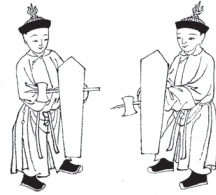
正躬身

第四句



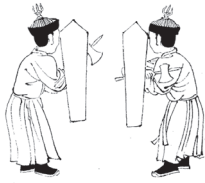
背一召

第五句



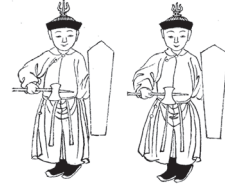
對擺牌

第六句



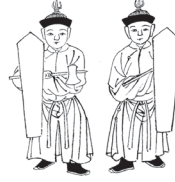
別足對躬身

齊



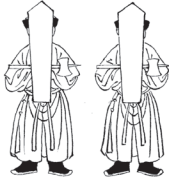
別足正開牌

慈



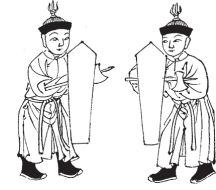
外擺手

仰



正拱手

載



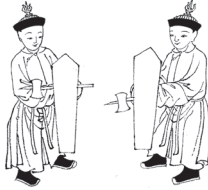
裏擺牌

徽



裏擺手

止



對擺牌

德



外擺牌

眷



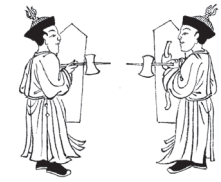
背一揖

兮



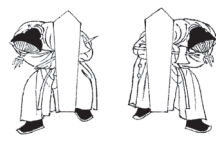
再擺牌

兮



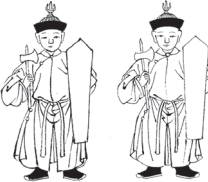
對拱手

兮



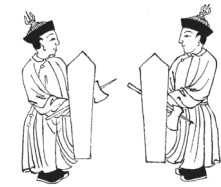
外看尖

斯



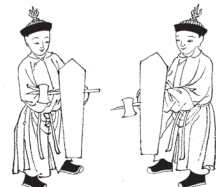
正揚舞

馨



對沉\*牌

裔



對擺牌

倘



一長跪

香



正開斧

皇



外拱手

祥



一叩首



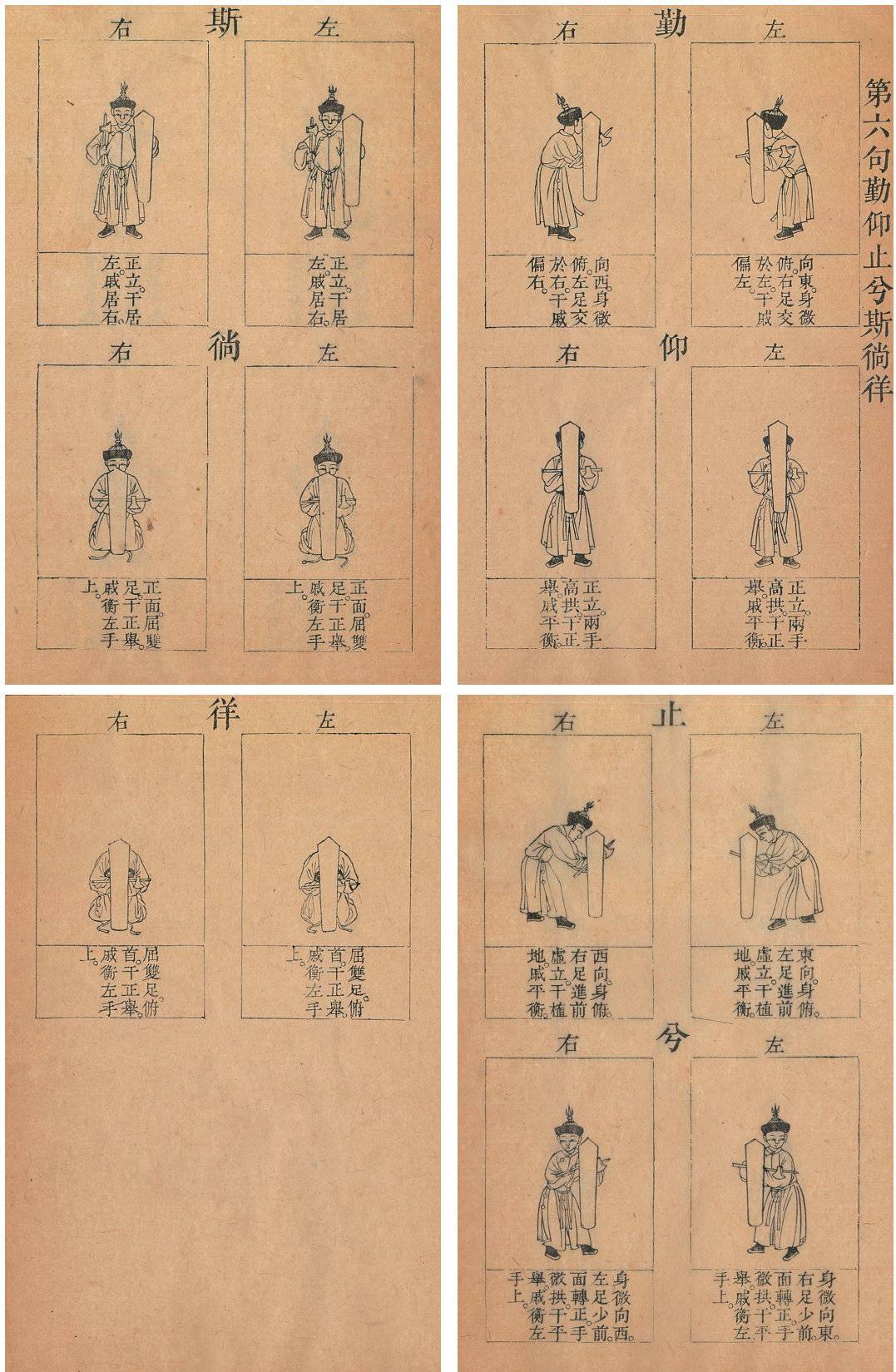


Figure 7. 『御製律呂正義後編』にみえる武生舞譜（二12b-14a、前頁第六句に相当）

亞獻禮

五 色 之 樂 奏 嘉 平 之 章

考 鐘 拂 舞 兮 再 進 瑤 觴

翼 翼 昭 事 兮 次 第 肅 將

醉 顏 容 與 兮 蒼 几 輝 煌

生 民 望 澤 兮 仰 睨 玉 房 榮 泉 瑞 露 兮 慶 無 疆

亞獻禮…亜獻の儀礼。「亜獻」は、祭祀儀礼で二番目に酒を献ずること、二番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sirame dorolome dobo seme hūlambi,

嘉平之章…「驚嘆すべきめでたき太平」という調子の楽。嘉平は陰暦12月を意味し、当該月に行う祭祀「臘祭」の名称でもあるが、ここは満洲語 ferguwecuke 「驚嘆すべき」の意を採って解釈した。  
kumun hūlara hafan

sirame dorolome doboro doroi ferguwecuke tafin mudan i kumun derbu seme hūlambi,

考鐘\*拂舞兮再進\*瑤觴 翼翼昭事兮次第肅將

醉顏容與兮蒼几輝煌 穆穆居歆兮和氣洋洋

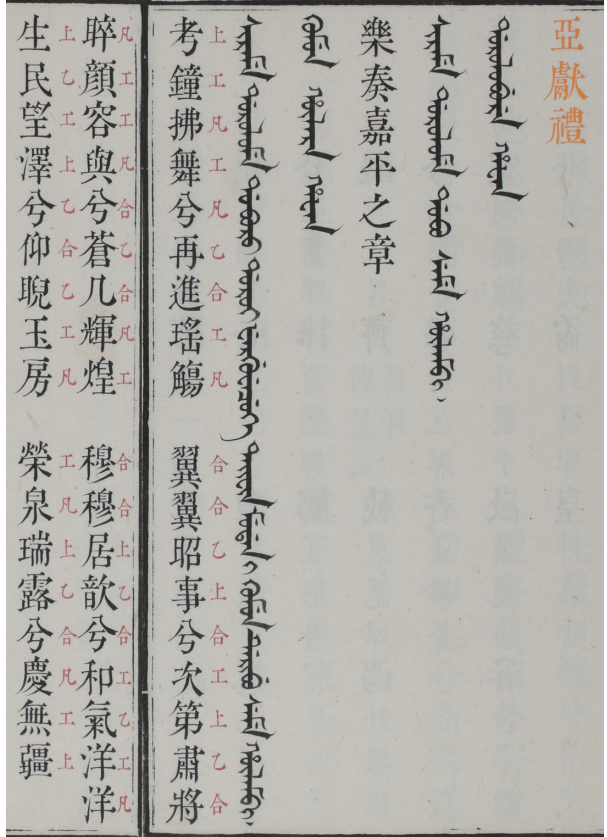
生民望澤兮仰睨玉房 榮泉瑞露兮慶無疆

拂舞…扨子ほしすを用いる舞で、呉の地方で行なわれていたという説や、「周礼」

「春官・樂師」が伝える「帔舞」〔五色のさきぎぬを手にして舞う〕の意味を受け継いでいるとの説がある。

瑤…美しき玉。

几…祭祀で用いる肉を盛った俎。





【訳文】

\* 巫献礼

典儀官が

「巫献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*嘉平之章」

唱楽官が

「巫献礼の嘉平之章を始めよ」と唱す。

謹んで楽鐘を打ち\*弘舞を奉納致します〜ああ〜

今一度\*瑶の觴を奉ります〜

敬い慎み神にお仕えして祭祀を執り行います〜ああ〜

決めごとに\*遵い謹んで捧げます〜

つややかなお顔立ちにゆつたりのびのびとしたお振る舞い〜ああ〜

蒼き\*凡は輝き煌いております〜

恭しく麗しく\*お供え物をお受けただいております〜ああ〜

和やかな気が満ち満ちております〜

人民は多くの恵みを願い〜ああ〜

天を仰いで神のいらつしやるところを窺いみております〜

光華あるめでたき泉からはすばらしき天酒が溢れでております〜ああ〜

まことに天から賜る慶びは果てしがないものでございます〜

文生舞譜

第一句考正垂簫鐘正簫舞拂對拱手舞對簫舞

兮正斜簫再對一揖進正躬身瑤平簫羽一舞

觴正一揖

第二句翼裏擺手翼外托羽昭朝上平搭羽事外雙舞

兮朝上交羽簫次對雙舞第正簫舞肅外看尖

將裏看尖

第三句眸簫蹲身顔外拱手容背一揖與背簫舞

兮外豎簫蒼背雙舞几朝上簫托羽輝對垂羽

煌朝上橫舒簫

第四句穆對擺羽穆再擺羽居朝上分羽簫歆對簫舞

兮朝上豎羽簫和對橫羽氣正托簫洋簫托羽

洋背簫舞

第五句生懷羽簫民對一揖望朝上簫支羽澤對豎簫斜肩羽

兮低豎簫仰對簫舞睨朝上高搭羽玉裏看尖

房豎羽簫

第六句榮外雙舞泉對躬身瑞正橫簫露對羽舞

兮對簫舞慶正拱手無一長跪疆一叩首

文生舞譜：「垂獻札」の「嘉平之章」に合わせて舞う。

搭…のせる。

簫蹲身：『節次』五「文生舞譜」には、簫蹲身せうすんしんという型の名はみえない。この、簫蹲身せうすんしんの一つ前の型は、裏看尖うらみけんせんで、簫蹲身せうすんしんの一つ後の型は、外拱手うへあしである。このことに鑑み、『節次』五「文生舞譜」において、簫存身せうぞんしんと記載されている型が「蹲うすくまる」の意と合致し、ここでの「舞譜」の型としての流れにも適合していることから、簫存身せうぞんしん（21頁、Figure 8. 参照）の型を示しておく。詳細は「研究篇」に委ねたい（21頁、Figure 8. の各図参照）。



正垂籥

鐘



正籥舞



對拱手

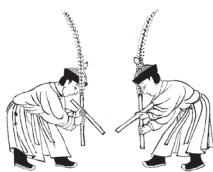
拂



對籥舞

舞

再



對一揖

事



裏擺手

翼



外托羽



朝上平\*搭羽

昭



外雙舞



朝上交羽籥

兮



正躬身

進



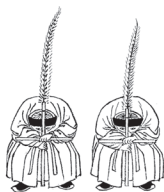
正斜籥

兮



平籥羽一舞

瑤



正一揖

觴



睽 第三句

簫蹲身\*



顏

外拱手



容

背一揖



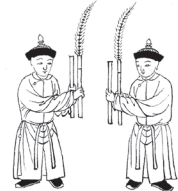
蒼

背雙舞



與

背簫舞



次

對雙舞



几

朝上簫托羽



兮

外豎簫



第

正簫舞



輝

對垂羽



肅

外看尖



煌

朝上橫舒簫



將

裏看尖



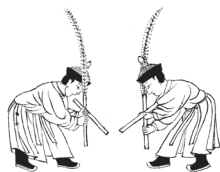
生 第五句

懷羽籥



穆 第四句

對擺羽



民

對一揖



穆

再擺羽



望

朝上籥支羽



居

朝上分羽籥



澤

對豎籥斜肩羽



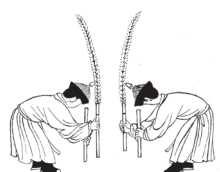
和

對橫羽



歆

對籥舞



兮

低豎籥



氣

正托籥



兮

朝上豎羽籥



洋

籥托羽



洋

背籥舞

榮 第六句



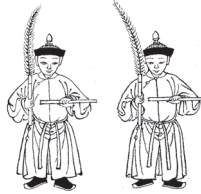
外雙舞

泉



對躬身

瑞



正橫簫

露



對羽舞

仰



對簫舞

慶



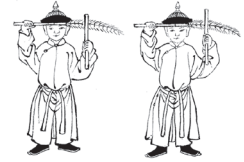
正拱手

兮



對簫舞

睨



朝上高搭\*羽

無



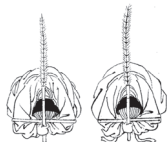
一長跪

玉



裏看尖

疆



一叩首

房



豎羽簫



Figure 8-3. 『大清会典図』にみえる舞型の説明（四六06a）

睽

右 左

正面身微蹲籥衡膝上羽植

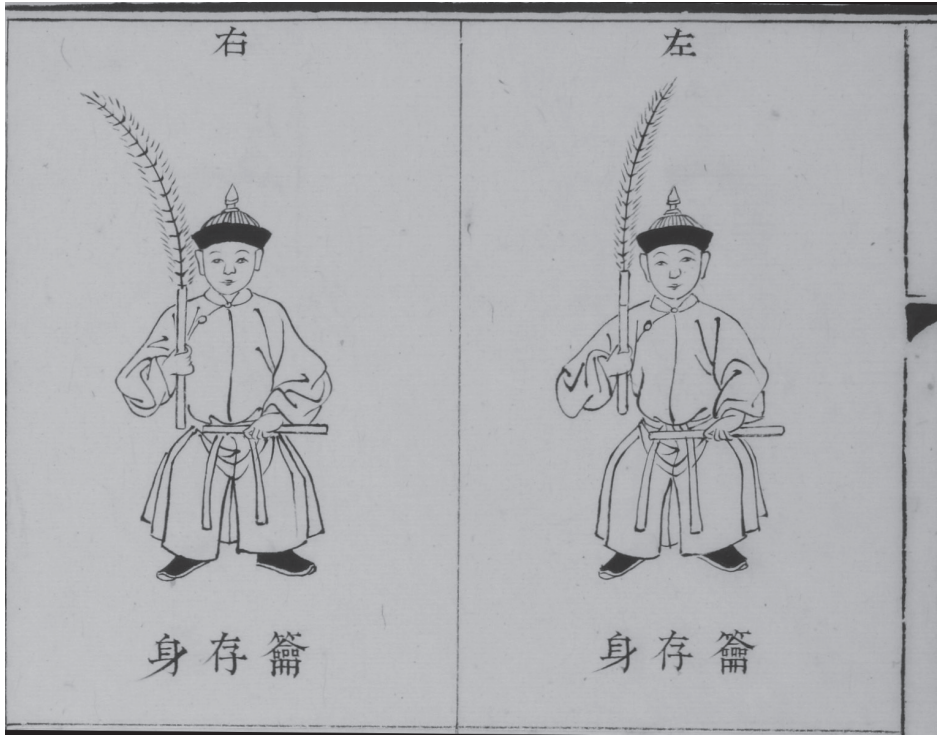


Figure 8-1. 文生舞譜にみえる“籥存身”（『節次』五42b上）

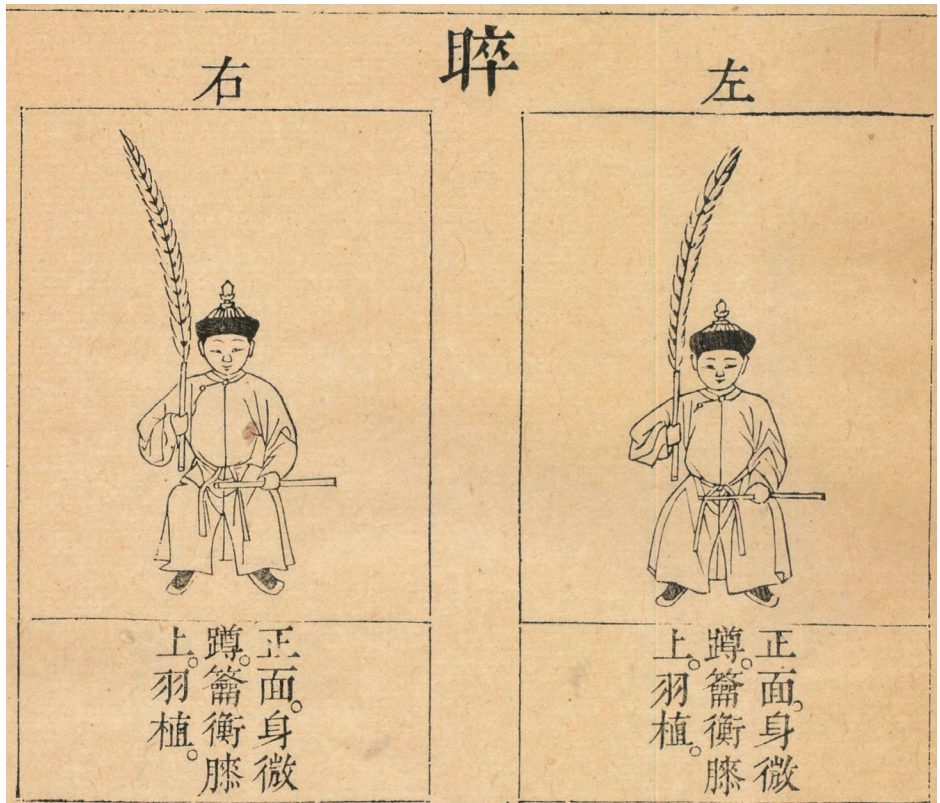
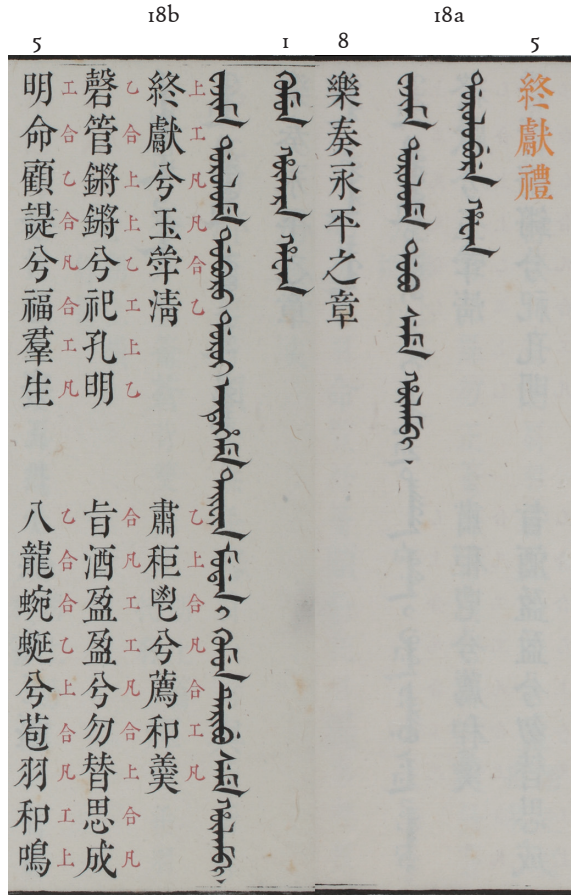


Figure 8-2. 『律呂正義後編』にみえる舞型とその説明（二20b上）



終獻禮…終獻の儀礼。「終獻」は、「献」の儀礼として三番目にお開きの酒を献ずること、三番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

wajima dorolome dobo seme hūlambī,

永平之章…「永久なる太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

wajima dorolome doboro doroi enteheme tain mudan i kumun deribu seme hūlambī,

終獻兮玉\*罍清

肅\*柎鬯兮薦和羹

\*磬\*管鏘鏘兮祀孔明

旨酒盈盈兮勿替思成

明命顧諟兮福羣生

\*八龍蜿蜒兮苞羽和鳴

罍…さけつぼ。

柎鬯…柎くつひに鬯くつひ（香草の鬱金香から採った鬱金香）を加えて醸した香酒で祭祀で神にお供えるために用いる。

磬…玉あるいは石を削って「へ」の字形に造った楽器で磬虚けいこに懸けて打ち鳴らす。

管…竹に穴をあけて造った笛。

八龍…八匹の龍で、中国古代における伝説上の帝王である伏羲ふくぎの兄弟八人。



【訳文】

\*終献礼

典儀官が

「終献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「永平之章」

唱楽官が

「終献礼の永平之章を始めよ」と唱す。

終献の儀礼にてございます〜ああ〜

玉製の\*罌かはこの上なく清らかなり〜

恭しく\*柷きよの香酒をお供え致します〜ああ〜

謹んで一緒に奉りますものはあつものは羨なり〜

\*磬けいと\*管かんの音色は鳳凰が鳴いているようございます〜ああ〜

祭祀は甚だ明らかでございます〜

この上なき美酒が満ち溢れて〜ああ〜

衰えることはございせん〜思慕の念が湧きあがり続けております〜

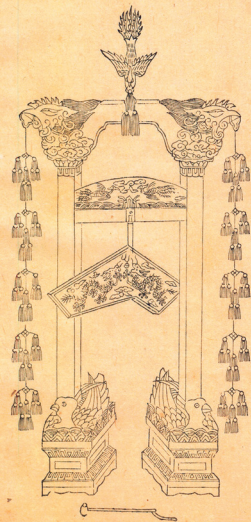
授かりし天命に対しては常に我が身を顧みて正し〜ああ〜

幸いを多くの人民にほどこし〜

\*八龍はうねうねと神体をくねらせながら天空を舞い〜ああ〜

舞人が手に持つ籥やくと羽うが調和し応じ合っております〜

朝會中和韶樂特磬第一黃鐘



御製特磬銘  
子與有言金聲五振  
一處無雙九成述運  
準今酌古既繁鐘  
磬不可闕除理始終  
和闐我鑿玉山是龍  
依度採取以念岩叔  
四賓同其質則適  
圖經所傳浮磬涇水  
誰識見之鳴球丸此  
法  
天則一鼓三依我緯如獸  
地股一振三依我緯如獸  
乾儀  
祖德真繩永標是萬國  
益寧保泰敢或伐功  
敬酬歲吉辛巳乾隆

Figure 9. 圓丘壇で使われる特磬〔黄鐘の音が出る〕（『皇朝礼器図式』 八29a）

文生舞譜

第一句終正擎箏獻對托羽兮外雙舞玉箏托羽

竿外肩箏清正一揖

第二句肅正別尼拒對箏舞舞鬯裏豎箏兮高搭羽

薦對雙舞和朝上豎舒箏羹倒橫羽

第三句磬外肩羽管對箏舞舞鏘背一揖鏘背平身

兮正橫羽祀裏豎箏孔背箏舞明裏一揖

第四句旨懷羽箏酒肩羽箏盈對垂羽盈朝上高搭羽

兮對羽舞勿正箏舞替橫舒箏思對斜箏

成朝上高拱手

第五句明裏肩羽命豎舒箏顧斜托羽媿裏雙舞

兮背躬身福正一揖羣正平身生對舒羽

第六句八對斜箏龍正橫羽蜿背斜箏蜒正羽舞

兮背舒羽苞一朝上羽正一揖和一長跪

鳴一叩首

文生舞譜：「終獻礼」の「永平之章」に合わせて舞う。

擎…ささげる。

舒…のべる。

\* 文生舞譜

終 第一句



正擎\*籥

肅 第二句



正別足

磬 第三句



外肩羽

獻



對托羽

柷



對籥舞

管



對籥舞

兮



外雙舞

鬯



裏豎籥

鏞



背一揖

玉



籥托羽

兮



高搭羽

鏞



背平身

罍



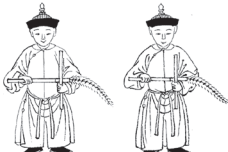
外肩籥

薦



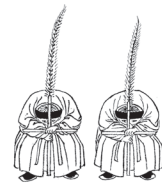
對雙舞

兮



正橫羽

清



正一揖

和



朝上豎舒\*籥

羹



倒橫羽



旨 第四句

懷羽籥



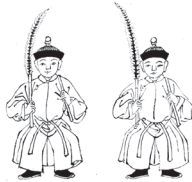
酒

肩羽籥



盈

對垂羽



正籥舞



勿

盈

朝上高搭羽



橫舒籥

替



對羽舞

兮



祀

裏豎籥



對斜籥

思



孔

背籥舞



朝上高拱手

成



明

裏一揖



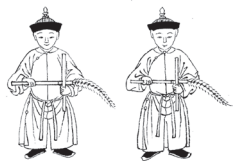
八 第六句

對斜籥



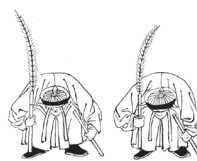
明 第五句

裏肩羽



龍

正橫羽



命

豎舒籥



蜿

背斜籥



顧

斜托羽



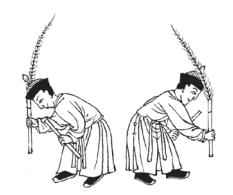
蜓

正羽舞



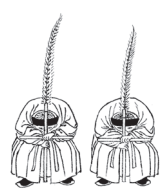
覬

裏雙舞



兮

背舒羽



福

正一揖



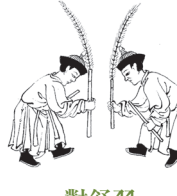
兮

背躬身



羣

正平身



生

對舒羽





Figure 10-1. 圓丘壇の第一成（最上段）中央に立つPage氏  
(1918-1919年頃撮影)

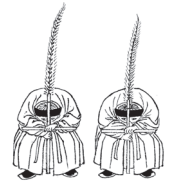


Figure 10-2. 圓丘壇で神位や供えものをおおう神幄とその手前に立つ  
石橋丑雄氏 (cf. p. 85, Figure 17.)



苞

一朝上



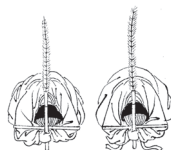
羽

正一揖



和

一長跪



鳴

一叩首



Figure 10-3. 南東からみた圓丘壇（1900年頃撮影）

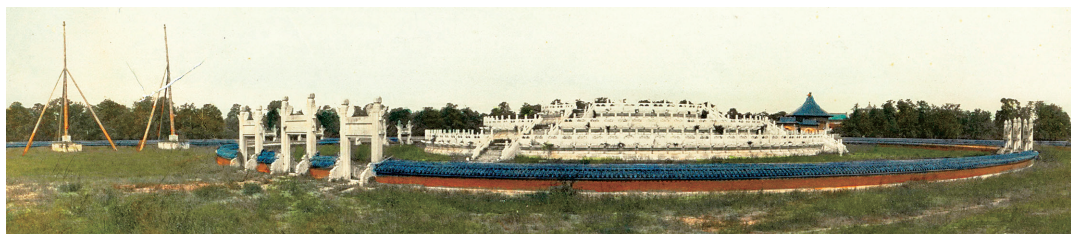


Figure 10-4. 圓丘壇全景（撮影年不明）



撤饌禮

撤饌禮

撤饌禮

樂奏熙平之章

樂奏熙平之章

樂奏熙平之章

一陽復兮協氣伸

旋廢徹兮敢逡巡

瞻九閭兮轉洪鈞

盥薦畢兮精白陳

禮將成兮樂欣欣

福施下逮兮佑此人民

撤饌禮…お供え物をひきあげたもう儀礼。「饌」は、お供えした品。

dorolobure hafan

doboho jaka be bederebu seme hūlambi,

熙平之章…「光り輝ける誉れ高き太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

doboho jaka be bederebu doroi eldengge taifin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

\*一陽復兮協氣伸

旋廢徹兮敢逡巡

瞻九閭兮轉洪鈞

盥薦畢兮精白陳

禮將成兮樂欣欣

福施下逮兮佑此人民

一陽復…「一陽來復」のこと。『易経』「復・本義」に、陰暦10月は坤の卦で陰の気が極まり、陰暦11月は復の卦で一陽が初めて生じるとあることから、転じて、寒い冬が過ぎて暖かな春が来る意や、悪い状態が終わって幸いが来る事物回復の意を表す。



【訳文】

\*撤饌礼

典儀官が

「饌をひきあげたまえ」と唱す。

楽奏「\*熙平之章」

唱楽官が

「撤饌礼の熙平之章を始めよ」と唱す。

寒い冬は過ぎ去って暖かな春が到来し〜ああ〜

陰の気と陽の気とが調和して和らぎやわこの上なく広がっております〜

手を洗い清めまして神に供することを悉く尽くし〜ああ〜

清廉潔白なる心で申し述べ連ねます〜

すみやかにお供え物を引き上げて綺麗に致しますことには〜ああ〜

敢えて躊躇しております〜

祭祀の礼は今まさに成就致そうとしており〜ああ〜

この上なく嬉しく悦びにあふれております〜

皇天上帝のおいでのなる紫微宮の九門を仰ぎ見まして〜ああ〜

心は移ります〜万物をお創りたもうたる天に〜

福を施し天下に広く及ぼし〜ああ〜

天祐はこれこそ人民に下されしものなり〜

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮

送神禮…神をお見送りたもう儀礼。

dorolobure hafan

enduri be fudere seme hūlambj,

清平之章…「清らかに澄み渡れる太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

enduri be fudere doroi bolgo taifin mudan i kumun deribu seme hūlambj,

升中告成兮瞻藹壇場 穆思廻盼兮雲駕洋洋

臣求時惠兮感恩馨香 願蒙博産兮多士思皇

天施地育兮百穀蕃昌 殖我嘉師兮正直平康

20a

8

1

20b

6

6

【訳文】

\*送神礼

典儀官が

「神をお見送りましたまえ」と唱す。

楽奏「\*清平之章」

唱楽官が

「送神礼の清平之章を始めよ」と唱す。

天に謹んでご報告申し上げます。お祀りすることがうまくいきましたことをああ。

日が昇る前の暗いなかに祭祀の壇はございました。

謹んで思いめぐらし顧みまするにああ。

皇天上帝の御車はこの上なく気高く見事に美しく。

皇天上帝の臣下たる予の心は常なる天恵をお願い致したくああ。

深く心に感じ思いまするに。芳しき香りに喩えられ。この上なく徳化されける。

お願い申し上げます。多大なる盛業をいただけますようああ。

幾多の優れた学徳を有する者たちが皇天上帝を思いお慕い致しております。

天が施し地が育みああ。

多くのさまざまな穀物がこの上なく豊かに実ります。

お育て下さい。我を優れた統治者となれるようああ。

心真つ直ぐに邪まなところなく平穩に致しております。

望燎禮

望燎禮

望燎禮

樂奏太平之章

望燎禮

望燎禮

隆儀告備兮誠既將

雷車電邁兮九龍驥

蒸民蒙福兮順五常

有虔秉火兮炳越芳

紫氛四塞兮靈旗揚

惟予小子兮敬戒永臧

望燎禮：燎（かがり火）所に詣でて燎を仰ぎ見たもう儀礼。

dorolobure hafan

dejire be tuwana seme hūlambi,

太平之章…「この上なく大いなる太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

dejire be tuwanara doroi unesi taiḥn mudan i kumun deribu seme hūlambi,

隆儀告備兮誠既將

雷車電邁兮九龍驥

蒸民蒙福兮順五常

有虔秉火兮炳越芳

紫氛四塞兮靈旗揚

惟予小子兮敬戒永臧

20b

8

7

21a

7

1



【詠文】

\*望燎礼

典儀官が

「燎〔かがり火〕所に詣でて燎を仰ぎ見たまえ」と唱す。

楽奏「\*太平之章」

唱楽官が

「望燎礼の太平之章を始めよ」と唱す。

儀を尊び、皇天上帝に申し上げます、充分に整えますと、ああ、

誠は既にお捧げしております、

深く慎み火の手に取りますれば、ああ、

光り輝き芳しく香りの立ち上りますこと、誉れのごとくなり、

雷が轟き電光がばつと走り、ああ、

九匹の龍が首を上げて天に躍り上ることくなり、

紫色の雲気が四方に広がり埋め尽くし、ああ、

昇龍を描いた神の御旗がはためきます、

幾多の人民が天恵の福を蒙り、ああ、

仁・義・礼・知・信の五常の徳目を順行せり、

ただ予は至らぬ小子でございますれば、ああ、

身を慎み戒めて永久に教えを乞うばかりなり、

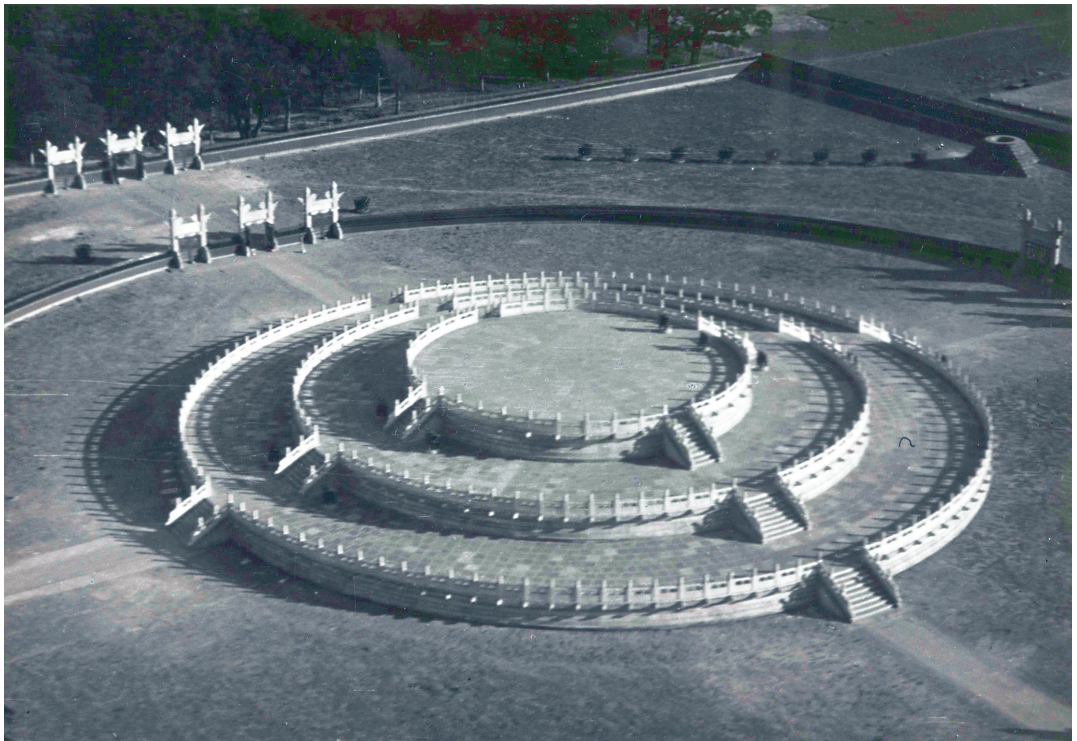


Figure 11. 北西上空からみた圓丘壇（1940年頃撮影）

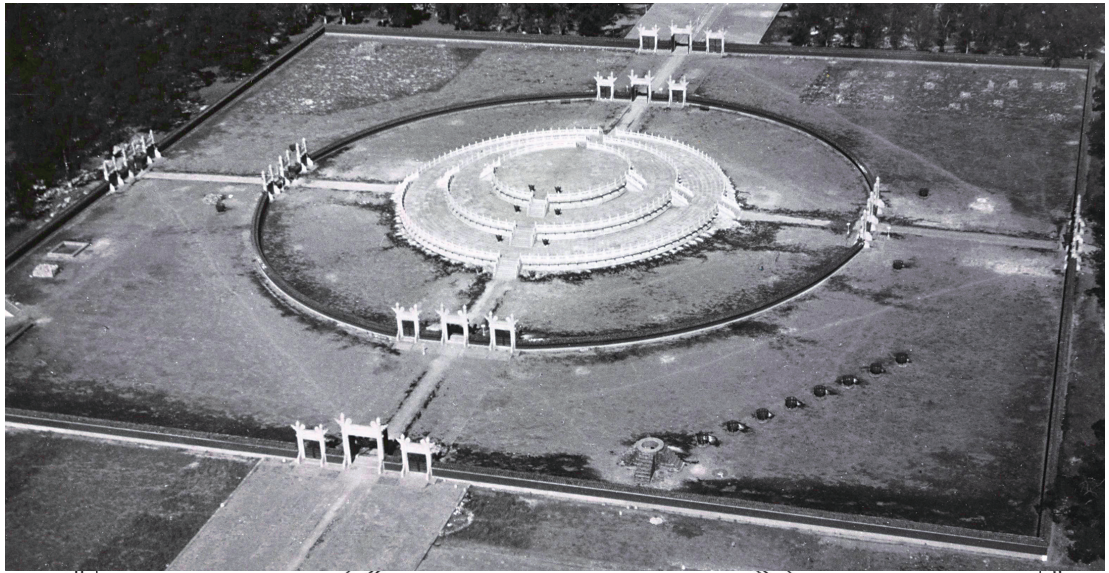


Figure 12. 南東上空からみた圓丘壇（一九四〇年頃撮影）

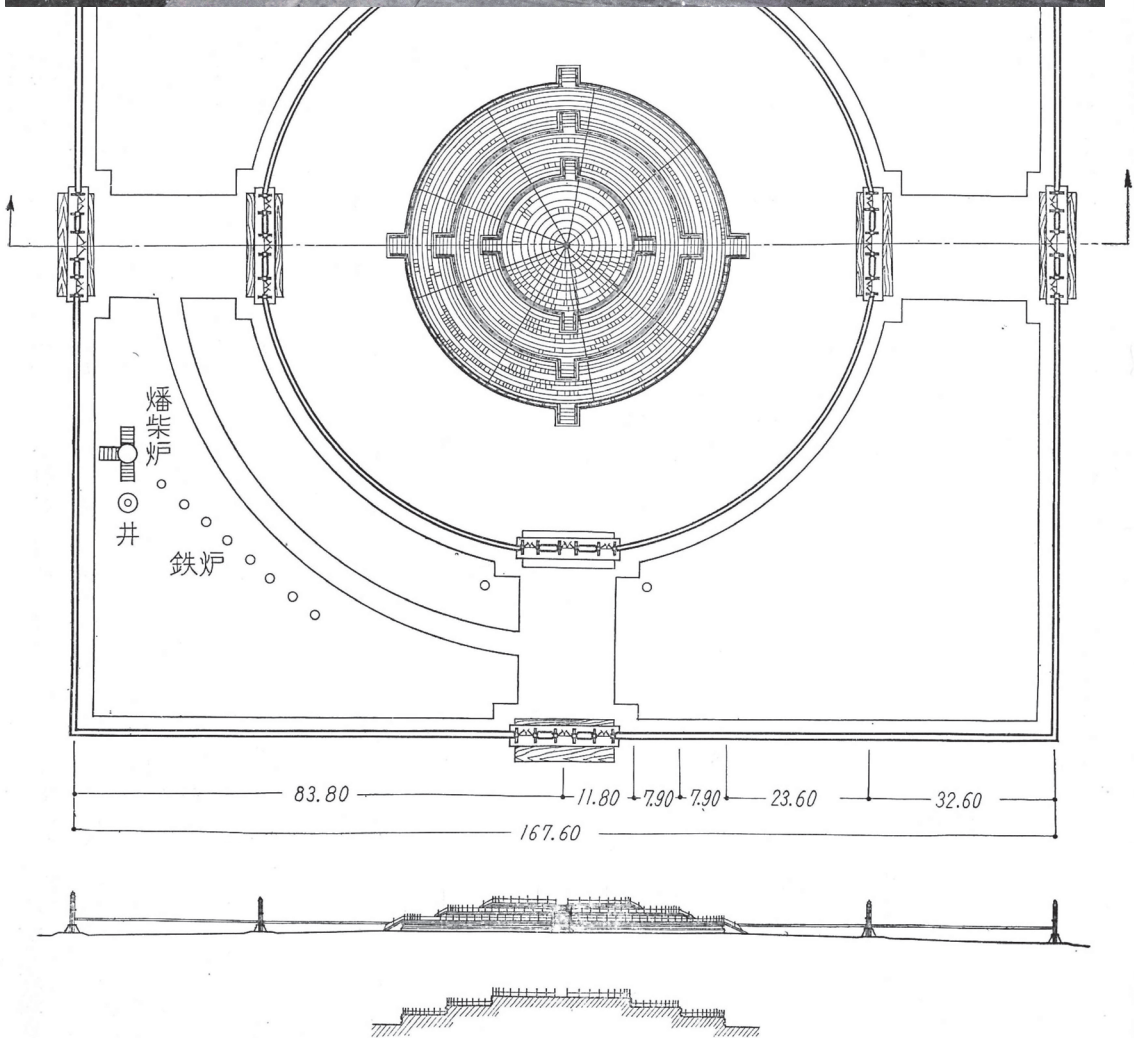


Figure 13. 圓丘壇の平面測量図

三 園 丘 壇 常 雩 禮



圜丘壇常零禮 孟夏擇吉日祭 日出前七刻祭

致齋三日

樂章黃鐘 宮為

倍夷則 起調

簫譜 各章皆係頭一字末一字用上字皆係尺四  
笛譜 各章皆係頭一字末一字用凡字皆係合尺  
二字除而不用

迎神禮

樂奏

樂奏

樂奏

樂奏

樂奏

粒我蒸民兮神降嘉生

龍見而雩兮先民有程

念我農兮心靡寧

靈皇皇兮穆以清

雨暘時若兮百穀用成

臣膺天祚兮敢不祗承

肅明禋兮殫精誠

金支五色兮罨靄蜺旌

粒我蒸民兮神降嘉生

龍見而雩兮先民有程

念我農兮心靡寧

靈皇皇兮穆以清

雨暘時若兮百穀用成

臣膺天祚兮敢不祗承

肅明禋兮殫精誠

金支五色兮罨靄蜺旌



【訳文】

圓丘壇\*常等礼

陰曆四月の吉日を選んで祭を行う。\*致齋は三日間。

太陽が昇る時刻より\*七刻前から始める祭。

\*樂章\*黄鐘 「樂章」は、「黄鐘」の音律、「五音」の「\*宮〔土〕」の音声。

\*倍\*夷則 夷則の倍律に樂声と音律を合わせる。

簫\*譜 「圓丘壇の祭祀において簫譜を」樂奏するそれぞれの章では、全て、

冒頭の一字と末尾の一字に「上」字の音符を用い、全て「尺」と「四」の

二字の音符は除いて使用しない。この本樂章では全体に亘って、ただ「簫

譜」だけを記載している。

笛\*譜 「圓丘壇の祭祀において笛譜を」樂奏するそれぞれの章では、全て冒

頭の一字と末尾の一字に「凡」字の音符を用い、全て「合」と「尺」の二

字の音符は除いて使用しない。

迎神礼

典儀官が

「神をお迎えたまえ」と唱す。

樂奏 「\*霽平之章」

唱樂官が

「迎神礼の霽平之章を始めよ」と唱す。

我が幾多の人民を一人一人充分に養うためにああ

上帝は降臨なされてお告げくださる五穀豊穰など多くの瑞祥を

雨が降ってほしい時に雨が降り晴れてほしい時に晴れることになれば

ああ

あらゆる穀物はそのおかげをもちまして実を結ぶことができます

水神たる龍は農地の在り様をみて降雨を乞い願ひああ

古の賢者は農業の方式を見つけたり

上帝の臣下たる予は天からの福祿をいただきああ

敢えて謹んでお受けしないことなどは致しませぬ

いつも心に深く念うのは我が幾多の人民のことああ

心深く常に去来しことは人民の安寧なり

謹んで身を清めて天をお祀り致しますああ

誠心誠意の全てを込めまして

大いなる上帝はこの上なく煌びやかにして輝きわたれりああ

天地の気は穏やかにして清らかなり

祭祀の樂器に備えたる金の支柱は五彩を放ちああ

覆いの色合い・立ち込める霞・空にかかる虹・旌もまたこの上なき彩を

放つなり

奠玉帛禮

do-ro-lo-bu-re ha-fan

gu su-je do-bo se-me hi-lam-bi

樂奏雲平之章

kun-mun hi-lara ha-fan

雲平之章…「雲海広がりし太平」という調子の樂。  
kunun hulara hafan  
gu suje doboro doroi tulhušche taifin mudan i kunun deribu seme hūlambi,

玉帛載陳兮磬管鏘鏘 爲民請命兮惕弗敢康

上 上 合 上 凡 乙 合 上 乙  
玉帛載陳兮磬管鏘鏘

上 上 合 上 凡 乙 合 上 乙  
玉帛載陳兮磬管鏘鏘

上 乙 合 乙 上 乙  
令清和兮遂百昌

上 乙 合 乙 上 乙  
令清和兮遂百昌

上 上 合 乙 上 上 凡  
日照九兮時雨滂

上 上 合 乙 上 上 凡  
日照九兮時雨滂

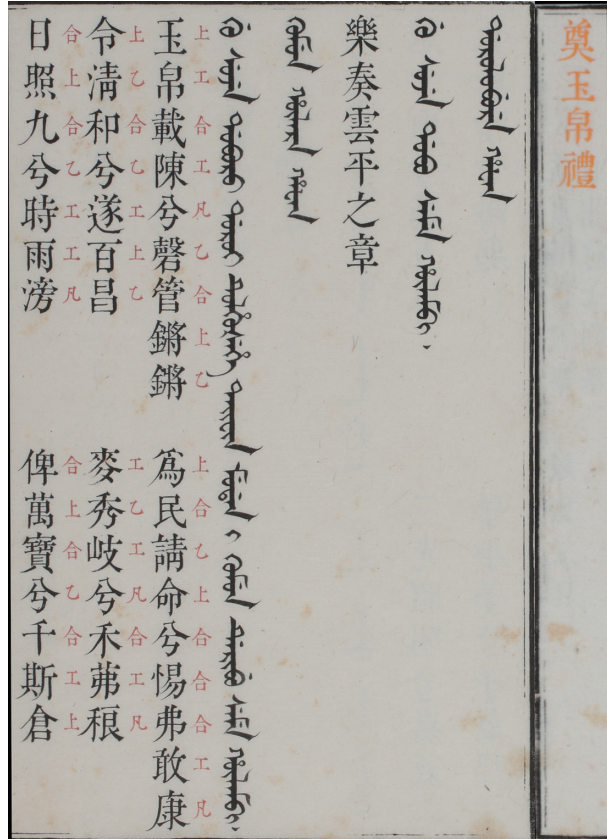
合 上 合 乙 上 上 凡  
俾萬寶兮千斯倉

合 上 合 乙 上 上 凡  
俾萬寶兮千斯倉

磬…玉あるいは石を削って「へ」の字形に造った楽器で磬虚けいこに懸けて打ち鳴らす。

管…竹に穴をあけて造った笛。

九…前後の歌詞に鑑み、ここでは九穀きゅうこく〔黍・稷・秫・稻・麻・大豆・小豆・大麥・小麦〕の略記と解釈した。



【訳文】

\*奠玉帛礼

典儀官が

「玉帛を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*雲平之章」

唱楽官が

「奠玉帛礼の雲平之章を始めよ」と唱す。

玉と帛は几に載せてならべてございます〜ああ〜

\*磬と\*管の音色は鳳凰が鳴いているようございます〜

人民のために天命を請います〜ああ〜

行ないを慎み決して安楽に浸ることは致しません〜

この上なく世の中が治まって平穩であれば〜ああ〜

万事何事も盛んになります〜

麦が生育して高くのび〜ああ〜

稲も高く茂り害毒に喩えられる根を遥かに凌駕しております〜

日光は幾多の穀物を照らし〜ああ〜

常に芳醇なる雨が注ぎ潤す〜

あらゆる穀に益をなし〜ああ〜

延いては穀を取める数多の倉に裨益せり〜

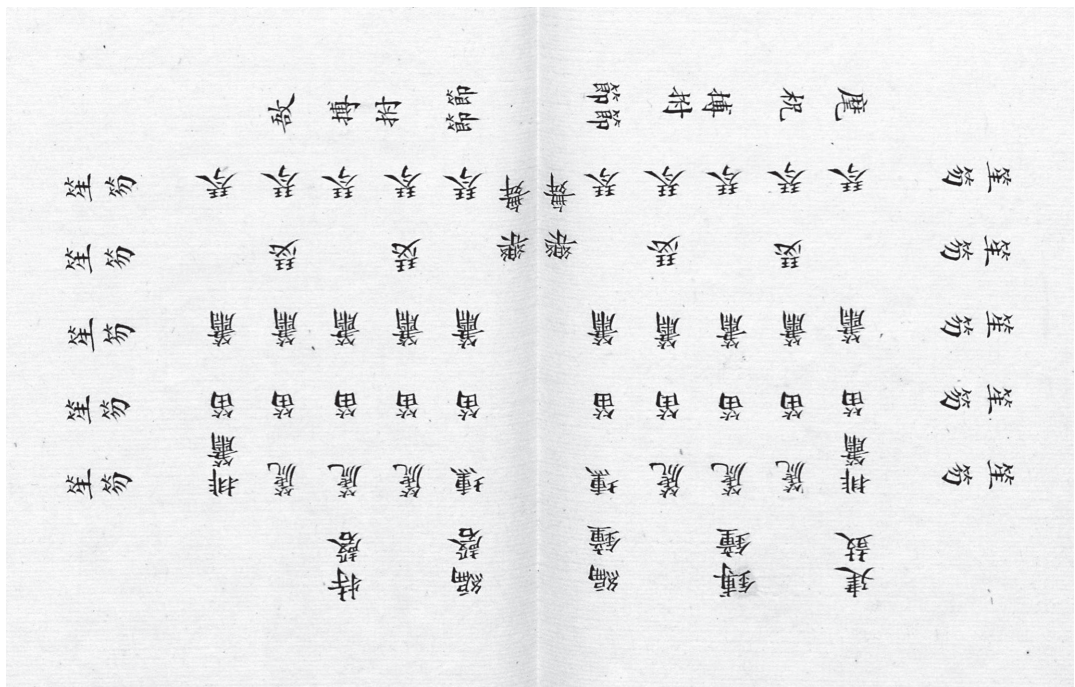


Figure 14. 圓丘壇の祭祀における樂器の配置状況 (『大清會典圖』二〇23b+24a)

進俎禮

進俎禮

進俎禮

樂奏需平之章

進俎禮

進俎禮

越十雨兮越五風

天所子兮渺躬

紛總總兮賴皇穹

進俎禮

三光昭明兮嘉氣蒙

予小子兮子萬邦

惇牡鷗亨兮達臣衷

進俎禮…俎そ(まないた)に載せた肉を供えまつる儀礼。

dorolobure hafan

yali dobo sene hūlambi,

需平之章…「雲切れの時機を待つて絶え間なく続く太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

yali doboro doroi dahanduhai taijin mudan i kumun deribu sene hūlambi,

越十雨兮越五風

天所子兮渺躬

紛總總兮賴皇穹

三光昭明兮嘉氣蒙

予小子兮子萬邦

惇牡鷗亨兮達臣衷

惇牡：黄色で脣の黒い牡牛。なお、七尺の大牛を惇という。



【訳文】

\*進組禮

典儀官が

「[俎に載せた]肉を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*需平之章」

唱樂官が

「進組礼の需平之章を始めよ」と唱す。

豊年日和が続くことは十日に一度の程よい降雨よりも遙かにすぐれゝああ  
順調な氣候が続くことは五日に一度の程よい風の吹き加減よりも遙か

によくゝ  
日・月・星の三光はこの上なく明るく輝きゝああゝ

めでたき氣に覆い包まれておりますゝ  
天が子とするところはゝああゝ

ごくごく小さき身体にしてゝ  
予は至らぬ小子なれどもゝああゝ

我が子であるところは天下の諸国なりゝ  
ごたごたすること数え切れなくゝああゝ

頼みの綱はただ天空の上帝様ゝ  
\*特牲を賜てすすめ奉りますのでお受け下さいますようゝああゝ

どうか打ち明けてお届けくださいゝ上帝の臣下たる予にゝ御心の内なるをゝ

初獻禮

初獻禮

樂奏霖平之章

霖平之章

酌彼兮疊洗

愧明德兮維馨

願大父兮念茲衆子

假黍稷兮誠將

穆將愉兮綏以豐穰

初獻禮…初獻の儀礼。「初獻」は、祭祀儀礼で初めて酒を献ずることで、一番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sucungga dorolome dobo seme hūlambi,

霖平之章…「長雨降りしき太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

sucungga dorolome dobororo doroi agaha taijin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

酌彼兮疊洗

合上乙合上  
酌彼兮疊洗  
合上乙合上  
酌彼兮疊洗

愧明德兮維馨

合上乙合上  
愧明德兮維馨  
合上乙合上  
愧明德兮維馨

願大父兮念茲衆子

合上乙合上  
願大父兮念茲衆子  
合上乙合上  
願大父兮念茲衆子

假黍稷兮誠將

合上乙合上  
假黍稷兮誠將  
合上乙合上  
假黍稷兮誠將

穆將愉兮綏以豐穰

合上乙合上  
穆將愉兮綏以豐穰  
合上乙合上  
穆將愉兮綏以豐穰

疊洗…大きな酒樽。  
椒…前後の歌詞に鑑み、ここでは椒酒の略記と解釈した。椒酒は、山椒や様々な漢方薬材を調合して醸して造る酒で神に献上する。また屠蘇酒として正月元旦の祝い酒としても用いる。

明德兮維馨…前後の歌詞に鑑み、ここでは『書経』にみえる「我聞、曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德維馨」における「明德維馨」の略記と解釈した。

黍稷…前後の歌詞に鑑み、ここでは『書経』にみえる「我聞、曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德維馨」における「黍稷非馨」の略記と解釈した。

【訳文】

\*初献礼

典儀官が

「初献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*霖平之章」

唱楽官が

「初献の霖平之章を始めよ」と唱す。

美酒を酌くんでおりますのは、それ、あのように、ああ、

この上なき大きな酒樽から、

香ばしく漂よいます至上の香りは、ああ、

\*椒酒から立ち上る香ばしい山椒の香り、

この身は愧はじ入るばかりです、神にお供えする黍もちまきと稷うるちまきの香りではなく、

人の備える\*明德の力があつてこそ、ああ、

これこそが天を感じしめるというのに、

せめて神にお供えする\*黍もちまきと稷うるちまきの芳かほしい香りにかりてでも、ああ、

予の誠心まことこころをお奉たげ致いたしたく、

乞こい願ねがひ奉たります、上帝に、ああ、

ここに固く心に留め置きます、万民のこと、

万民の心が和らぎ、喜び楽たのしみの溢あれること、ああ、

万民が満足し安心できます、五穀豊穰なるにより、

武生舞譜

第一句酌微向外彼對揚舞兮外看尖疊正揚舞

洗微向裏

第二句飶背擺牌芬正垂舞兮背擺牌椒正開牌

香正收斧

第三句愧正躬身明對擺牌德正開牌兮正垂舞

維裏看尖馨背垂舞

第四句假正揚舞黍裏看尖稷正開牌兮正開斧

誠微向外將對一揖

第五句願外擺手大正躬身父外擺手兮裏擺手

念正拱手茲一對面衆正垂舞子對擺牌

第六句穆外看尖將外擺手愉一對面兮正躬身

綏背揚舞以一朝上豐一長跪穰一叩首

武生舞譜：「初獻礼」の「霖平之章」に合わせて舞う。

裏看尖：尖頭よりも身体を低く屈める動作。



【舞譜】

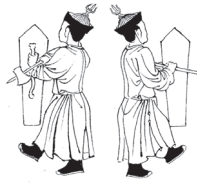
武生舞譜

酌 第一句



微向外

餽 第二句



背擺牌

愧 第三句



正躬身

彼



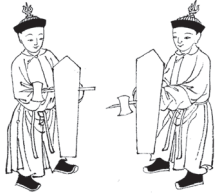
對揚舞

芬



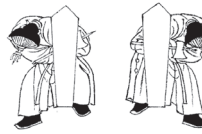
正垂舞

明



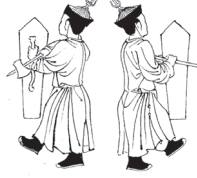
對擺牌

兮



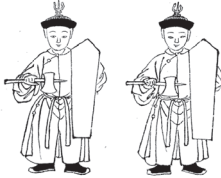
外看尖

兮



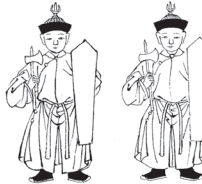
背擺牌

德



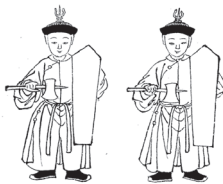
正開牌

疊



正揚舞

椒



正開牌

兮



正垂舞

洗



微向裏

香



正收斧

維



\*裏看尖

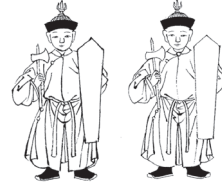
馨



背垂舞



外擺手



正揚舞

願 第五句

假 第四句



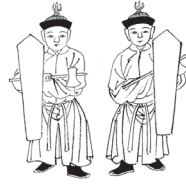
正躬身

大



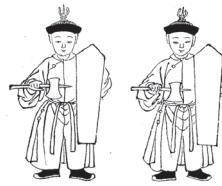
裏看尖

黍



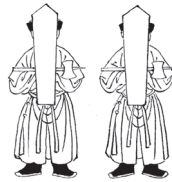
外擺手

父



正開牌

稷



正拱手

念



裏擺手

兮



正開斧

兮



一對面

茲



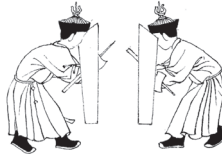
微向外

誠



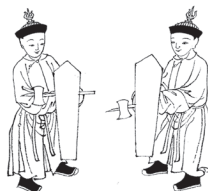
正垂舞

衆



對一揖

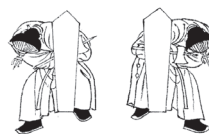
將



對擺牌

子

第六句  
穆



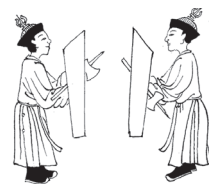
外看尖

將



外擺手

愉



一對面

兮



正躬身

綏



背揚舞

以



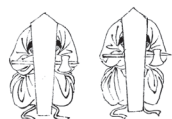
一朝上

豐



一長跪

穰



一叩首

亞獻禮

dorolobure hafan

sirame dorolome dobo seme hūlambi,

樂奏露平之章

kumun hūlara hafan

再酌兮醕清

仰在上兮明明

庶來格兮鑒誠

合萬國兮形神精

仰在上兮明明

曷敢必兮屏營

承神至尊兮思成

亞獻禮…亞獻の儀礼。「亞獻」は、祭祀儀礼で二番目に酒を献すること、二番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sirame dorolome dobo seme hūlambi,

露平之章…「この上なく潤える太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

sirame dorolome doboroi simebuche taifin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

再酌兮醕清

仰在上兮明明

庶來格兮鑒誠

曷敢必兮屏營

合萬國兮形神精

承神至尊兮思成

在上兮明明…前後の歌詞に鑑み、ここでは『書経』にみえる「穆穆在上、明明在下」の略記、あるいは『詩経』にみえる「明明在下、赫赫在上」の略記と解釈した。



【訳文】

\* 亜献礼

典儀官が

「亜献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*露平之章」

唱楽官が

「亜献礼の露平之章を始めよ」と唱す。

かさねて御神酒を酌みく献じ奉りますくああく

聖人のごとき清んだこの上なき美酒をく

謹んで仰ぎ見ますればく天上に在らせましては麗しくくああく

光明明るく光り輝いておりますく

乞い願ひ上げ奉りますく祭祀の場にお越し下さいますことをくああく

予自ら戒め鑑みて誠心を明らかに致したく存じますく

なんぞ敢えて必ず致すことなどありましようかくああく

心定まらずおそれ狼狽えることなどく

天下の諸国は一つになりくああく

則に致したく存じますく上帝の神霊をもつてく

上帝のこの上なき素晴らしき尊さをうけただけのことになりますればく

ああく

願ひは成就致しまするく

文生舞譜

第一句再斜擎籥酌背羽舞兮微向裏醑對雙舞

清正一揖

第二句仰高搭羽在一對面上正拱手兮裏看尖

明對羽舞明朝上高搭羽

第三句庶對躬身來朝上斜擊籥格對橫羽兮裏肩羽

鑿外肩籥誠豎羽籥

第四句曷背托羽敢背一揖必正橫籥兮背豎籥

屏背躬身營裏一揖

第五句合裏豎籥萬懷羽籥國正橫羽兮籥蹲身

形對籥舞神正拱手精豎舒籥

第六句承背斜籥神正躬身至高拱手尊對一揖

兮一朝上思一長跪成一叩首

文生舞譜：「亜献礼」の「露平之章」に合わせて舞う。

撃：ささげる。

籥蹲身：原文に「籥蹲身」と記載されている「舞譜」の型が『節次』五「文生舞譜」にはみえない。この「籥蹲身」と記されている「舞譜」の型の一つ前の「舞譜」の型は「正横羽」で、「籥蹲身」の一つ後の「舞譜」の型は「對籥舞」である。このことに鑑み、『節次』五「文生舞譜」において「籥存身」と記載されている「舞譜」の型が「蹲（うづくまる）」の意と合致し、「舞譜」の型としての流れにも適合していることから、他にも見える「籥蹲身」の場合と同じく「籥存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。

【舞譜】

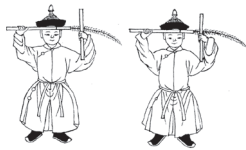
\* 文生舞譜

再 第一句



斜擊\*箭

仰 第二句



高搭羽

庶 第三句



對躬身

酌



背羽舞

在



一對面

來



朝上斜擊箭

兮



微向裏

上



正拱手

格



對橫羽

醕



對雙舞

兮



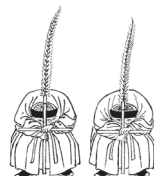
裏看尖

兮



裏肩羽

清



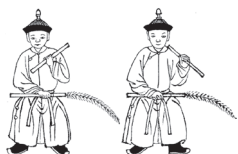
正一揖

明



對羽舞

鑒



外肩箭

明



朝上高搭羽

誠



豎羽箭

第四句  
曷



背托羽

第五句  
合



裏豎籥

第六句  
承



背斜籥

敢



背一揖

萬



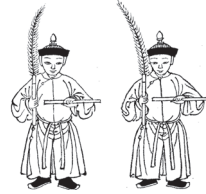
懷羽籥

神



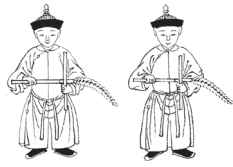
正躬身

必



正橫籥

國



正橫羽

至



高拱手

兮



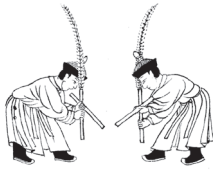
背豎籥

兮



籥蹲身\*

尊



對一揖

屏



背躬身

形



對籥舞

兮



一朝上

營



裏一揖

神



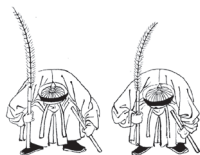
正拱手

思



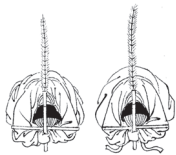
一長跪

精



豎舒籥

成



一叩首





Figure 15. 圓丘壇常雩礼と天神壇で着る文舞生の衣服 (左)・武舞生の衣服 (右) (『節次』 四02b・02a)

終獻禮

終獻禮

終獻禮

終獻禮…終獻の儀礼。「終獻」は、「献」の儀礼として三番目にお開きの酒を献ずることで、三番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

wajima dorolome dobo seme hūlambi,

樂奏霑平之章

樂奏霑平之章

樂奏霑平之章

霑平之章…「潤い蒙り続ける太平」という調子の樂。  
霑…うるおい・うるおう。

kunun hūlara hafan

wajima dorolome doboro doroi sirabaha taim mudan i kunun derbu seme hūlambi,

三酌兮成純

多士兮駿奔

維蕃釐兮媪神

備物致志兮敬陳

靈承無斁兮明禋

雨留甘兮良苗懷新

備物致志兮敬陳

靈承無斁兮明禋

雨留甘兮良苗懷新

維蕃釐兮媪神…前後の歌詞に鑑み、ここでは『漢書』『礼楽志』にみえる「惟泰元尊、媪神蕃釐」と同じ意の歌詞と解釈した。

良苗懷新…前後の歌詞に鑑み、ここでは陶潜が「癸卯歲始春懷古田舍詩」で詠んだ「平疇交遠風、良苗亦懷新」と同じ意の歌詞と解釈した。

【訳文】

\*終献礼

典儀官が

「終献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*霑平之章」

唱楽官が

「終献礼の霑平之章を始めよ」と唱す。

三たび御神酒を酌み、献じ奉ります。ああ

いつわりのない忠義の心でお祀りすることが成就致します。

祭祀の器具とお供え物は誠心の限りを尽くしましたものであ

誠心誠意謹んで備え並べております。

幾多の優れた学徳を有する者たちが上帝をお慕い致しあ

懸命に馳せ参じております。

上帝にお捧げ致しますことに戮うことなど何もございませんあ

身を清めて真心こめて上帝にお仕えし謹んでお祀りするだけござ

ます。

これこそ上帝は至尊にしてこの上なく多大なる福はあ

地の神からいただく賜物なり。

慈雨はいつまでも変わらず穀物を潤しあ

優れた苗は新穀と新嘗のことを心に込めて想い描くのでござ

文生舞譜

第一句 三裏雙舞酌 正拱手兮分羽籥成對一揖

純朝上籥  
支羽

第二句 備橫舒籥物平搭羽致背雙舞志朝上倒  
橫羽

兮肩羽籥敬背躬身陳正一揖

第三句 多外豎籥士高擊籥兮對斜籥駿正橫羽

奔對羽舞

第四句 靈交羽籥承正拱手無對垂羽斲正一揖

兮裏豎籥明正肩羽禋正橫籥

第五句 維對羽舞蕃一朝上釐背籥舞兮朝上羽  
托籥

媪分羽籥神裏看尖

第六句 雨對籥舞留朝上豎甘背羽籥兮正籥舞

良對一揖苗一朝上懷一長跪新一叩首

文生舞譜：「終獻禮」の「霑平之章」に合わせて舞う。

背羽籥：原文に「背羽籥」と記載されている「舞譜」の型が『節次』五「文生舞譜」にはみえない。この「背羽籥」と記されている「舞譜」の型の一つ前の「舞譜」の型は「朝上豎羽籥」で、「背羽籥」の一つ後の「舞譜」の型は「正籥舞」である。このことに鑑み、「文生舞譜」において「背羽籥」と記載されている「舞譜」の型が「舞譜」の型としての流れに適合していることから、ここでは「背羽舞」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。



【舞譜】

文生舞譜

三 第一句



裏雙舞

備 第二句



橫舒籥

多 第三句



外豎籥

酌



正拱手

物



平搭羽

士



高擎籥

兮



分羽籥

致



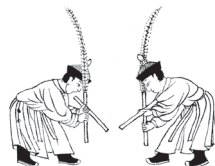
背雙舞

兮



對斜籥

成



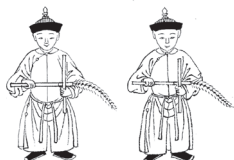
對一揖

志



朝上倒橫羽

駿



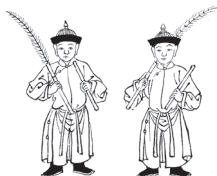
正橫羽

純



朝上籥支羽

兮



肩羽籥

奔



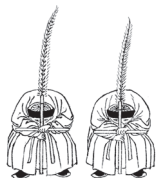
對羽舞

敬



背躬身

陳



正一揖

靈 第四句



交羽籥

維 第五句



對羽舞

雨 第六句



對籥舞

承



正拱手

蕃



一朝上

留



朝上豎羽籥

無



對垂羽

釐



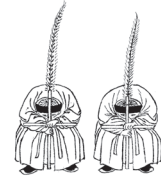
背籥舞

甘



\*背羽籥

數



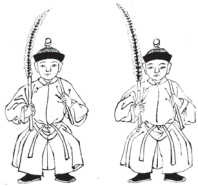
正一揖

兮



朝上羽托籥

兮



正籥舞

兮



裏豎籥

媪



分羽籥

明



正肩羽

神

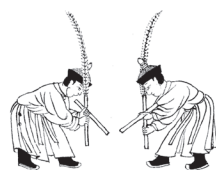


裏看尖

禋



正橫籥



良

對一揖



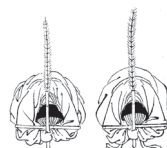
苗

一朝上



懷

一長跪



新

一叩首

撤饌禮

撤饌禮

撤饌禮

樂奏靈平之章

撤饌禮

撤饌禮

禮將成兮舞已終

願留福兮惠吾農

遂及私兮越我公

徹弗遲兮畏神恫

神之貺兮協氣融

五者來備兮錫用豐

撤饌禮…お供え物をひきあげたもう儀礼。「饌」は、お供えした品。

dorolobure hafan

doboho jaka be bederebu seme hūlambi,

靈平之章…「まさに相応しく神々しき太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

doboho jaka be bederebu doroi acabuha taim mudan i kumun deribu seme hūlambi,

禮將成兮舞已終

願留福兮惠吾農

遂及私兮越我公

徹弗遲兮畏神恫

神之貺兮協氣融

五者來備兮錫用豐

28a

8

I

28b

4

4



【訳文】

\*撤饌礼

典儀官が

「饌をひきあげたまえ」と唱す。

楽奏「\*靈平之章」

唱樂官が

「撤饌礼の靈平之章を始めよ」と唱す。

祭祀の礼は今まさに成就致そうとしておりますああ

上帝にお捧げ致す舞も既に完結致しております

余すところなく行き届かせることに躊躇があつてはなりませんああ

上帝に御心を痛ませることなどがあつてはと畏れ憚るばかりでございます

ます

乞い願わくはいつまでも変わらぬ福を

天恵を吾が人民に

上帝が賜たまい下されます天恵こそはあ

天地の気が和らぎ一つに融とけ合あわさりますことなり

私祭が余すところなくゆきわたりますように成し遂げましたればあ

我が公わの祭祀にもまさるがごとき想いにとられます

上帝の天位たるものは地上にあらせられてもこれすなわち常備されたり

てあ

天恵としての賜り物は五穀豊穰をもってなされるなり

送神禮

送神禮

送神禮

樂奏霽平之章

送神禮

仰九閭兮返御  
 左蒼龍兮右白虎  
 祥風瑞靄兮彌靈壇  
 上帝居歆兮風肅然  
 般裔裔兮糺縵縵  
 介社釐兮康年

送神禮…神をお見送りたもう儀礼。

dorolobure hafan

enduri be fude seme hūlambi,

霽平之章…「雲厚く覆いし太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

enduri be fudere doroi hafuka tafin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

祥風瑞靄兮彌靈壇  
上帝居歆兮風肅然

左蒼龍兮右白虎  
般裔裔兮糺縵縵

仰九閭兮返御  
介社釐兮康年

【訳文】

\*送神礼

典儀官が

「神をお見送りましたまへ」と唱す。

楽奏「\*霊平之章」

唱楽官が

「送神礼の霊平之章の楽を始めよ」と唱す。

祭祀明けのめでたき風が上帝の下されたためたき兆しの靄かすみを起ち籠らせて  
あああ

いよいよ増して深くなり覆い隠していきまする上帝がお越しにな  
られている祭壇を

上帝にはお供え物をお受けただいておりまするああ

めでたき風は畏れ慎み静かに致しておりまする

左の東側には天の四霊たる蒼あおき龍りゆうがああ

右の西側には天の四霊たる白き虎が

足を前に長く伸ばして座りうねうねと動き飛び舞いああ

めでたき天雲が集まっては長くたなびいておりまする

天上で上帝のおいになる紫微宮の九門を仰ぎ見ますればああ

上帝の御車みぐるまたる鸞わん輅らが戻つていかれまする

上帝が下された大いなる恵や多大なる幸いこそはああ

まさに五穀豊穰の年となることならん

望燎禮

望燎禮

望燎禮

樂奏需平之章

樂奏需平之章

望燎禮

碧粼粼兮不可度思

神光四燭兮休氣夥頤

帝求民莫兮日鑒在茲

九奏終兮燿火哲而

安匪舒兮抑抑威儀

錫福繁祉兮庶徵日時

望燎禮…燎(かがり火)所に詣でて燎を仰ぎ見たもう儀礼 (Figure 16 参照)。

dorolobure hafan

dejire be tuwana seme hūlambi,

需平之章…「恩沢の大雨が満ち溢れし太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

dejire be tuwanara doroi elebuhe taim mudan i kumun deribu seme hūlambi,

碧粼粼兮不可度思 九奏終兮燿火哲而

神光四燭兮休氣夥頤 安匪舒兮抑抑威儀

帝求民莫兮日鑒在茲 錫福繁祉兮庶徵日時

庶徵日時…前後の歌詞に鑑み、ここでは『書経』「洪範」にみえる「八、庶徵。曰雨、曰暘、曰燠、曰燠、曰寒、曰風、曰時」と同じ意の歌詞と解釈した。



【訳文】

\*望燎礼

典儀官が

「燎〔かがり火〕所に詣でて燎を仰ぎ見たまえ」と唱す。

楽奏「\*霈平之章」

唱楽官が

「望燎礼の霈平之章の楽を始めよ」と唱す。

紺碧の空を風が遙か彼方から吹いてきておりまするゝああゝ

旅する思いを推しはかることなど到底できかねることでございまする

上帝にお捧げする楽曲もこの楽曲で九曲が完結致しまするゝああゝ

祭祀に備えて焚いて高く挙げておりましたる火も白くなりますのみゝ

上帝の天恵が天下四方を照らし尽くしゝああゝ

めでたき気が何と多いことかなゝ

どうして匪類が安穩としていられますようかゝああゝ

ただただ慎み控えゝ厳かに威儀を正すのみゝ

上帝は人民の徳が正しく和にかなうことを求めておいでになるゝああゝ

日ごと鑑みられるにゝここにありとゝ

天恵としての福を授けられゝ多くの幸いを下されてゝゝああゝ

雨から時に至るまでゝ全てはゝ天から賜るもろもろの象徴なりゝ



Figure 16. 圓丘壇の燎爐（鉄炉）

次の〃四 圜丘壇大雩礼<sup>レ</sup>には、青衣童子による雨乞いの舞を献上する儀礼である「青衣童子上舞礼」が初めて記録されている。

その「青衣童子上舞礼」は、「大雩礼」の儀式のうち、「献」の儀礼として三番目の爵を奠<sup>まつ</sup>る儀礼である「終献礼」の後に続いて行うように記載されており、「青衣童子上舞礼」が終わると、引き続き、お供え物をひきあげる儀礼の「撤饌礼」に移っている。「青衣童子上舞礼」における記載上の特徴については「青衣童子上舞礼」の冒頭(頁16)「解説」で言及することにした。

この「青衣童子上舞礼」に関する記録を除くと、〃四 圜丘壇大雩礼<sup>レ</sup>は、最初の「迎神礼」から最後の「望燎礼」に至るまで、〃三 圜丘壇常雩礼<sup>レ</sup>における場合と同一の楽曲・歌詞が用いられている(ただし、『節次』では、大雩礼に、奠玉帛礼が記載されていない。『御製律呂正義後編』などの類書にはそうした記載がないので、『節次』の誤りかもしれない)。これは「常雩礼」と「大雩礼」とが共に同じく「雨乞い」の祭祀儀礼であることよると考えられる。

なお、訳注に際しては、読者の便を配慮し、敢て省略せず、に重複させて示している。

四  
園  
丘  
壇  
大  
雩  
禮

園丘壇大雩禮

擇吉日祭 致齋三日 日出前  
四刻祭 報祀禮與常雩禮同

樂章黃鐘 宮為

倍夷則 起調

簫譜 各章皆係頭一字末一字用上字皆係尺四  
二字除而不用 此本樂章皆係單註簫譜

笛譜 各章皆係頭一字末一字用凡字皆係合尺  
二字除而不用

迎神禮

迎神禮

迎神禮

樂奏靄平之章

樂奏靄平之章

樂奏靄平之章

粒我蒸民兮神降嘉生

龍見而雩兮先民有程

念我農兮心靡寧

靈皇皇兮穆以清

雨暘時若兮百穀用成

臣膺天祚兮敢不祗承

肅明禋兮殫精誠

金支五色兮卷靄蜺旌

金支五色兮卷靄蜺旌

1 大雩禮：特別に行う大掛かりな雨乞いの祭祀儀礼。清朝では乾隆七(一七四二)年に創めて定め、実施している。致齋：祭祀を行うに先立ち内寝において心身を清浄に保つこと。雍正九(一七三二)年に降における清朝の皇帝は紫禁城内廷の齋宮で実施。四刻：14分×4=56分。報祀：礼祭。報祭。報賽。五穀の神による功によって受けた恩恵に感謝して行う祭祀。常雩禮：p.38の注と同じ。2 樂章：樂奏に合わせて歌詞を唱う樂歌。黃鐘：音律の名称。六律(黃鐘・大族・姑洗・蕤賓・夷則・無射)六呂(大呂・夾鐘・仲呂・林鐘・南呂・應鐘)からなる十二律の一つで、六律六呂の基本となる音。宮：宮(土)・商(金)・角(木)・徵(火)・羽(水)からなる五音(五声)の一つで、中央「土」の音声。律は黄鐘に該当する。3 倍：十二律の倍律。六律の蕤賓・夷則・無射ならびに六呂の林鐘・南呂・應鐘の六倍律を用いて樂声に入れること。夷則：音律の名称。六律・六呂からなる十二律の一つで、基本となる黄鐘から九番目の律。調：音律を合わせて樂を奏する。4 譜：樂器を奏する際の曲節を記した樂譜。6 迎神禮：神をお迎えたもう儀礼。

dorolobure hafan

enduri be okdo seme hūlambū,

靄平之章：「霞たなびける太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

enduri be okdoro doroi sumaka tain mudan i kumun deribu seme hūlambū,

\*粒我蒸民兮神降嘉生 雨暘時若兮百穀用成

龍見而雩兮先民有程 臣膺天祚兮敢不祗承

念我農兮心靡寧 肅明禋兮殫精誠

靈皇皇兮穆以清 金支五色兮卷靄蜺旌

粒我蒸民：ここでは『書経』「益稷」にみえる「蒸民乃粒」ならびに『詩経』「小雅・小旻」にみえる「民莫不穀」と同じ意の歌詞と解釈した〔p.38の注も参考のこと〕。

【訳文】

圓丘壇\*大雩礼 吉日を選んで祭を行う。\*致齋は三日間。

太陽が昇る時刻より\*四刻前から始める祭。

\*楽章\*黄鐘 「楽章」は、「黄鐘」の音律、「五音」の「\*宮〔土〕」の音声。

\*倍\*夷則 夷則の倍律に楽声と音律を合わせる。

簫\*譜 「圓丘壇の祭祀において簫譜を」楽奏するそれぞれの章では、全て、

冒頭の一字と末尾の一字に「上」字の音符を用い、全て「尺」と「四」の

二字の音符は除いて使用しない。この本楽章では全体に亘って、ただ「簫

譜」だけを記載している。

笛\*譜 「圓丘壇の祭祀において笛譜を」楽奏するそれぞれの章では、全て冒

頭の一字と末尾の一字に「凡」字の音符を用い、全て「合」と「尺」の二

字の音符は除いて使用しない。

\*迎神礼

典儀官が

「神をお迎えたまえ」と唱す。

楽奏「\*霽平之章」

唱楽官が

「迎神礼の霽平之章を始めよ」と唱す。

我が幾多の人民を一人一人充分に養うためにくああ

皇天上帝は降臨なされてお告げくださるく五穀豊穡など多くの瑞祥を

雨が降ってほしい時に雨が降りく晴れてほしい時に晴れることになればく

ああ

あらゆる穀物はそのおかげをもちまして実を結ぶことができますく

水神たる龍は農地の在り様をみて降雨を乞い願いくああ

古の賢者は農業の方式を見つけたたりく

皇天上帝の臣下たる予は天からの福祿をいただきくああ

敢えて謹んでお受けしないことなどは致しませぬく

いつも心に深く念うのはく我が幾多の人民のことくああ

心深く常に去来しことは人民の安寧なりく

謹んで身を清めて天をお祀り致しますくああ

誠心誠意予の全てを込めましたく

大いなる皇天上帝はこの上なく煌びやかにして輝きわたれりくああ

天地の気は穏やかにして清らかなりく

祭祀の楽器に備えたる金の支柱は五彩を放ちくああ

覆いの色合い・立ち込める霞・空にかかる虹・旌もまたこの上なき彩を

放つなりく



奠玉帛禮

楽譜

楽譜

樂奏雲平之章

楽譜

玉帛載陳兮磬管鏘鏘

為民請命兮惕弗敢康

麥秀岐兮禾莠稂

俾萬寶兮千斯倉

日照九兮時雨滂

令清和兮遂百昌

玉帛載陳兮磬管鏘鏘

為民請命兮惕弗敢康

麥秀岐兮禾莠稂

俾萬寶兮千斯倉

日照九兮時雨滂

令清和兮遂百昌

奠玉帛禮…玉帛を供えまつる儀礼。

dorobobure hakan

gu suje dobo seme hūlambi,

雲平之章…「雲海広がりし太平」という調子の楽。

kunmun hūlara hakan

gu suje doboro doroi tulhušeh taijin mudan i kunmun deribu seme hūlambi,

玉帛載陳兮磬管鏘鏘 為民請命兮惕弗敢康

麥秀岐兮禾莠稂

日照九兮時雨滂 俾萬寶兮千斯倉

磬…玉あるいは石を削って「へ」の字形に造った楽器で磬虚けいきよに懸けて打ち鳴らす。

管…竹に穴をあけて造った笛。

九…前後の歌詞に鑑み、ここでは九穀こく（黍あむぎ・稷もちきび・秫もちあわ・稻・麻・大豆・小豆・大麥・小麦）の略記と解釈した。

【訳文】

\*奠玉帛礼

典儀官が

「玉帛を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*雲平之章」

唱樂官が

「奠玉帛礼の雲平之章を始めよ」と唱す。

玉と帛は凡に載せてならべてございます〜ああ〜

\*磬と\*管の音色は鳳凰が鳴いているようございます〜

人民のために天命を請います〜ああ〜

行ないを慎み決して安楽に浸ることは致しません〜

この上なく世の中が治まって平穩であれば〜ああ〜

万事何事も盛んになります〜

麦が生育して高くのび〜ああ〜

稲も高く茂り害毒に喩えられる稂を遥かに凌駕しております〜

日光は幾多の穀物を照らし〜ああ〜

常に芳醇なる雨が注ぎ潤す〜

あらゆる穀に益をなし〜ああ〜

延いては穀を収める数多の倉に裨益せり〜

初獻禮

初獻禮

初獻禮

樂奏霖平之章

霖平之章

霖平之章

酌彼兮鬯洗

愧明德兮維馨

願大父兮念茲衆子

初獻禮：初獻の儀礼。「初獻」は、祭祀儀礼で初めて酒を献すること、一番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sucungga dorolome dobo seme hūlambi,

霖平之章：「長雨降りし太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

sucungga dorolome doboro doroi agaha tafim mudan i kumun deribu seme hūlambi,

酌彼兮鬯洗

愧明德兮維馨

願大父兮念茲衆子

假黍稷兮誠將

餽芬兮椒香

穆將愉兮綏以豐穰

穆將愉兮綏以豐穰

椒：前後の歌詞に鑑み、ここでは椒酒の略記と解釈した。椒酒は、山椒や様々な漢方薬材を調合して醸して造る酒で神に献上する。また屠蘇酒として正月元旦の祝い酒としても用いる。

明德兮維馨：前後の歌詞に鑑み、ここでは「書経」「君陳」にみえる「我聞、曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德惟馨」における「明德惟馨」と同じ意と解釈した。

黍稷：前後の歌詞に鑑み、ここでは「書経」「君陳」にみえる「我聞、曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德惟馨」における「黍稷非馨」の略記と解釈した。

【訳文】

\*初献礼

典儀官が

「初献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*霖平之章」

唱楽官が

「初献礼の霖平之章を始めよ」と唱す。

美酒を酌くんでおりますのは、それ、あのように、ああ、

この上なき大きな酒樽から、

香ばしく漂ひらいます至上の香りは、ああ、

\*椒酒から立ち上る香ばしい山椒の香り、

この身は愧はじ入るばかりです、神にお供もちまえる黍あづきと稷あざきの香りではなく、

人の備たもえる\*明德めいとくの力があつてこそ、ああ、

これこそが皇天上帝こうてんじょうていを感じしめるというのに、

せめて神にお供もちまえる黍あづきと稷あざきの芳かほしい香りにかりてでも、ああ、

予われの誠心まことこころをお奉たごげ致いたしたく、

乞こい願ねがひ奉たごりまする、皇天上帝こうてんじょうていに、ああ、

ここに固かたく心に留とどめ置おきまする、万民ばんみんのこと、

万民ばんみんの心が和ならぎ、喜よろこび楽たのしみの溢あふれること、ああ、

万民ばんみんが満み足ちし安やす心こころでできまする、五穀ごこく豊とよ穰じやうなるにより、

武生舞譜

第一句 酌微向外彼對揚舞兮外看尖疊正揚舞

洗微向裏

第二句 飴背擺牌芬正垂舞兮背擺牌椒正開牌

杳正收斧

第三句 愧正躬身明對擺牌德正開牌兮正垂舞

維裏看尖馨背垂舞

第四句 假正揚舞黍裏看尖稷正開牌兮正開斧

誠微向外將對一揖

第五句 願外擺手大正躬身父外擺手兮裏擺手

念正拱手茲一對面衆正垂舞子對擺牌

第六句 穆外看尖將外擺手愉一對面兮正躬身

綏背揚舞以一朝上豐一長跪穰一叩首

武生舞譜：「初獻礼」の「霖平之章」に合わせて舞う。

裏看尖：尖頭よりも身体を低く屈める動作。



【舞譜】

武生舞譜

第一句



微向外

第二句



背擺牌

第三句



正躬身

彼



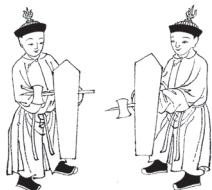
對揚舞

芬



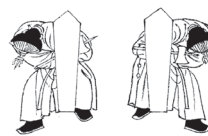
正垂舞

明



對擺牌

兮



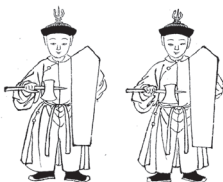
外看尖

兮



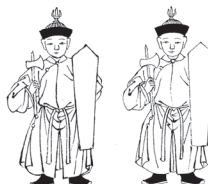
背擺牌

德



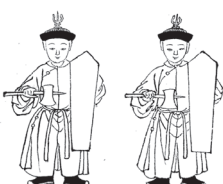
正開牌

疊



正揚舞

椒



正開牌

兮



正垂舞

洗



微向裏

香



正收斧

維



\*裏看尖

馨



背垂舞



外擺手



正揚舞

願 第五句

假 第四句



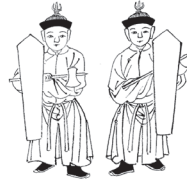
正躬身

大



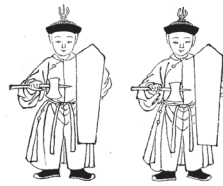
裏看尖

黍



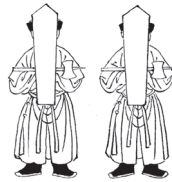
外擺手

父



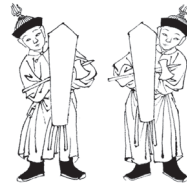
正開牌

稷



正拱手

念



裏擺手

兮



正開斧

兮



一對面

茲



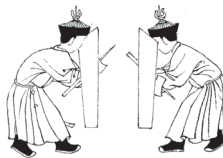
微向外

誠



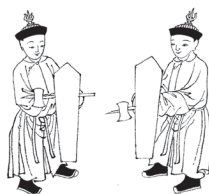
正垂舞

衆



對一揖

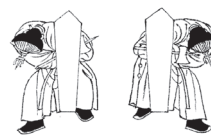
將



對擺牌

子

第六句  
穆



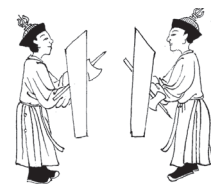
外看尖

將



外擺手

愉



一對面

兮



正躬身

綏



背揚舞

以



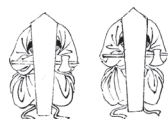
一朝上

豐



一長跪

穰



一叩首

亞獻禮

7  
dorolobure hafan

8  
sirame dorolome dobo sene htilambi,

樂奏露平之章

kumun htilara hafan

33a  
再酌兮醕清

上上凡工凡

庶來格兮鑒誠

上上凡工凡  
合上乙合上合  
合萬國兮形神精

仰在上兮明明

合上乙合上凡  
凡工凡合上合

曷敢必兮屏營

合上乙合上凡  
合上乙合上合

亞獻禮…亞獻の儀礼。「亞獻」は、祭祀儀礼で二番目に酒を献すること、二番目の爵を奠る儀礼の行為。  
dorolobure hafan

sirame dorolome dobo sene htilambi,

露平之章…「この上なく潤える太平」という調子の樂。

kumun htilara hafan

再酌兮醕清

上上凡工凡  
合上乙合上合

庶來格兮鑒誠

上上凡工凡  
合上乙合上合  
合萬國兮形神精

仰\*在上兮明明

合上乙合上凡  
凡工凡合上合

曷敢必兮屏營

合上乙合上凡  
合上乙合上合

在上兮明明…前後の歌詞に鑑み、ここでは「書経」にみえる「穆穆在上、明明在下」の略記、あるいは「詩経」にみえる「明明在下、赫赫在上」の略記と解釈した。

【訳文】

\* 巫献礼

典儀官が

「巫献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*露平之章」

唱楽官が

「巫献礼の露平之章を始めよ」と唱す。

かさねて御神酒を酌みく献じ奉りますああ

聖人のごとき清んだこの上なき美酒を

謹んで仰ぎ見ますれば天上に在らせましては麗しくああ

光明明るく光り輝いております

乞い願ひ上げ奉ります祭祀の場にお越し下さいますことをああ

予自ら戒め鑑みて誠心を明らかに致したく存じます

なんぞ敢えて必ず致すことなどありましようかああ

心定まらずおそれ狼狽することなど

天下の諸国は一つになりああ

則に致したく存じます皇天上帝の神霊をもって

皇天上帝のこの上なき素晴らしき尊さをうけただけになりますれ

ばああ

願ひは成就致しまする



文生舞譜

第一句再斜擎籥酌背羽舞兮微向裏醋對雙舞

清正一揖

第二句仰高搭羽在一對面上正拱手兮裏看尖

明對羽舞明

朝上高搭羽

第三句庶對躬身來朝上斜格對橫羽兮裏肩羽

鑿外肩籥誠豎羽籥

第四句曷背托羽敢背一揖必正橫籥兮背豎籥

屏背躬身營裏一揖

第五句合裏豎籥萬懷羽籥國正橫羽兮籥蹲身

形對籥舞神正拱手精豎舒籥

第六句承背斜籥神正躬身至高拱手尊對一揖

兮一朝上思一長跪成一叩首

文生舞譜：「亜献礼」の「露平之章」に合わせて舞う。

擎：ささげる。

籥蹲身：原文に「籥蹲身」と記載されている「舞譜」の型が「節次」五「文生舞譜」にはみえない。この「籥蹲身」と記されている「舞譜」の型の一つ前の「舞譜」の型は「正横羽」で、「籥蹲身」の一つ後の「舞譜」の型は「對籥舞」である。このことに鑑み、「節次」五「文生舞譜」において「籥存身」と記載されている「舞譜」の型が「蹲（うづくまる）」の意と合致し、「舞譜」の型としての流れにも適合していることから、他にも見える「籥蹲身」の場合と同じく「籥存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。

【舞譜】

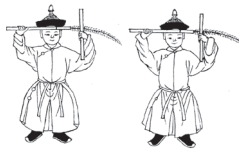
文生舞譜

再 第一句



斜\*擊籥

仰 第二句



高搭羽

庶 第三句



對躬身

酌



背羽舞

在



一對面

來



朝上斜擊籥

兮



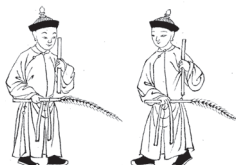
微向裏

上



正拱手

格



對橫羽

醋



對雙舞

兮



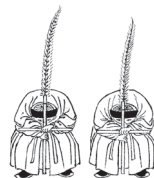
裏看尖

兮



裏肩羽

清



正一揖

明



對羽舞

鑒



外肩籥

明



朝上高搭羽

誠



豎羽籥



背斜籥

承 第六句



裏豎籥

合 第五句



背托羽

曷 第四句



正躬身

神



懷羽籥

萬



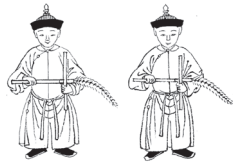
背一揖

敢



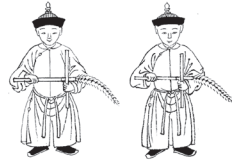
高拱手

至



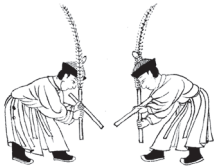
正橫羽

國



正橫籥

必



對一揖

尊



\*籥蹲身

兮



背豎籥

兮



一朝上

兮



對籥舞

形



背躬身

屏



一長跪

思



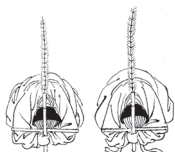
正拱手

神



裏一揖

營



一叩首

成



豎舒籥

精



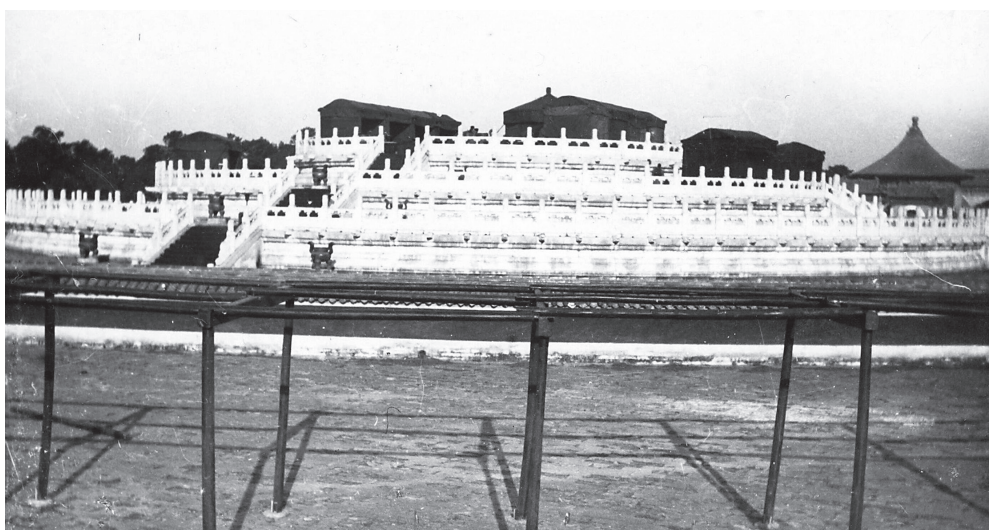


Figure 17. 神幄がみえる圓丘壇〔神位は祭祀に際して神幄のなかに供物とともに安置される〕  
(上：1910年撮影、中 / 下：1910-1915年撮影)

終獻禮

終獻禮

樂奏霑平之章

樂奏霑平之章

樂奏霑平之章

三酌兮成純

多士兮駿奔

維蕃釐兮媪神

終獻禮：終獻の儀礼。「終獻」は、「献」の儀礼として三番目にお開きの酒を献ずること、三番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hakan

wajima dorolome dobo seme hūlambi,

霑平之章…「潤い蒙り続ける太平」という調子の楽。

霑…うるおい・うるおう。

kumun hūlara hafan

wajima dorolome doboro doroi strabaha taijin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

三酌兮成純

多士兮駿奔

維蕃釐兮媪神

備物致志兮敬陳

靈承無斁兮明禋

雨留甘兮良苗懷新

維蕃釐兮媪神：前後の歌詞に鑑み、ここでは『漢書』『礼楽志』にみえる「惟泰元尊、媪神蕃釐」と同じ意の歌詞と解釈した。

良苗懷新：前後の歌詞に鑑み、ここでは陶潜が「癸卯歲始春懷古田舍詩」

で詠んだ「平疇交遠風、良苗亦懷新」と同じ意の歌詞と解釈した。



【訳文】

\*終献礼

典儀官が

「終献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*霑平之章」

唱楽官が

「終献礼の霑平之章を始めよ」と唱す。

三たび御神酒を酌み、献じ奉ります。ああ

いつわりのない忠義の心でお祀りすることが成就致します。

祭祀の器具とお供え物は誠心の限りを尽くしましたものであ

誠心誠意謹んで備え並べております。

幾多の優れた学徳を有する者たちが上帝をお慕い致しあ

懸命に馳せ参じております。

上帝にお捧げ致しますことに戮うことなど何もございませんあ

身を清めて真心こめて上帝にお仕えし謹んでお祀りするだけござ

ます。

これこそ上帝は至尊にしてこの上なく多大なる福はあ

地の神からいただく賜物なり。

慈雨はいつまでも変わらず穀物を潤しあ

優れた苗は新穀と新嘗のことを心に込めて想い描くのでござ

文生舞譜

第一句 三裏雙舞酌正拱手兮分羽籥成對一揖

純朝上籥  
支羽

第二句 備橫舒籥物平搭羽致背雙舞志朝上側  
橫羽

兮肩羽籥敬背躬身陳正一揖

第三句 多外豎籥士高擊籥兮對斜籥駿正橫羽

奔對羽舞

第四句 靈交羽籥承正拱手無對垂羽斃正一揖

兮裏豎籥明正肩羽禋正橫籥

第五句 維對羽舞蕃一朝上釐背籥舞兮朝上羽  
托籥

媪分羽籥神裏看尖

第六句 雨對籥舞留朝上豎  
羽籥甘背羽籥兮正籥舞

良對一揖苗一朝上懷一長跪新一叩首

文生舞譜：「終獻礼」の「霑平之章」に合わせて舞う。

背羽籥：「節次」五「文生舞譜」には「背羽籥」はみえない。一つ前の「舞譜」の型は「朝上豎羽籥」で、「背羽籥」の一つ後の「舞譜」の型は「正籥舞」である。このことに鑑み、「文生舞譜」において「背羽舞」と記載されている「舞譜」の型が「舞譜」の型としての流れに適合している「背羽舞」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。

【舞譜】

文生舞譜

三 第一句



裏雙舞

備 第二句



橫舒籥

多 第三句



外豎籥

酌



正拱手

物



平搭羽

士



高擎籥

兮



分羽籥

致



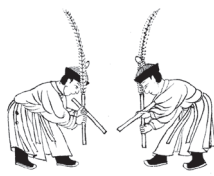
背雙舞

兮



對斜籥

成



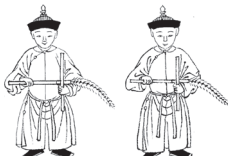
對一揖

志



朝上倒橫羽

駿



正橫羽

純



朝上籥支羽

兮



肩羽籥

奔



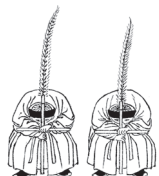
對羽舞

敬



背躬身

陳



正一揖

靈 第四句



交羽籥

維 第五句



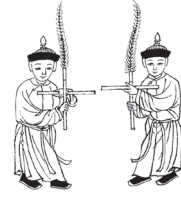
對羽舞

雨 第六句



對籥舞

承



正拱手

蕃



一朝上

留



朝上豎羽籥

無



對垂羽

釐



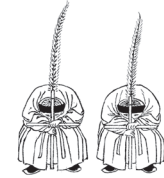
背籥舞

甘



\*背羽籥

數



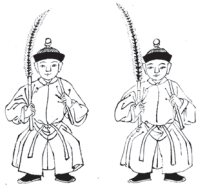
正一揖

兮



朝上羽托籥

兮



正籥舞

兮



裏豎籥

媪



分羽籥

明



正肩羽

神

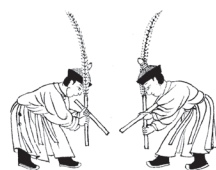


裏看尖

禋



正橫籥



良

對一揖



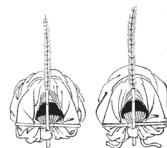
苗

一朝上



懷

一長跪



新

一叩首





Figure 18. 青衣童子の踊りはじめの形（『節次』六01a上）



Figure 19. 大零禮で着る青衣童子の衣服（左）・帽子と帯（右）（『節次』四14b・14a）

青  
衣  
童  
子  
上  
舞  
礼

## 解説 説 (青衣童子舞譜)

『節次』における「青衣童子舞譜」は、この「園丘壇大雩礼」における「青衣童子上舞礼」の「御製雲漢詩八章」による事例が初見になる。「青衣童子舞譜」の一大特徴は、各章句に対応する「青衣童子」による舞の記載内容ならびに『節次』六「青衣童子舞譜」に収められている「青衣童子」による舞の記載内容が、既に見えている「武生舞譜」や「文生舞譜」の場合と大きく相違していることにある。

まず、『節次』本文の「青衣童子舞譜」における記述の殆どが、舞の型についての記載内容がかなり詳細な記述になっているのみならず、『節次』六「青衣童子舞譜」に収められている舞譜の記述と完全には一致しておらず、その記述も「左側に立って舞う青衣童子」についてのことだけに終始している。その上さらに、当該句における「青衣童子」の動きとして、

轉正植羽〔節次〕一<sup>37b</sup>、第一章第一句、鳥<sup>〴</sup>〕

〔「正立」の姿勢に戻り、両手に持ったそれぞれの羽を垂直に立てる〕

あるいは、

退後一步雙羽仍植〔節次〕一<sup>38b</sup>、第一章第八句、降<sup>〴</sup>〕

〔「そこから一步後退し、両手に持ったそれぞれの羽は垂直に立てたままにする」とあるなど、その一つ前の句における舞の状態からどのように変えるかという舞における移り変わりの動作を指示した記載内容も散見する。

次に、『節次』五「文生武生舞譜」の場合、左右に並ぶ「武生」・「文生」によるそれぞれの舞に「東」・「西」あるいは「左」・「右」の相違があっても、その舞の図に付された記載は全く同一であったが、『節次』六「青衣童子舞譜」では左右に並ぶ「青衣童子」によるそれぞれの舞に「東」・「西」

あるいは「左」・「右」の相違がある場合には、その相違する内容に合わせ「左」・「右」の図に付された記載も異なっている。

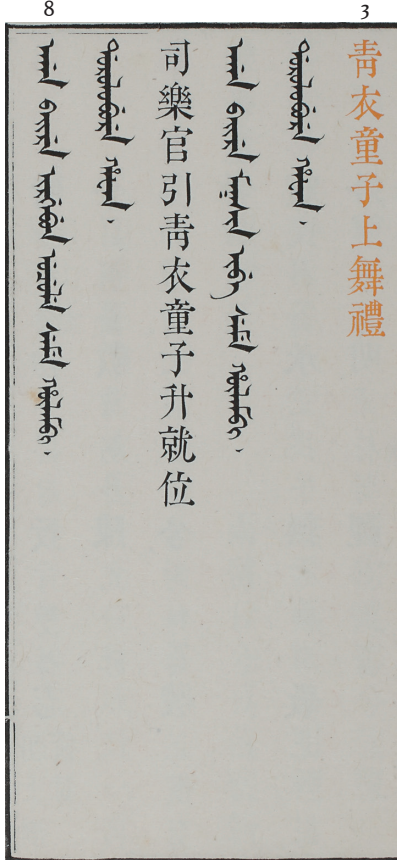
そして、『節次』五「文生武生舞譜」における「武生舞譜」・「文生舞譜」では、「正」や「背」のように、舞の図に付された記載における頭一字の同じ文字ごとに揃えてまとめる方式を用いているが、『節次』六「青衣童子舞譜」の場合にはそのようになっておらず、この「園丘壇大雩礼」における「御製雲漢詩八章」の各章句に対応する「青衣童子」による舞の進行通りに、順次、『節次』六「青衣童子舞譜」における舞の図も記載されており、「武生舞譜」・「文生舞譜」の場合に見られるような舞の図に付された記載を同じ文字で揃えてまとめる方式は用いられていない。

なお、この「青衣童子上舞礼」の「御製雲漢詩八章」については、乾隆五二(一七八七)年頃までに刊行されたと考えられている『日下旧聞考』卷五七「城市・外城南城一」に、「乾隆七(一七四二)年、御製。『雲漢』の詩体に倣い、敬んで雩祭の楽章を製り、以て誠懇を申しのべる」と記したうえで、「御製雲漢詩八章」の表題は付していないものの、「御製雲漢詩八章」と一文字の異同はあるものと同じ内容の詩全八章を収録している。「御製雲漢詩八章」で乾隆帝は、一節四文字の計一〇節から成る一章の詩を全八章詠む詩体を用いて「雩祭の楽章を製」っているが、これと同一の詩体と内容で知られる「雲漢」の詩を探求してみると、『詩経』「大雅」にみえる宣王が早魃を嘆く「雲漢」の詩に辿りつくことになる。但し、乾隆帝は『詩経』「大雅」の「雲漢」と同一の詩体を探っているが、「雲漢」に倣ってその詩句をそのまま引用しているわけではない。この場合、「雲漢」

3  
青衣童子上舞禮

の詩体に倣った乾隆帝の制作意図はどのような点にあったと理解すればよいのであろうか。第五章の歌詞に「その実は后稷を維つなぐことなり」と、即ち「その実質は周の後稷からの正統を繋ぎ止めることにあります」とあることから窺えるように、大清皇帝としての正当性、延いては中国歴代王朝の流れを継承する清朝の正統性を明示するためであったことは想像に難くないが、その詳細な検証は研究篇で改めて行うことにしたい。

このように、清朝では乾隆七（一七四二）年に創めて「大雩礼」を定めて実施している経緯があることから、「青衣童子舞譜」にみえるこれらの点は、「青衣童子上舞礼」における「青衣童子舞譜」の制が、「武生舞譜」・



## 【訳文】

## \* 青衣童子上舞礼

典儀官が

「雨乞いの舞〔を献上する定位置〕に進み出よ」と唱す。

青衣童子上舞礼（解説）

「文生舞譜」の制とは異なり、未だ「青衣童子上舞礼」を開始した直後で「青衣童子舞譜」についても試行錯誤を繰り返している段階にあったのではないかとこのことを充分に窺わせる。

以上のことに鑑み、「青衣童子舞譜」については本文における「御製雲漢詩八章」の各章句に付された記載を全て訳出するだけではなく、「節次」六「青衣童子舞譜」のなかで符合する舞の図に付されている「左」・「右」の記載を併記した上で、「圓丘壇大雩礼」における「御製雲漢詩八章」の各章句に対応する「青衣童子」による舞の進行通りに、順次、その舞を連環図として示している。

青衣童子上舞禮：青衣童子による雨乞いの舞を献上する儀礼。

dorolobure hakan,

aga baire maksin ibe seme hūlambi,

司樂官引青衣童子升就位

dorolobure hakan,

aga baire irgebun ucule seme hūlambi,

司樂官が青衣童子を引率して壇上に登らせ、定位置に就かせる。

典儀官が

「雨乞いの詩を唄えまつれ」と唱す。







【訳文】

青衣童子舞譜

御製雲漢詩八章

遙かに仰ぎ見ますれば、彼方には、火の如き朱雀の神が、

神なる海鳥の爰居が、參宿を主る実沈の神が、

農の紀における功を協せて行い、農期の律を弁え、

飛来する幾多の鳥は、神が召し遣わしたる農期の音、

天と地との間にいる万物は種を蒔き、生まれ育つ、

万物は懐妊し、万物は聚り盛んになる、

平生に異変が生じる際には地上の王は都から南の郊外に出て皇天上帝を祀る、

皇天上帝は、祭祀に応じて天に上り、地に下り、地上の王は天下大平の願

いを心より念じ、皇天上帝を敬い祀る、

謹んで尊びお慕いして遙かに仰ぎ見ますれば、天空には光り輝ける皇天上

帝が、

生きとし生けるものは天地の道理を思うなり、

国を繋ぎ止めますには忠信を基軸とする礼の常なる根本がございませう、

不正なる民は如何なることによるのでございませうか、

民を繋ぎ止めますには祭祀を基軸とする天の常なる御加護がございませう、

糧を生む農耕に抛ることなく自然に生えたる植物を食らうのは天の理とし

てどのように理解すればよろしいのでしょうか、

\* 蝮蝮が鳴いておりませう、

皆を一樣にして秩序正しく農事に努めさせ、夏に作物を大きく生育させる

ようにと、

我が皇天上帝をお祀り致すのは敢えて後にまわすことに致します、

我が何よりも用意致しましたる楽曲と舞は天と地との和を繋ぎ止める

ためのものなり、

\* 鼗鼓を打つ音の響きは淵淵、

青衣童子の舞で衣服のひるがえる音は娑娑、

遙か古の昔より、

春の啓蟄には郊の祭祀、夏には雩の祭祀、

言い伝えられております、唯一の兆しとして蒼龍宿の星が東の天空に

あらわれると五穀のために上帝を祀って降雨を祈る」と、

「田の畔に燭台を灯して夜通し田畑仕事に精を出し、朝から準備で走り回る」

と、

十分に整え致しましたる祭祀の典礼は既にそろえてございませう、

皇天上帝には暫し地上にお留まりいただき、楽しくお寛ぎ下さいませよう、

、

雷神が轟きわたらせる響きは闐闐、

風神が激しく吹きわたらせる音は衙衙、

降ってほしい日と時刻に雨が降りそそぎ、晴れてほしい日と時刻に晴れわ

たるならば、

我が民の、新や、畚の新田耕作に大いなる収益を賜ることになります、

麗しくみちみちている蒼天の広がり、に接し奉り、

都の南郊に在りて、

天地の神神にお答えするに、神々を厳かに尊び、恭しく敬う、

皇天上帝がこの時に臨まれるや、

\* 繭栗ならびに、量幣を、

皇天上帝に奉るのに、誠と真心の限りを尽くして致します、

畏れおののき震えの止まらぬ我が躬なり、

畏れつつしみ縮み上つて死した如きの我が心なり、

政が平らかでない等の、六事は全て自分で自分を責めとがめ、

殷の湯王が、桑林で雨乞いをした故事を仰ぎ、皇天上帝に雨を乞う、

37b	2	I	8	37a	I	8	7	36b			
億萬斯年	山川出雲	我禮既畢	咨爾保介	恃天慢人	惟天可感	尙鑒我衷	元衣八列	古禮是式	命彼秩宗	惟予小子	權輿粒食
農夫之慶	爲霖澤滂	我誠已將	痔乃錢鏹	弗刈弗穫	日惟誠恪	錫我康年	舞羽續紛	值茲吉辰	古禮是式	臨民無德	實維后稷
	雨公及私	風馬電車		尙勤農哉	惟農可稔		既侑上帝	玉磬金鐘			百王承之
	興鋤利甿	旋駕九閭		服田孔樂	日惟力作		亦右從神	大羹維醇			永奠邦極

7 后稷：中国太古の官名で農事を掌る長官。后は君、稷は五穀の意。のちに周王朝を興す棄は、堯の時代に農師となったあと舜の時代に后稷となつたことから后稷と称した。ここでは周の始祖のことであると解釈した。

1 秩宗：宗廟の礼制を掌る官で、『周礼』の宗伯、前漢の太常がこれにあたり、王莽は太常を改めて秩宗と称した。隋・唐時代以降の六部の礼部にあたる。

2 磬：玉あるいは石を削つて「へ」の字形に造つた楽器で磬虚に懸けて打ち鳴らす。 維：ここでは「与」と同じ意と解釈した。 醇：濃い酒。

3 元衣：黒地の衣服で、元は玄に通じて黒色の意。「青衣童子衣・大雩礼」の画（92頁、Figure 19）では黒地に雲の紋様が施されている。 羽：「青衣童子所執之羽・大雩礼」の画（156頁、Figure 21）を参照のこと。

7 保介：農事を世話して保護する中国太古の官吏。 痔↓痔：そなえること。 錢鏹：農具の名で「鋤」のこと。

【訳文】

農事の始まりは穀物を食するためのことなるも、

その実質は周の<sup>＊</sup>后稷からの正統を繋ぎ止めることにあります、

これまで歴代の君主はこのことを謹んで承け継ぎましたのがゆえに、

実に永久の長きに亘って延々と途切れることなく酒食をお供えして天を  
奠<sup>まつ</sup>つてきております、

ただただ天子なれども予だけは至らぬばかりで、

民を治めるに際しての徳をこれといって供えておらぬ有り様でございます  
、

そのため敢えて豊年を祈ることを怠りましたること、

この上なく清き心によって皇天上帝を厳正に敬い謹みましたが故のことに  
ございませう、

どうかお申し付け下さいませ、<sup>＊</sup>秩宗を受け継ぐ礼部の官に、

「古来の礼式を實踐せよ、これこそがただ一つまことの正しき礼式なれば  
こそ」と、

古来の礼式を實踐せよ、これこそがただ一つまことの正しき礼式なればこ  
そ、

ここからいただくことができることとなります、ますます多くの吉日を  
、

謹んで献<sup>かな</sup>じ奏<sup>かな</sup>でまするは、玉製の<sup>＊</sup>磬と黄金製の鐘による楽曲、

謹んで献<sup>かな</sup>じお供えしまするは、この上なく素晴らしき調和せる肉の羹と<sup>＊</sup>醇  
、

大雩礼で黒地の衣服を身にまとった青衣童子は八列に居並ぶこと、古来の  
礼式通りなりて、

たくみに舞うと手に持つ<sup>＊</sup>羽がみごとに翻り、この上なく美しい、

皇天上帝には既に飲食をお勧め致しております、

御付きの神神にもまたお勧め致しております、

乞い願わくは御考察いただきたく、我が清き心のほどを、

乞い願わくは賜らんことを、この我に、この上なき五穀豊穰の年を、

もつばら皇天上帝だけに悟っていたことができるのでございませう、

言い伝えられております、「ひたすら誠心誠意をもって敬い慎め」と、

もつばら農民だけが穀物を稔らせることができるのでございませう、

言い伝えられております、「ひたすら精進して作業に努め励めよ」と、

皇天上帝を<sup>たか</sup>つみの綱にして全てを頼つてしまうことになれば、人は怠けだ  
します、

刈り仕事を怠けて手を出すこともなく、収穫作業を怠けて放り出す、  
これでもなお農事に勤しむと言えましようや、

田仕事に従事してこそ、この上なく楽しいことにもなります、  
<sup>＊</sup>保介よ爾に問い詰る、

「一体ゼンたいそなえることとはまさしく田仕事で使う<sup>＊</sup>錢縛のことなのか  
と、

皇天上帝に献<sup>か</sup>じる我が祭礼をし尽くせば、

皇天上帝に献<sup>か</sup>じる我が誠心誠意をお届けできたこととなります、

皇天上帝がお乗りになった風馬も、後に続く長い車列も、

既に踵を返して紫微宮の九門に戻つておいでになられます、

地上に眼を転ずれば、山河には雲が湧き出でて、

霖<sup>な</sup>をもたらし恵みの雨をとめどなく豊かに降らせております、

降る雨が皇天上帝からの公正なる賜り物であるならば、私祭が余すところ  
なく成し遂げましたこととなります、

力を合わせて田畑を鋤で耕すことを守り立て盛んにすれば、農民に数多く  
の幸いをもたらすこととなります、

これが限りなく続く長き年月に互るようになるならば、  
農民にとっては上帝から賜るこの上なき何よりの慶びなり、

第一章		第一句 瞻	首微俯左羽 横眉右羽植	彼	左羽指西 右羽仍植
第二句 爰		朱	倚面相向左羽 倚肩右羽仍植	鳥	面正左羽 右羽仍植 垂
第三句 協		實	轉身向西右羽植左羽 柄倚右羽指南如曲尺	居	轉正 植羽
辨	身蹲右羽植 左羽指東	紀	左羽植右 羽指西	律	正立雙 羽植

【訳文】

第一章

第一句

瞻 首を微かに俯き加減にし、左手の羽は横にして眉の位置に掲げ、右手の羽を垂直に立てる。

彼 左手の羽は西を指し示すようにし、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

朱 顔を回して相方の方を向き、左手の羽は肩に寄りかからせ、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

鳥 顔は正面を向き、左手の羽は垂らし、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

第二句

爰 顔を回して東に向け、右手の羽を直に左肩に寄りかからせ、左手の羽

轉正：「正立」の姿勢に戻る。

曲尺：直角に曲がった矩じゃく。

正立：天子のいる北の正面にまっすぐ向いて直立する基本姿勢。

は垂らしたままにする。

居 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

実 身体を回して西を向き、右手の羽を垂直に立て、左手の羽は柄の部分  
右手の羽に寄りかからせ、「右手の羽とで」\*曲尺のようにして南を指し示す。

沈 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第三句

協 左手の羽は左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立てて右臂を伸ばす。

紀 左手の羽は垂直に立て、右手の羽は西を指し示すようにする。

弁 身体をかがめ、右手の羽は垂直に立て、左手の羽は東を指し示すようにする。

律 \*正立し、両手に持っているそれぞれの羽を垂直に立てる。



【舞譜】

第一章

第一句

瞻



正立首微俯

右羽橫眉

左羽植

第二句

爰



俱轉面向東

右羽直倚左肩

左羽垂

第三句

協



右左羽倚肩

左右羽植伸臂

彼



正立

右左羽指東

左右羽植

居



正立

雙羽植

紀



右左羽植

左右羽指西

朱



正立各轉面向向

右左羽倚肩

左右羽植

實



俱轉身向西

右羽植

左羽柄倚左羽

指南如曲尺

辨



身蹲

右左羽植

左右羽指東

鳥



面正

右左羽垂

左右羽植

沈



正立

雙羽植

律



正立

雙羽植



<b>第四句</b> 羽	各對面立 雙羽植	<b>蟲</b>	各對面面微向北身 微俯雙臂伸雙羽植
<b>第五句</b> 萬	各轉正 雙羽植	<b>音</b>	每對相背立雙羽植在左舉 左足左手少高在右對作勢
<b>第六句</b> 有	左足前右足跪左手握 羽向西右羽植伸臂	<b>物</b>	身微向西左足進前一步右足進一 步右羽植伸臂左羽倚右羽斜向上
<b>有</b>	退一步正立左羽 平向東右羽植	<b>生</b>	轉身向東雙羽 向南植伸臂
<b>有</b>	轉正右手羽平 向西左羽植	<b>壬</b>	轉身向西左羽 植右手垂羽平
<b>有</b>	轉正雙 羽植	<b>林</b>	身向東右羽植 左手垂羽平

【訳文】

第四句

羽 左右の青衣童子はそれぞれ対面して立ち、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

虫 左右の青衣童子はそれぞれ対面して立ち、顔を微かに北に向け、身体は微かに俯き加減にし、両臂を伸ばし、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

微 左右の青衣童子はそれぞれ正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

音 左右の青衣童子はそれぞれ背中合わせに立つ毎に両手の羽をそれぞれ垂直に立て、左側の青衣童子は左足を挙げて左手を少し高くする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

第五句

万 左足を右足の位置より前に出して蟹足のように膝を少し曲げ、左手に握っている羽は西を指し示し、右手の羽は垂直に立てて右臂を伸ばす。

物 身体を微かに西に向け、左足を一步前に進め、続いて右足も一步進め、右手の羽を垂直に立てたまま右臂を伸ばし、左手の羽は右手の羽に寄りかからせて斜め上を向かせる。

芸 一步後退し、\*正立に戻り、左手に持っている羽は地面と平行に横にして東を指し示し、右手の羽を垂直に立てる。

生 身体を回して東を向き、両手の羽をそれぞれ垂直に立てたまま南の方向に両臂を伸ばす。

第六句

有 \*正立に戻り、右手の羽は地面と平行に横にして西を指し示し、左手の羽を垂直に立てる。

壬 身体を回して西を向き、左手の羽は垂直に立て、右手を下げ羽が地面と平行になるようにする。

有 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

林 身体を東に向け、右手の羽は垂直に立て、左手を下げて羽が地面と平行になるようにする。

【舞譜】

第四句

羽



各對面立  
雙羽植

第五句

萬



左足前右足跪  
左手握羽向西  
右羽植伸臂

第六句

有



正立  
右手羽平向西  
左手羽植  
右羽植

蟲



各對面  
面微向北身微俯  
雙臂伸雙羽植

物



身微向西  
左足進前一步  
右足進前一步  
右羽植伸臂  
左羽倚右羽斜向上

壬



俱轉身向西  
左羽植  
右手垂羽平

徵



正立  
雙羽植

芸



正立  
左羽平向東  
右羽植

有



正立  
雙羽植

音



每對相背立  
雙羽植  
在左舉右足  
在右舉左足  
左手少高  
右手對作勢

生



俱轉身向東  
雙羽向南植伸臂

林



俱轉身向東  
右羽植  
左手垂羽平

38a  
8

第七句有 轉正左羽倚肩右羽植

事 各轉身向東左羽倚肩右羽平

南 轉正雙羽植

郊 雙羽上拱頭微俯

第八句陟 正立雙羽植進前一步

降 雙羽後一步雙羽仍植

維 雙羽並仍植

欽 頭微俯目下視雙羽仍並植

第九句瞻 正立雙羽植

仰 左足向前進一步雙羽橫肩上面微仰

昊 身不動雙羽高舉交成十字

天 雙手仍舉雙羽並植身不動

38b  
I

【訳文】  
第七句

有 \*正立に戻り、左手の羽を左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立てる。

事 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して東を向き、左手の羽は左肩に寄りかからせたまま、右手の羽を地面と平行になるようにする。

南 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

郊 それから両手の羽をそれぞれ胸の位置まで上げて両手を相互に少し狭めて揃え、頭を微かに俯き加減にする。

第八句

陟 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てて前に一步進み出る。

降 そこから一步後退し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てたままにする。

維 その位置で両手は相互に少し狭めて揃え、両手の羽をそれぞれ垂直に

立てたままにする。

欽 頭を微かに俯き加減にして視線を下に落とし、両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

第九句

瞻 \*正立し、両手の羽は垂直に立てたままにする。

仰 左足を前に一步出し、両手の羽はそれぞれ少し横にして肩まで上げ、頭を微かに仰向き加減にする。

昊 身体の位置はそのまま動かさず、両手の羽をそれぞれ頭上高く挙げて交差させ、十文字になるようにする。

天 両手は変わらず頭上高く挙げたままにして、両手を相互に少し狭めて揃え、その両手の羽をそれぞれ垂直に立て、身体の位置は変えることなく動かない。

【舞譜】

第七句



正立  
左羽倚肩  
右羽植

第八句



正立  
雙羽並植

第九句



正立  
雙羽植

事



俱轉身向東  
左羽倚肩  
右羽平

降



正立  
雙羽植

仰



左足向前進一步  
雙羽橫肩上  
面微仰

南



正立  
雙羽植

維



正立  
雙羽並植

昊



左足向前進一步  
雙羽高舉交成十字

郊



正立  
雙羽上拱  
頭微俯

欽



正立  
頭微俯目下視  
雙羽並植

天



左足向前進一步  
雙手舉  
雙羽並植

第十句 生

正立退一  
歩雙羽植  
爲後跪左膝  
雙羽仍植

物先跪右膝  
雙羽仍植  
心首伏地  
雙羽仍植

【訳文】

第十句

生 \*正立し一步後退し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

物 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

為 それから続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

心 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

【舞譜】

第十句

生



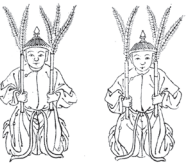
正立  
雙羽植

物



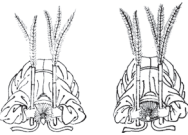
先跪右膝  
雙羽植

爲



後跪左膝  
雙羽植

心



首伏地  
雙羽植



第二章

第一句 維

有 羽起 仍立 植雙

本 國 羽起 右羽 平居 中植 右羽 中左

【訳文】

第二章

第一句

維 身体を起こすが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

国 続いて先に左足を起こすが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

る。

有 続いて起立して、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

本 右手の羽を身体の中央に動かして垂直に立て、左手の羽は横に倒して地面と平行にした上で、右手に持っている羽の真ん中に宛が<sup>あて</sup>わせる。

【舞譜】

第二章

第一句

維



後跪左膝 雙羽植

國



先跪右膝 雙羽植

有



正立 雙羽植

本



正立 右羽居中植 左羽居左中 右羽平横 左羽中

第二句 匪	各正立 雙羽植	民	各轉身對面立 在左東 向在右西 向雙羽仍植
伊	仍各對面立 在左右羽植 左羽平指南 在右對作勢	何	轉正雙 羽植
第三句 維	各向東 雙羽植	民	向東左羽 植右羽垂
有	轉正左羽仍 植右羽平衡	天	左足進一步 左羽 高舉植右羽 平額
第四句 匪	正立退步 落羽 左羽植右羽平	食	正面雙 羽植
則	各對面在左 左羽倚肩 右羽植在右對 作勢	那	各對立面微偏 身微側在左左羽 高倚肩右羽平 在右對作勢

【訳文】

第二句

匪 左右の青衣童子はそれぞれ\*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。  
 民 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に對面して立ち、左側の青衣童子は東向きになり、右側の青衣童子は西向きになるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

伊 変わらず左右の青衣童子はそれぞれ相互に對面して立ったまま、左側の青衣童子は右手の羽を垂直に立て、左手の羽を地面と平行にして南を指し示すようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

何 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第三句

維 左右の青衣童子はそれぞれ顔を東に向け、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

民 東を向き、左手の羽を垂直に立て、右手の羽は垂らす。

有 \*正立に戻り、左手の羽は変わらず垂直に立てたままにして、右手の

羽は地面と平行になるように横にする。

天 左足を前に一步進めながら左手の羽を高く挙げて垂直に立て、右手の羽は地面と平行になるように横にして額の位置にする。

第四句

匪 \*正立したまま、一步退きながら両手の羽を上から下に動かし、左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽は地面と平行になるように横にしたままにする。

食 \*正立したまま、両手に持っているそれぞれの羽を垂直に立てる。  
 則 左右の青衣童子はそれぞれ相互に對面して立ち、左側の青衣童子は左手の羽を左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立てるようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

那 左右の青衣童子はそれぞれ相互に對面して立ち、顔を微かに傾げ、身体を微かに傾け、左側の青衣童子は左手の羽を左肩に寄りかからせ、高き上げ、右手の羽は地面と平行になるように横にする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

【舞譜】

第二句



正立  
雙羽植

第三句



正立  
雙羽植  
面轉向東

第四句



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

民



各轉身對面立  
在左向東  
在右向西  
雙羽植

民



俱轉身西東向  
左羽植  
右羽垂  
左羽垂

食



正立  
雙羽植

伊



各對面立在左右  
左羽植  
右羽植  
左羽植  
右羽植  
左羽植  
右羽植  
左對作勢  
右對作勢

有



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

則



各對面立  
在左左羽倚肩  
在右右羽倚肩  
左羽植  
右羽植  
在左對作勢  
在右對作勢

何



正立  
雙羽植

天



左足進一步  
左羽高舉植  
右羽高舉植  
左羽平額  
右羽平額

那



各對立面  
微偏身微側  
在右左羽倚肩上  
在左右羽倚肩上  
左羽平  
右羽平  
在左對作勢  
在右對作勢

<b>第五句</b> 螻	對面立雙羽植在左右 手微高在右對作勢	<b>第六句</b> 平	雙羽平交 成十字	<b>第七句</b> 我	正立雙羽植頭 微俯目下視	<b>敢</b>	各轉身對面在左先橫右 羽左羽植在右對作勢	<b>後</b>	在左復橫左羽在右羽上每 對雙羽相交接在右對作勢
<b>鳴</b>	正立雙羽植左手收 向內右手推向外	<b>南</b>	左羽平肩西 指右羽植	<b>訛</b>	轉面向東左 羽植右羽平	<b>秩</b>	雙羽 植	<b>矣</b>	左羽植右 羽平衡
<b>各對面側立在左右足少前右羽高 倚肩左上羽指東平繞在右對作勢</b>									

【訳文】

第五句

螻 左右の青衣童子は相互に對面して立つたまま、両手の羽をそれぞれ垂直に立て、左側の青衣童子は右手を微かに高くする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

螻 左右の青衣童子はそれぞれが傍にいるように對面して立ち、左側の青衣童子は右足を少し前に出し、右手の羽を右肩に寄りかからせたまま高く上げ、左手の羽は東を指し示して地面と平行になるよう、垂直に立てた位置からぐるっと回す。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

鳴 \*正立し、両手の羽はそれぞれ垂直に立てたまま、左手首をぐっと内側に向かって収め入れ、右手首をぐっと外側に向かって推し出す。  
矣 \*正立を変えることなく、左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽を地面と平行になるように横にする。

第六句

平 \*正立のまま、両手の羽をそれぞれ地面と平行になるようにして交差させ、十文字の形になるようにする。

秩 それから両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

南 左手の羽を地面と平行になるように横にしながら肩まで上げて西を指し示し、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

訛 顔が東に向くように身体を回し、左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面と平行になるようにする。

第七句

我 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立て、頭を微かに俯き加減にして視線を下に落とす。

祀 \*正立し、両手の羽を変わず垂直に立てたまま、目線は真つ直ぐ正視するようにする。

敢 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して對面して立ち、左側の青衣童子は先ず右手の羽を横に倒し、左手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

後 左側の青衣童子は続いて左手の羽を横に倒して右側の青衣童子が持っている羽の上に重ね、左右の青衣童子が交互にこれを繰り返すことで、左右の位置にいる青衣童子の両手に持っている羽がそれぞれ交互に重なり合うようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

【舞譜】

第五句

螻



各對面立

雙羽植



在左右手微高

在左右對作勢

第六句

平



正立

雙羽平



交成十字

第七句

我



正立

頭微俯目下視



雙羽並植

颯



各對面側立

在左右足少前

在左右手微高



在左右對作勢

左羽指西平繞

秩



正立

雙羽植



祀



正立

雙羽植



鳴



正立

雙羽植



右手收向內

左手推向外

南



正立

右羽平肩東西指

左羽植



敢



各轉身對面立

在左右橫右羽

左羽植



在左右對作勢

矣



正立

左羽植



右羽平衡指西

訛



俱轉面向西東

左羽植

右羽平垂



後



各對面立

在左右橫左羽在右羽上

每對雙羽相交接



在左右對作勢



第八句 我

各對面立左先起左  
羽右羽橫在右對作勢  
樂 在左復起右羽並植  
兩手相近在右對作勢

維 各轉正  
雙羽植

和 雙羽仍植  
兩手並

第九句 鼉

各東面立雙  
手並雙羽植

鼓 起右足  
雙羽植

淵 轉正雙手  
並雙羽植

淵 西向起左  
足雙羽植

第十句 童

各正立  
雙羽植

舞 先跪右膝  
雙羽仍植

娑 後跪左膝  
雙羽仍植

娑 首伏地  
雙羽仍植

【訳文】

第八句

我 左右の青衣童子はそれぞれ相互に對面して立ち、左側の青衣童子は先  
ず左手の羽を垂直に起こすけれども、右手の羽は横に倒したままにする。

右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

樂 左側の青衣童子は続いて同じようにまた右手の羽を垂直に起こし、羽  
をそれぞれ垂直に立てたままの両手を互いに近づける。右側の青衣童子は  
それに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

維 左右の青衣童子はそれぞれ\*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に  
立てる。

和 それから、両手の羽は変わらず垂直に立てたまま、両手を近づけて揃  
える。

第九句

鼉 左側の青衣童子はそれぞれ東に向いて立ち、両手を相互に少し狭めて  
揃え、その両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

第十句

鼓 続いて右足を上げるが、両手の羽は垂直に立てたままにする。  
淵 \*正立に戻り、両手を相互に少し狭めて揃え、その両手の羽は変わら  
ず垂直に立てたままにする。  
淵 左側の青衣童子は西に向いて立って左足を上げるが、両手の羽は変わ  
らず垂直に立てたままにする。  
童 左右の青衣童子はそれぞれ\*正立し、両手の羽を垂直に立てたままに  
する。  
舞 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたま  
まにする。  
娑 それから続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたま  
まにする。  
娑 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままに  
する。

【舞譜】

第八句



各轉身對面立  
在左橫右羽  
在右橫左羽  
左右對作勢

第九句



俱面向西立  
雙手並雙羽植

第十句



正立  
雙羽植

樂



各對面  
在左兩手相近  
在右兩手相近  
雙羽並植  
左右對作勢

鼓



俱面向西東  
起左右足  
雙羽植

舞



先跪右膝  
雙羽植

維



正立  
雙羽植

淵



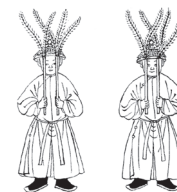
正立  
雙羽並植

姿



後跪左膝  
雙羽植

和



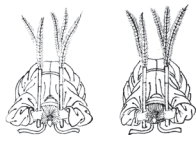
正立  
雙羽並植

淵



俱面向西  
起右足  
雙羽植

姿



首伏地  
雙羽植

3	40b	1	8	40a	5
<b>第三章</b>					
<b>第一句 自</b>					
身起雙 羽植					
<b>在</b>					
起立雙 羽仍植					
<b>第二句 春</b>					
轉面相向左羽 倚肩右羽植					
<b>第三句 日</b>					
夏 正立面轉向東右羽 植近左肩左羽垂					
龍 各向西立右羽植左羽 柄倚右羽指南如曲尺					
見 左羽倚肩右羽 植作向外推勢					
<b>古</b>					
先起左足 雙羽仍植					
<b>昔</b>					
左羽高舉橫額 上指西右羽植					
<b>郊</b>					
面轉正左羽高舉至額頭 微俯目下視右羽倚肩					
<b>零</b>					
轉正雙 羽植					
<b>惟</b>					
轉正雙 羽植					

【訳文】

第三章

第一句

自 身体を起こすが、両手の羽はそれぞれ垂直に立てたままにする。

古 続いて先に左足を起こすが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

在 続いて起立して（\*正立に戻るが）、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

昔 そのままの姿勢で左手の羽を額の上まで高く挙げて地面と平行にして西を指し示すようにし、右手の羽は垂直に立てたままにする。

第二句

春 左右の青衣童子はそれぞれ顔を回してお互いに目を合わせるようにし、左手の羽を左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立てたままにする。

郊 顔を正面に戻して\*正立し、左手の羽を額の位置まで高く挙げ、頭を微

かに俯き加減にして視線を下に落とすし、右手の羽は右肩に寄りかからせる。  
夏 \*正立したまま、顔を回して東に向け、右手の羽は垂直に立てて左肩に近づけ、左手の羽を垂らす。

零 顔を戻して\*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第三句  
日 「青衣童子は」それぞれ西を向いて立ち、右手の羽を垂直に立て、左手の羽は柄の部分で右手の羽に寄りかからせ、「右手の羽とで」\*曲尺のようにして南を指し示す。

惟 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

龍 左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽を地面と平行になるように横にして左手の羽より下の位置になるようにする。

見 左手の羽を左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立て、外側に向かつてぐっと押し出す。



後跪左膝  
雙羽植



各轉面相向  
左羽倚肩  
右羽植



俱轉身向西  
右羽植  
左羽柄倚左羽  
指南如曲尺



先跪右膝  
雙羽植



正立  
左羽高舉至額  
右羽微俯目下視  
左羽倚肩



正立  
雙羽植



正立  
雙羽植



正立  
俱面轉向西  
右羽植近右肩  
左羽植垂



正立  
左羽植  
右羽植  
左羽平衡  
右羽下



正立  
右羽高舉橫額上指東西  
左羽植



正立  
雙羽植



正立  
左羽倚肩  
右羽植  
作向外推勢



41a 1	8	4ob 4
<p>以 右羽植左 羽平指東</p>	<p>第六句 神 進一步雙羽 並舉至頂</p>	<p>第四句 田 正立左羽橫額上右 羽植居中如十字式</p>
<p>愉 身向東雙羽向 南伸臂羽植</p>	<p>留 退一步正 立雙羽植</p>	<p>燭 身蹲左羽平 衡右羽植</p>
	<p>陳 雙手並 雙羽植</p>	<p>趨 轉身對面 立雙羽植</p>
	<p>禮 各對面立 雙羽植</p>	<p>朝 雙羽 植</p>
	<p>既 轉正雙 羽植</p>	<p>第五句 盛 對面牽蓋足高前右足高齊微作勢 牽倚蓋牽隨雙蓋牽對勢</p>

【訳文】

第四句

田 \*正立したまま、左手の羽は額の上で横に倒し、右手の羽を垂直に立てたまま身体の中央に動かし、十文字になるようにする。

燭 身体をかがめ、左手の羽は地面と平行になるように横にし、右手の羽を垂直に立てる。

朝 (続いて起立して、正立に戻り) 両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

趨 左右の青衣童子は身体を回し、それぞれ対面して立ち、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第五句

盛 左右の青衣童子は変わらずそれぞれ対面して立ち、左側にいる青衣童子は左足を前に出し、右足を後ろにして、身体を微かにぐっと進めるようにし、左手を左の端まで伸ばし、右手も左手と同じようにし、両手の羽を揃えて垂直に立てる。右側にいる青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

礼 左右の青衣童子はそれぞれ対面して立ち、両手の羽を変わず垂直に立てる。

既 \*正立に戻り、両手の羽をやはり垂直に立てる。

陳 それから両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

第六句

神 それから一步前に進み、両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽を頭の一番上まで挙げる。

留 一步退き、\*正立し、両手の羽を下して垂直に立てる。

以 右手の羽は変わらず垂直に立てたまま、左手の羽を地面と平行に横にして東を指し示すようにする。

愉 身体を回して東を向き、両手の羽が南に向くように両臂を伸ばし、両手の羽は垂直に立てたままにする。



【舞譜】

第四句

田



正立



右羽居中植  
左羽平橫  
右羽中

第五句

盛



各對面立



在左左足居前  
右右足居後  
後身微作進勢  
右左手伸  
向左右  
左手隨之  
雙羽並植  
在左右對作勢

第六句

神



進一步正立



雙羽並舉至頂

燭



正面身蹲



右羽植  
左羽平衡

禮



各對面立



雙羽植

留



正立



雙羽植

朝



正立



雙羽植

既



正立



雙羽植

以



正立



右羽植  
左羽平指東

趨



各對面立



雙羽植

陳



正立



雙羽並植

愉



轉身俱向東



雙羽向南伸臂羽植

<b>第七句</b>	<b>雷</b>	右手高舉右羽横額上左手 高舉居中左羽植右羽上	<b>師</b>	各向西立左羽 植右羽平指西
	<b>闕</b>	轉正雙 羽植	<b>闕</b>	轉身向東右羽 植左羽平指東
<b>第八句</b>	<b>飛</b>	轉正左羽倚肩右 羽植作推向外勢	<b>廉</b>	左羽仍倚肩右羽 平衡面轉向東
	<b>衙</b>	面轉正 雙羽植	<b>衙</b>	各對面在左身面皆向 東雙羽植在右對作勢
<b>第九句</b>	<b>日</b>	各轉向東 雙羽植	<b>時</b>	轉正進一步 雙羽仍植
	<b>雨</b>	退一步左羽 平額右羽植	<b>賜</b>	各轉向西左羽植右 羽指南交成如曲尺

【訳文】

第七句

雷 (\*正立に戻り) 右手を高く挙げ、右手の羽は横に倒して額の上に位置するようにし、左手を高く挙げて身体の中央に動かし、垂直に立てた左手の羽が右手の羽よりも上の位置になるようにする。

師 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して西を向いて立ち、左手の羽は垂直に立て、右手の羽を横に倒して地面と平行にし、西を指し示すようにする。

闕 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

闕 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して東を向いて立ち、右手の羽は垂直に立て、左手の羽を横に倒して地面と平行にし、東を指し示すようにする。

第八句

飛 \*正立に戻り、左手の羽は左肩に寄りかからせ、右手の羽を垂直に立て、外側に向かってぐっと押し出す。

廉 左手の羽は左肩に寄りかからせのまま、右手の羽を横に倒して地面と

平行になるようにし、顔を回して東を向くようにする。

衙 顔を正面に戻して\*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

衙 左右の青衣童子はそれぞれ対面して立ち、左側にいる青衣童子は身体も顔も俱に東に向け、両手の羽を変わず垂直に立てる。右側にいる青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

第九句

日 左側にいる青衣童子はそれぞれ変わらずに東に向いて立ち、両手の羽をやはり垂直に立て「たまま、その両手は揃え」る。

時 \*正立に戻って前に一步進み、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

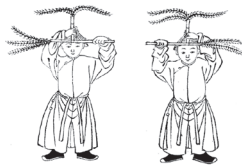
雨 一步後退し、左手の羽を横に倒して額の位置で地面と平行になるようにし、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

賜 左側にいる青衣童子はそれぞれ身体を回して西に向け、左手の羽を垂直に立て、右手の羽は南を指し示すようにして左手の羽と交差させ、\*曲尺のような形状にする。

【舞譜】

第七句

雷



正立  
右手高舉  
左手右橫額上  
右手高舉居中  
左羽植  
右羽植  
左羽上

第八句

飛



正立  
左羽倚肩  
右羽植  
作向外推勢

第九句

日



各對面立  
雙羽植

師



俱轉身向西  
左羽植  
右手垂羽平

廉



俱轉面向西東  
左羽倚肩  
右羽平衡  
左羽平衡

時



正立  
雙羽植

闔



正立  
雙羽植

衙



正立  
雙羽植

雨



正立  
左羽平額  
右羽植  
左羽植

闔



俱轉身向東  
右羽植  
左手垂羽平

衙



各對面立  
雙羽植

暘



俱轉向東  
左羽植  
右羽指南  
左羽指南  
右羽指南  
左羽指南  
如曲尺

41b 1	41a 8
新 雙羽仍植	利 轉正立 雙羽植
畚 首伏地 雙羽仍植	我 各先跪右膝 雙羽仍植

【訳文】

第十句

利 \* 正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

我 左右の青衣童子はそれぞれ、そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

新 続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。  
畚 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

【舞譜】

第十句

利



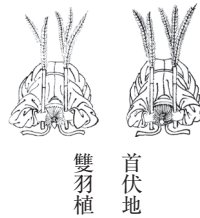
我



新



畚



第四章

第一句於

身起雙  
羽植  
並起右足正  
立雙羽仍植

先起左足  
雙羽植  
雙手高舉雙  
羽平衡額上

【訳文】

第四章

第一句

於 身体を起こすが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。  
穆 続いて先に左足を起こすが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

穹 それから右足を起こして\*正立するが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

宇 それから両手を高く挙げ、両手の羽が頭上で地面と平行になるようにする。

【舞譜】  
第四章  
第一句



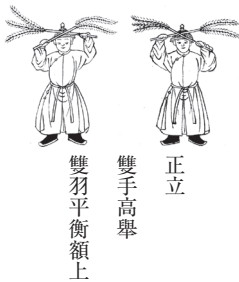
穆



穹



宇





42a	41b
2	8
1	5
<b>第二句</b> 在 正立 雙 羽植 各轉身面對在左右羽植 左羽指南在右對作勢 <b>第三句</b> 對 轉身向東 雙羽植 嚴 轉正左羽仍 植右羽平衡 <b>第四句</b> 上 正面左足進前一步 雙手高舉雙羽植 是 退一步 雙羽植	<b>第二句</b> 在 正立 雙 羽植 各轉身面對在左右羽植 左羽指南在右對作勢 <b>第三句</b> 對 轉身向東 雙羽植 嚴 轉正左羽仍 植右羽平衡 <b>第四句</b> 上 正面左足進前一步 雙手高舉雙羽植 是 退一步 雙羽植

【訳文】

第二句

在 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

郊 右手の羽は変わらず垂直に立てたまま、左手を高く挙げ、横に倒した羽が額の位置で地面と平行になるようにし、その後ろにある右手の羽と交差して十文字になるようにする。

之 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して対面して立ち、左側にいる青衣童子は右手の羽を立てたまま、左手の羽が南を指し示すようにする。右側にいる青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

南 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第三句

対 身体を回して東に向け、両手の羽は変わらず垂直に立てる。

越 それから左手の羽は立てたまま、右手の羽を少し垂らす。

郊 右羽仍植左手高舉  
羽平額交成十字

南 轉正雙  
羽植

越 左羽植右  
羽少垂

恭 雙羽  
植

帝 左足不動雙手高拱  
頭微俯雙羽植相並

臨 頭微俯雙  
羽仍植

嚴 \*正立に戻り、左手の羽は変わらず垂直に立てたまま、右手の羽を地面と平行になるようにする。

面と平行になるようにする。

恭 それから両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第四句

上 顔を北に向け、左足を前に一步進め、両手を高く挙げ、持っている両方の羽をそれぞれ垂直に立てる。

帝 そのまま左足は動かさずに両手を相互に少し狭めて高く挙げ、頭を微かに俯き加減にして、両手の羽はそれぞれを垂直に立てて相互に合わせ揃える。

是 それから一步後退し、「\*正立に戻って」両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

臨 「\*正立したまま」頭を微かに俯き加減にして、両手の羽は変わらずそれぞれ垂直に立てる。

【舞譜】

第二句



正立  
雙羽植

第三句



各轉身對面立  
在左向東  
在右向西  
雙羽植

第四句



左足向前進一步  
雙手舉  
雙羽並植

郊



正立  
左羽平額  
右羽植

越



俱轉身向西東  
左羽植  
右羽少垂

帝



正面  
左足進前一步  
雙手高拱  
頭微俯  
雙羽植相並

之



各轉身面對  
在左右羽植  
左右指南  
左右對作勢

嚴



正立  
左羽植近右肩  
右羽植近左肩  
左右平衡指東西

是



正立  
雙羽植

南



正立  
雙羽植

恭



正立  
雙羽植

臨



正立  
頭微俯  
雙羽植

第五句 繭

轉身對面在左左羽倚  
肩右羽植在右對作勢  
側身在左左足進前面向東右羽  
斜倚肩左羽斜指東在右對作勢

量

轉正左手收向內右  
手推向外雙羽植  
左羽植右  
羽平衡

第六句 用

正立雙羽平  
衡交成十字

惘

右羽植左羽高  
舉平肩指西  
右羽仍植左羽平  
衡指西頭微俯

第七句 惘

正立頭微俯目  
下視雙羽植

我

左羽仍植  
右羽平衡

將

雙羽

惘

正視雙  
羽仍植

躬

頭微俯目下  
視雙羽平交

【訳文】

第五句

繭 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に対面して立ち、左側の青衣童子は左手の羽を左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

栗 それから身体を側め、左側の青衣童子は左足を前に出し、顔を東に向け、右手の羽は斜めにして右肩に寄りかからせ、左手の羽は斜めにして東を指し示すようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

量 \*正立に戻り、左手首をぐっと内側に向かって収め入れ、右手首をぐっと外側に向かって推し出し、両手の羽はそれぞれ垂直に立てる。

幣 それから左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽は地面と平行にする。

第六句

用 \*正立したまま、両手の羽をそれぞれ地面と平行になるようにして交

差させ、十文字の形になるようにする。

將 両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

惘 それから右手の羽は垂直に立てたまま、左手の羽を高く挙げて肩の位置で地面と平行にして西を指し示すようにする。

惘 それから右手の羽は変わらず垂直に立て、左手の羽を腰の位置まで下げてやはり地面と平行に西を指し示すようにし、頭を微かに俯き加減にする。

第七句

惘 \*正立し、頭を微かに俯き加減にして視線を下に落とし、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

惘 そのまま視線を正面に戻し、両手の羽は変わらずそれぞれ垂直に立てる。

我 左手の羽は変わらず垂直に立てたまま、右手の羽を横にして地面と平行にする。

躬 頭を微かに俯き加減にして視線を下に落とし、両手の羽をそれぞれ地面と平行にして交差させる。

【舞譜】

第五句

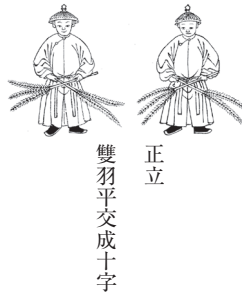
繭



各轉面相向  
左羽倚肩  
右羽植

第六句

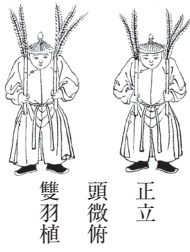
用



正立  
雙羽平交成十字

第七句

耑



正立  
頭微俯  
雙羽植

栗



各側身  
在左右足進前  
面  
左西  
右東  
左羽斜倚肩  
右羽斜指西  
在左右對作勢

將



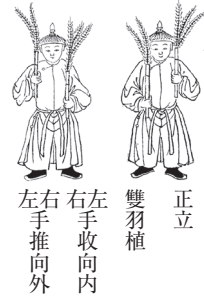
正立  
雙羽植

耑



正立  
頭微俯  
兩手相並  
雙羽植

量



正立  
雙羽植  
左手收向內  
右手推向外

憊



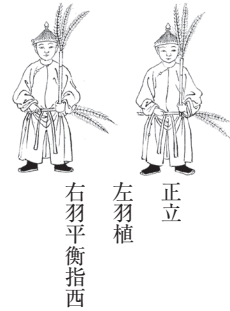
正立  
左右羽植  
左右羽高舉平肩指東西

我



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

幣



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

忱

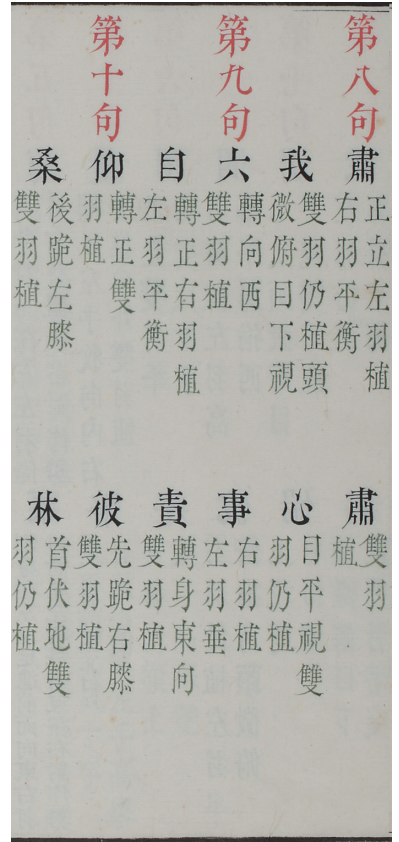


正立  
左右羽植  
左羽平衡指東西  
頭微俯

躬



正立  
頭微俯目下視  
雙羽平交



第八句 肅

正立 左羽植  
右羽平衡

肅

雙羽植

第九句 六

轉向西  
雙羽植

事

右羽植

第十句 仰

轉正  
雙羽植

彼

先跪右膝  
雙羽植

桑 後跪左膝  
雙羽植

林 首伏地  
雙羽植

【訳文】

第八句

肅 \*正立して左手の羽は変わらず垂直に立てたまま、右手の羽を地面と平行になるようにする。

肅 それから両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

我 両手の羽は変わらず垂直に立てたまま、頭を微かに俯き加減にして視線を下に落とす。

心 そのまま視線を正面に戻し、両手の羽は変わらずそれぞれ垂直に立てる。

第九句

六 身体を回して西に向け、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

事 それから右手の羽は変わらず垂直に立てたまま、左手の羽を垂らす。

自 \*正立に戻り、右手の羽は同じく垂直に立てたまま、左手の羽は横にして地面と平行にする。

責 身体を回して東に向け、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第十句

仰 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

彼 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

桑 続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

林 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。



【舞譜】

第八句



正立  
右手羽平向東  
左手羽植

第九句



俱轉面向西  
雙羽植

第十句



正立  
雙羽植

肅



正立  
雙羽植

事



俱轉面向西  
右羽植  
左羽垂

彼



先跪右膝  
雙羽植

我



正立  
頭微俯  
目下視  
雙羽並植

自



正立  
右羽高橫平肩指東  
左羽植

桑



後跪左膝  
雙羽植

心



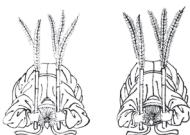
正立  
頭微俯  
雙羽植

責



各轉身對面立  
在右向西  
雙羽植

林



首伏地  
雙羽植

第五章

第一句 權 身起 雙羽植

輿 先起 左足 雙羽植

粒 并起 右足 正立 雙羽仍植

食 左羽 高 橫 平 肩 指 西 右 羽 植

第二句 實 轉向 東 立 左 羽 倚 肩 右 羽 植

維 身 轉 正 面 轉 向 西 右 羽 植 左 羽 垂

后 正 立 面 轉 向 東 右 羽 仍 植 左 羽 仍 垂

稷 雙 羽 植 正 面 轉 正 雙 羽 植

第三句 百 面向 西 右 羽 植 左 羽 柄 倚 右 羽 指 南 如 曲 尺

王 左 羽 植 雙 羽 植 正 雙 羽 植

承 左 羽 倚 肩 右 羽 植

之 平 衡 左 羽 下 左 羽 植 右 羽

【訳文】

第五章

第一句

權 身体を起こすが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

輿 続いて先に左足を起こすが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

粒 それから右足を起こして\*正立するが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

食 そのまま左手の羽を肩の位置まで柄高く挙げ、横に倒して西を指し示すようにし、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

第二句

實 身体を回して東に向いて立ち、左手の羽は左肩に寄りかからせ、右手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

維 身体を回して\*正立し、顔を回して西に向け、右手の羽はやはり垂直

に立てたまま、左手の羽を垂らす。

后 \*正立したまま顔を回して東に向け、右手の羽は変わらず垂直に立てたままにして、左手の羽もやはり垂らしたままにする。

稷 顔を回して\*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

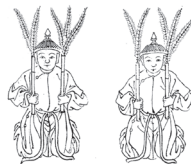
第三句

百 顔を西に向けて右手の羽を垂直に立て、左手の羽は柄の部分を右手の羽に寄りかからせ、\*曲尺のようにして南を指し示す。

王 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

承 それから左手の羽を左肩に寄りかからせ、右手の羽は垂直に立てたままにする。

之 それから左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面と平行にするが、その位置は左手の羽より下にする。



雙羽植  
後跪左膝



俱轉身向東立  
右羽倚肩  
左羽植



俱轉身向西  
右羽植  
左羽柄倚左羽  
指南如曲尺



雙羽植  
先跪右膝



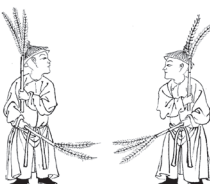
俱身轉正面轉向西  
右羽植  
左羽植  
右羽垂



正立  
雙羽植



正立  
雙羽植



正立俱面轉向西  
右羽植  
左羽植  
右羽垂



正立  
右羽倚肩  
左羽植



正立  
右羽高橫平肩指東  
左羽植



正立  
雙羽植



正立  
左羽植  
右羽平衡右羽下

3	1	8	6
<b>第六句</b>	<b>第五句</b>	<b>第五句</b>	<b>第四句</b>
無	小	邦	永
左足少前左羽平 指東右羽仍垂	右羽植左 羽平指南	轉正雙 雙羽植在右對作勢	正面身蹲右羽 植左羽平衡
德	子	極	奠
左羽植右羽仍 倚左羽少垂	兩轉正左足少前右羽伸向南左 手隨之身微作斜進勢雙羽植	在左左足進前左手伸向上右手隨 之雙羽植面斜向東在右對作勢	正立右羽仍植 左羽高舉平額

【訳文】  
第四句

永 北の正面を向いたまま身体をかがめ、左手の羽は地面と平行になるように横にし、右手の羽を垂直に立てる。

奠 \*正立して右手の羽は変わらず垂直に立てたままにして、左手の羽を高く挙げて額の位置で地面と平行にする。

邦 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に対面して立ち、左側の青衣童子は東向きになり、両手の羽を変わらず垂直に立てたままにする。

右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

極 左側の青衣童子は左足を前に進め、左手を上に向けて伸ばし、右手もこれに追隨させて動き、両手の羽を立てたまま、顔を斜めに回して東に向ける。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

第五句

惟 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

予 それから左側の青衣童子は身体を回して東向きになり、両手の羽はそれぞれ変わらず立てたままにする。

Figure 20. ある青衣童子の舞形(「節次」六21a)



右羽植左羽平指南：「右手の羽を垂直に立て、左手の羽を地面と平行にして南を指し示すようにする」は、「六21a」の左列の記載(右図Figure 20.参照)と同じであるが、その図は「左手の羽を左肩に寄りかからせて」おり、記載内容と一致していない(「御製律呂正義後編」一二10b・11a所載の図も「節次」同様に誤る)。そのため、「右羽植左羽平指南」の記載内容と一致する「各對面立在左右羽植左羽平指南在右對作勢」という説明のある「六09a」の図を載せた(p.131参照)。

小 \*続いて右手の羽を垂直に立てたまま、左手の羽を地面と平行にして南を指し示すようにする。

子 それから顔を北の正面に回して\*正立に戻り、左足を少し前に出し、右手を伸ばして南に向け、左手もこれに追隨させて動くのであるが、その際には身体が微かながら斜めになり、両手の羽をそれぞれ垂直に立てて勢よく動かす。

第六句

臨 左側の青衣童子は身体を回して東向きになり、両手の羽をそれぞれ立てる。

民 それから左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽を左手の羽に寄りかからせて少し垂らすようにする。

無 続いて左足を少し前に出し、左手の羽は地面と平行になるよう横に倒して東を指し示すようにし、右手の羽は変わらず垂らしたままにする。

徳 それから左手の羽を垂直に立てるが、右手の羽はやはり左手の羽に寄りかからせて少し垂らすようにする。

第四句

永



正面身蹲  
右羽植  
左羽平衡

第五句

惟



正立  
雙羽植

第六句

臨



各對面立  
雙羽植

奠



正立  
左羽高舉橫額上指西  
右羽植

予



各對面立  
雙羽植

民



各轉身向東  
右羽植  
左羽倚左羽少垂

邦



各對面立  
雙羽植

小



各對面立在右  
左羽植右左指南  
右左對作勢

無



俱轉向東西  
左足少前  
右羽平指西  
左羽垂

極



在右左足進前  
右左手向上  
左手隨之  
雙羽植面斜向西  
在右對作勢

子



面轉正  
右足少前  
右左手向南  
左手隨之  
身微作斜進勢  
雙羽植

德



各轉身向東  
右羽植  
左羽倚左羽少垂



44a 1	8	43b	4
<p><b>第七句</b> 敢 身仍不動 雙羽植</p> <p><b>第八句</b> 潔 頭微俯兩手 相並雙羽植</p> <p><b>第九句</b> 命 正立左羽植右羽 平衡面轉向西</p> <p>秩 轉身向東 雙羽仍植</p> <p>宗 身不動雙 羽橫肩上</p>	<p><b>第七句</b> 懈 轉正雙 羽植</p> <p><b>第八句</b> 年 正視雙 羽植</p> <p><b>第九句</b> 彼 雙羽植面 轉向東</p> <p>翼 頭微俯雙 羽仍平交</p> <p>翼 正視雙羽仍 交如一字</p> <p>衷 如一字 雙羽平交</p>		

【訳文】

第七句

敢 左側の青衣童子は変わらず身体を動かさずに東向きのまま、両手の羽をそれぞれ立てる。

懈 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

祈 頭を微かに俯き加減にして、羽をそれぞれ垂直に立てて持っている両手を相互に近づけて揃える。

年 視線を戻して\*正立して北の正面を正視し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第八句

潔 \*正立したまま左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面と平行に倒して西を指し示すようにする。

衷 それから両手の羽をそれぞれ地面と平行にして交差させ、横一文字の形になるようにする。

翼 頭を微かに俯き加減にするが、両手の羽は変わらずそれぞれ地面と平行に交差させて横一文字のようにしたままにする。

翼 頭をもとに戻して北の正面を正視するが、両手の羽は変わらずそれぞれ地面と平行に交差させて横一文字のようにしたままにする。

第九句

命 \*正立して左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面に平行になるように倒したまま、顔を回して西に向ける。

彼 それから両手の羽をそれぞれ垂直に立て、顔を回して東に向ける。

秩 続いて左側の青衣童子は身体を回して東向きになり、両手の羽はそれぞれ変わらず立てたままにする。

宗 それから左側の青衣童子は身体を東向きのまま動かさないうで、両手に持っている左手の羽と右手の羽をそれぞれ左肩と右肩の上になるように横に下げる。

【舞譜】

第七句 敢



各對面立  
雙羽植

第八句 潔



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

第九句 命



正立  
左羽植  
右羽平衡  
面轉向西

懈



正立  
雙羽植

衷



正立  
雙羽平交如一字

彼



正立  
雙羽植  
面轉向東

祈



正立頭微俯  
兩手相並  
雙羽植

翼



正立頭微俯  
雙羽平交

秩



各對面立  
雙羽植

年



正立  
雙羽植

翼



正立  
雙羽平交如一字

宗



俱轉身向東  
雙羽橫肩上

第十句 古 轉正雙  
 是 後跪左膝 羽植  
 式 先跪右膝 禮  
 羽仍植 首伏地 雙

【訳文】

第十句

古 \* 正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。  
 礼 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

是 続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。  
 式 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

【舞譜】

第十句

古



正立 雙羽植

禮



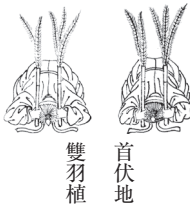
先跪右膝 雙羽植

是



後跪左膝 雙羽植

式



首伏地 雙羽植

第六章

第一句 古

是 羽 仍 植  
起 正 立 雙  
羽 植 雙  
身 起 雙

式 雙 羽 交 成 十 字 少 垂  
身 正 立 各 轉 面 相 對  
禮 先 起 左 足  
雙 羽 植

6

【詠文】

第六章

第一句

古 身体を起すが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。  
礼 続いて先ず左足を起すが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

是 それから右足を起こして\*正立するが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

式 身体を\*正立させたまま、左右の青衣童子は顔を回して相互に顔向き合わせるような姿勢になり、それぞれが両手の羽を交差させ、十文字の形になるようにして少し垂らす。

【舞譜】

第六章

第一句

古



後跪左膝  
雙羽植

禮



先跪右膝  
雙羽植

是



正立  
雙羽植

式



身正立  
各轉面相對  
雙羽交成十字少垂

4	44b	1	8	44a	7
<b>第四句</b>	<b>大</b>	<b>金</b>	<b>玉</b>	<b>第三句</b>	<b>吉</b>
維	立	正	羽	正	羽
植	雙	雙	植	植	植
右	右	左	左	右	右
羽	足	足	足	植	植
東	落	落	落	正	正
指	地	地	地	雙	雙
少	正	轉	轉	羽	羽
垂	仍	仍	仍	植	植
醇	羹	羹	羹	辰	茲
羽	平	左	右	手	手
植	橫	羽	足	並	並
	指	植	高	雙	雙
	西	右	舉	羽	羽
		羽	仰	植	植
			面	西	西
			向	東	東
			東	雙	雙
			雙	羽	羽
			羽	植	植
			植	西	西

【訳文】

第二句

値 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

茲 左側の青衣童子は身体を回して西向きになり、両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽はそれぞれ垂直に立てたままにする。

吉 \*正立に戻り、両手を相互に少し離し、両手の羽を垂直に立てる。

辰 左側の青衣童子は身体を回して東向きになり、両手を相互に少し狭めて揃え、その両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

第三句

玉 \*正立し、両手の羽はそれぞれ少し離して垂直に立てる。

磬 左足を高く挙げ、顔を上げて仰ぎ見るように西に向け、両手を東に向け、持っている羽をそれぞれ垂直に立てる。

金 左足を地面にストンと落として\*正立に戻り、両手の羽はそれぞれ垂

直に立てたままにする。

鐘 右足を高く挙げ、顔を上げて仰ぎ見るように東に向け、両手を西に向け、持っている羽をそれぞれ垂直に立てる。

第四句

大 右足を地面にストンと落として\*正立して、両手の羽はそれぞれ垂直に立てたままにする。

羹 それから左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽を横に倒し、地面と平行にして西を指し示すようにする。

維 身体を回して東向きになり、左手の羽を垂直に立てたまま、右手の羽は東を指し示すようにして少し垂らす。

醇 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。



【舞譜】

第二句



正立  
雙羽植

第三句



正立  
雙羽植

第四句



正立  
雙羽植

茲



俱轉身向西  
雙手並  
雙羽植

磬



左足高舉  
仰面向西  
雙手向東  
雙羽植

羹



正立  
左羽植  
右羽植  
左右平橫指東西

吉



正立  
雙羽植

金



正立  
雙羽植

維



俱轉身東向  
左羽植  
右羽植  
左右東指少垂

辰



正立  
雙羽植  
面轉向東

鐘



右足高舉  
仰面向東  
雙手向西  
雙羽植

醇



正立  
雙羽植

第五句元

各排對在左面向東左足少前左羽斜倚肩右羽垂在右對作勢

八

在左面向東左足少前右羽斜倚肩左羽平繞在右對作勢

第六句舞

身俱向東起右足作進前勢雙羽植

續

身俱向西起左足作進前勢雙羽植

第七句既

正立左羽植右羽平衡指西

上

左足進前一步兩手高舉雙羽平交如一字

侑

雙羽平交如一字

帝

左足不動雙手仍高舉平交頭微俯

【訳文】

第五句

元 左右の青衣童子はそれぞれ北向き右斜めに揃えて対面して立ち、左側の青衣童子は顔を東に向け、左足を少し前に出し、左手の羽は斜めに倒して左肩に寄りかからせ、右手の羽を横にして少し垂らす。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

衣 それから左側の青衣童子は東を向き、右側の青衣童子は西を向き、それぞれ両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽は垂直に立てる。

八 続いて左側の青衣童子は顔を東に向けて、左足を少し前に出し、右手の羽は斜め横に倒して右肩に寄りかからせ、左手の羽を横にして裾のあたりに垂らす。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

列 \* 正立に戻り、右手首をぐっと外側に向かって推し出し、左手首はぐっと内側に向かって収め入れ、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第六句

舞 青衣童子はそれぞれ身体を東向きにし、右足を上げて前にぐっと勢いよく出し、両手の羽は垂直に立てたままにする。

よく出し、両手の羽は垂直に立てたままにする。  
羽 \* 正立に戻り、両手の羽をそれぞれ下して斜めに交差させ、十文字の形になるようにする。

續 青衣童子はそれぞれ身体を西向きにし、左足を上げて前にぐっと勢いよく出し、両手の羽は垂直に立てたままにする。

紛 \* 正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。  
第七句

既 \* 正立したまま左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面と平行に倒して西を指し示すようにする。

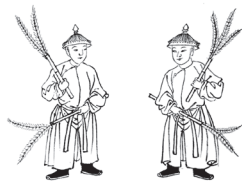
侑 それから両手の羽をそれぞれ地面と平行にして交差させ、横一文字の形になるようにする。

上 続いて左足を前に一步出し、両手を高く挙げ、両手の羽を地面と平行にして交差させ、一文字の形になるようにする。

帝 左足を動かさず、両手の羽も変わらず高く挙げて交差させ、一文字の形になるよう地面と平行にしたまま、頭を微かに俯き加減にする。

【舞譜】

第五句



各排對  
在右面向東  
左足少前  
左羽斜倚肩  
右羽垂  
在左右對作勢

第六句



身俱向東  
起右足作進前勢  
雙羽植

第七句



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

元



各對面  
在左右手相近  
雙羽並植  
在左右對作勢

羽



轉正  
雙羽斜交如十字

侑



正立  
雙羽平交如一字

衣



在右面向東  
左足少前  
右羽斜橫肩上  
左羽平繞  
在左右對作勢

八



身俱向西  
起右足作進前勢  
雙羽植

續



正立  
左足進前一步  
兩手高舉  
雙羽平交如一字

上



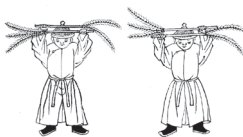
正立  
雙羽植  
右手收向內  
左手推向外

帝



正立  
雙羽植

紛



正立  
左足進前一步  
雙手高舉平交  
頭微俯

第八句 亦		第九句 尙		第十句 錫		康	
正立	雙	正立	雙	正立	雙	後跪	左膝
羽植	面轉	羽植	正	羽植	正	雙	雙
正	正	正	正	正	正	正	正
右	神	衷	我	年	我	我	我
面對	相並	左羽	先跪	首伏	雙羽	先跪	雙羽
在左	微俯	羽仍	右仍	地雙	植	仍植	仍植
東向	雙	居中	平衡	雙	雙	雙	雙
雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙
對	對	對	對	對	對	對	對
在	在	在	在	在	在	在	在
右	右	右	右	右	右	右	右
對	對	對	對	對	對	對	對
作	作	作	作	作	作	作	作
勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢
手	手	手	手	手	手	手	手

【訳文】

第八句

亦 \*正立し、両手の羽はそれぞれ垂直に立てる。

右 続いて左右の青衣童子は相互に対面するように立ち、左側の青衣童子は東を向いて両手の羽をそれぞれ垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

従 \*正立に戻り、両手の羽は変わらずそれぞれ垂直に立てたままにする。

神 左側の青衣童子はそれぞれ身体を回して西向きになり、両手を相互に少し狭めて揃え、微かに上げて胸のあたりに位置するようにし、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

第九句

尙 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

鑒 それから頭を微かに俯き加減にして、両手の羽は変わらずそれぞれ垂直に立てる。

我 続いて左側の青衣童子は、左手の羽を垂直に立てたまま左肩に近づけ、右手の羽は横に倒して地面と平行にし、西を指し示すようにする。  
衷 さらに左側の青衣童子は、そのまま左手の羽を身体の中央に位置するように動かし、右手の羽は変わらず地面と平行にして西を指し示したままにする。

第十句

錫 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

我 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

康 続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

年 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

【舞譜】

第八句



正立  
雙羽植

第九句



正立  
雙羽植

第十句



正立  
雙羽植

右



各對面立  
雙羽植

鑒



正立  
頭微俯  
雙羽植

我



先跪右膝  
雙羽植

從



正立  
雙羽植

我



正立  
左羽植近右左肩  
右羽植近右左肩  
左羽平衡指東西

康



後跪左膝  
雙羽植

神



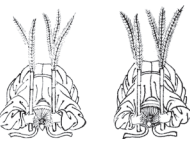
俱轉身東西向  
兩手相並微拱  
雙羽植

衷



正立  
左羽植居中  
右羽平衡

年



首伏地  
雙羽植



第七章

第一句 惟身起 雙羽植

可復起 右足正 立 雙羽植

第二句 曰

誠各轉身排對在左 東向 左羽植 近 右肩 右羽垂在右對作勢 頭微俯 左羽平 指西 右羽植

第三句 惟

可平視 左羽植 近 右肩 右羽垂

天先起 左足 雙羽植

感雙羽 仍植 頭微俯

惟轉正 雙羽植

恪正視 左羽 仍指西 右羽 仍植 少高 各轉身 東向 雙羽植

農向 雙羽植

稔轉正 雙羽植

【訳文】

第七章

第一句

惟 身体を起こすが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。  
天 続いて先ず左足を起こすが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

可 それから右足を起こして\*正立し、両手の羽は垂直に立てたままにする。  
感 両手の羽を垂直に立てたまま、頭を微かに俯き加減にする。

第二句

曰 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回し、南向き左斜めに揃えて対面して立ち、左側の青衣童子は東向きになり、左手の羽を垂直に立てて右肩に近づけ、右手の羽は垂らす。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

惟 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第三句

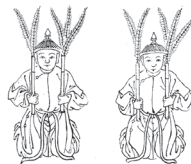
惟 それから頭を微かに俯き加減にして、左手の羽を横に倒して地面と平行にして西を指し示すようにし、右手の羽は垂直に立てたままにする。  
恪 続いて頭をもとに戻して北の正面を真っ直ぐ見て、左手の羽を変わず地面と平行に西を指し示したまま、右手の羽はやはり垂直に立てたまま、その位置を少し高くする。

惟 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

農 続いて左右の青衣童子は相互に対面するように立ち、左側の青衣童子はそれぞれ東向きになり、両手の羽をそれぞれ垂直に立てたままにする。  
可 それから左側の青衣童子はじつとまっすぐに視線を定め、左手の羽を垂直に立てたまま右肩に近づけ、右手の羽を垂らす。

稔 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

惟



雙羽植  
後跪左膝

第二句

曰



各轉身對面在左西東向  
左羽植近右肩  
右羽植近左肩  
左羽垂  
在左右對作勢

第三句

惟



正立  
雙羽植

天



先跪右膝  
雙羽植

惟



正立  
雙羽植

農



各對面立  
雙羽植

可



正立  
雙羽植

誠



正立  
頭微俯  
左羽平指西  
右羽植

可



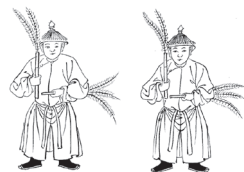
俱轉身西東向平視  
右羽植近右肩  
左羽植近左肩  
左右垂

感



正立  
頭微俯  
兩手相並  
雙羽植

恪



正視  
左羽指西  
右羽植少高

稔



正立  
雙羽植

第四句曰

各轉身對面在左東向  
雙羽並植在右對作勢  
惟 在左身而微偏右足少前右手伸向  
南左手隨之作斜進勢在右對作勢

力

對面在左東向雙羽  
並植在右對作勢

作

在左左羽植右羽  
垂在右對作勢

第五句恃

正立雙  
羽植

天

頭微俯雙  
羽並舉

慢

仍植  
雙羽

人

轉身東向左  
羽植右羽垂

第六句弗

身不動  
雙羽植

刈

右足進前右羽  
植左羽斜指南

弗

向東立  
雙羽植

獲

左足進前左羽植右  
羽柄倚左羽下垂

【訳文】

第四句

曰 続いて左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に対面するように立ち、左側の青衣童子は東向きになり、両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽は垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

惟 左側の青衣童子は身体と顔を微かに右側に偏り加減にして、右足を少し前に出し、右手を伸ばして南に向け、左手もこれに追隨させて動くのであるが、その際には身体が微かながら斜めになり、両手の羽をそれぞれ垂直に立てて勢よく動かす。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

力 それから左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に対面するように立ち、左側の青衣童子は東向きになり、両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽は垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

作 続いて左側の青衣童子は左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽を垂らす。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

第五句

恃 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

天 頭を微かに俯き加減にし、両手は相互に少し狭めて揃え、持っている両手の羽をそれぞれ高く挙げる。

慢 それから両手を下げるが、持っている両手の羽は変わらずそれぞれ垂直に立てたままにする。

人 続いて身体を回して東向きになり、左手の羽は垂直に立てたまま、右手の羽を垂らす。

第六句

弗 左右の青衣童子は相互に対面して立ったまま、身体は動かさず、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

刈 それから左側の青衣童子は右足を前に出し、右手の羽は垂直に立てたまま、左手の羽を斜めにして南を指し示すようにする。

弗 続いて左側の青衣童子は東に向けて立ったまま、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

獲 さらに左側の青衣童子は左足を前に出し、左手の羽を変わず垂直に立てたまま、右手の羽は柄の部分で左手の羽に寄りかからせて下に垂らす。

第四句

曰



各對面

在左右手相近



雙羽並植

在左右對作勢

第五句

恃



正立

雙羽植



第六句

弗



各對面立

雙羽植



惟



在右身面微偏

在右足少前

左右手伸向南



在左右對作勢

天



正面左足進前一步

雙手高拱頭微俯



雙羽植相並

刈



俱轉身西東向

右足進前

左右羽植



左右羽斜指南

力



各對面

在左右手相近



雙羽並植

在左右對作勢

慢



正立

頭微俯

兩手相並



雙羽植

弗



各對面立

雙羽植



作



各轉身對面

在左右羽植

左右羽垂



在左右對作勢

人



俱轉身西東向

左右羽植

左右羽垂



穫



俱轉身西東向

左足進前

左右羽植



左右羽柄倚右羽下垂



3	46b	1	8	46a	6
<b>第九句 咨</b>	<b>保</b>	<b>孔</b>	<b>第八句 服</b>	<b>農</b>	<b>第七句 尙</b>
身斜向東雙 羽植	身斜向東雙 羽斜倚肩	雙羽高舉 如十字	正立雙 羽植	面仍對在左左羽植右 羽平指東在右對作勢	正立雙 羽植
<b>介</b>	<b>爾</b>	<b>樂</b>	<b>田</b>	<b>勤</b>	<b>農</b>
東向左羽植右羽 柄倚左羽少垂	各轉身東 向雙羽植	轉面相對在左右羽倚肩左 羽垂面微仰在右對作勢	身微偏左雙 羽平指少垂	轉身對面在左右羽植左 羽平指東在右對作勢	對面雙 羽仍植

【訳文】

第七句

尚 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

勤 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に對面して立ち、左側の青衣童子は右手の羽は変わらず垂直に立てたまま、左手の羽を横に倒して地面と平行にして東を指し示すようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映して鏡に映したように同じ動きをする。

農 顔をそのまま對面させたまま、左側の青衣童子は左手の羽を変わらず垂直に立て、右手の羽は横に倒して地面と平行にして東を指し示すようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。故、左右の青衣童子は変わらず對面して立ったまま、両手の羽をやはり垂直に立てる。

第八句

服 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

田 それから左側の青衣童子は、身体を微かに左側に偏り加減にして、両手の羽はまっすぐ北の正面を指し示して少し垂らす。

孔 両手の羽をそれぞれ高く挙げて交差させ、十文字の形になるようにする。

樂 左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に對面して立ち、左側の青衣童子は右手の羽を右肩に寄りかからせ、左手の羽を垂らし、顔を微かに上げて仰ぎ見るようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

第九句

咨 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

爾 左側の青衣童子はそれぞれ身体を回して東向きになり、両手の羽を垂直に立てる。

保 それから左側の青衣童子は身体を斜めにして東向きになり、両手の羽とともに斜めにし、左手の羽は左肩に、右手の羽は右肩に、それぞれ寄りかからせる。

介 続いて左側の青衣童子は完全に東を向き、左手の羽を垂直に立て、右手の羽は柄の部分左手の羽に寄りかからせて少し垂らす。



【舞譜】

第七句



第八句



第九句



勤



田



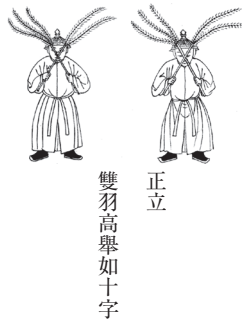
爾



農



孔



保



哉



樂



介



# 第十句 痔

轉正雙  
羽植

錢  
後跪左膝  
雙羽植

乃  
先跪右膝  
雙羽植

縛  
首伏地  
雙羽仍植

痔↓痔：『詩經』周頌・臣工に「命我衆人、痔乃錢縛、奄觀銓艾」とあり、  
『日下旧聞考』などでも「痔」とあることによる。

## 【訳文】

### 第十句

痔 正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

乃 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

錢 続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。

縛 それから首を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

## 【舞譜】

### 第十句

#### 痔(痔)



正立

雙羽植

#### 乃



先跪右膝

雙羽植

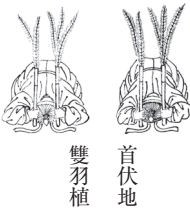
#### 錢



後跪左膝

雙羽植

#### 縛



首伏地

雙羽植

第八章

第一句 我

既 羽起立 雙

禮 先起左足 雙羽植 頭微俯 雙

【訳文】

第八章

第一句

我 身体を起こすが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。  
礼 続いて先ず左足を起こすが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにす

る。

既 それから右足を起こして、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。  
畢 さらに頭を微かに俯き加減にして、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

【舞譜】

第八章

第一句

我



後跪左膝 雙羽植

禮



先跪右膝 雙羽植

既



正立 雙羽植

畢



正立 頭微俯 雙羽植

第二句 我

正立左羽植右  
羽平衡指西  
誠 雙羽平交  
如一字

已 左羽植右羽  
平衡仍指西

將 雙羽植

第三句 風

左足少前左手伸向西右手隨之  
身微作進勢面轉向東雙羽植

馬 轉正雙羽植

電

右足少前右手伸向東左手隨之  
身微作進勢面轉向西雙羽植

車 轉正雙羽植

第四句 旋

對面立在左東向雙羽植  
在右對作勢

駕 仍對面在左左足進前雙羽仍  
植俱作推向外勢在右對作勢

九

轉正雙羽植

閻

雙羽高舉  
交如十字

【訳文】

第二句

我 \*正立したまま左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面と平行に倒して西を指し示すようにする。

誠 それから両手の羽をそれぞれ地面と平行にして交差させ、横一文字の形になるようにする。

已 続いて左手の羽を垂直に立て、右手の羽は地面と平行に倒して西を指し示すようにする。

將 そして両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第三句

風 左足を少し前に出し、左手を伸ばして西に向け、右手もこれに追隨させて動かすのであるが、その際に身体は微かながら勢いをつけて動かし、顔を回して東に向け、両手の羽はそれぞれ垂直に立てたままにする。

馬 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

電 右足を少し前に出し、右手を伸ばして東に向け、左手もこれに追隨させて動かすのであるが、その際に身体は微かながら勢いをつけて動かし、

顔を回して西に向け、両手の羽はそれぞれ垂直に立てたままにする。

車 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第四句

旋 それから左右の青衣童子はそれぞれ身体を回して相互に對面するようになり、左側の青衣童子は東向きになり、両手を相互に少し狭めて揃え、両手の羽は垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

駕 左右の青衣童子は変わらず相互に對面して立ち、左側の青衣童子は左足を前に出し、両手の羽を垂直に立てたまま同時に外側に向かつて勢いよくぐつと推し出す。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

九 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

閻 続いて両手の羽をそれぞれ高く挙げて交差させ、十文字の形になるようにする。

【舞譜】

第二句 我



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

第三句 風



左足少前  
左手伸向西右手隨之  
身微作進勢  
面轉向東  
雙羽植

第四句 旋



各對面立  
雙羽植

誠



正立  
雙羽平交如一字

馬



正立  
雙羽植

駕



各對面立  
在左右足進前  
雙羽植  
俱作推向外勢  
在左右對作勢

已



正立  
左羽植  
右羽平衡指西

電



右足少前  
右手伸向東左手隨之  
身微作進勢  
面轉向西  
雙羽植

九



正立  
雙羽植

將



正立  
雙羽植

車



正立  
雙羽植

閭



正立  
雙羽高舉如十字



4	I	8	7
47b		47a	
<b>第七句雨</b>	<b>第六句爲</b>	<b>第五句山</b>	
及	澤	出	
羽植	東右羽植交成如十字	右羽伸出右羽柄斜指東	
轉正雙	正立雙	轉面向東面微仰左羽倚肩	
私	公	雲	
相交雙羽植	偏向左雙羽植在右對作勢	肩斜交	
	轉正雙	雙羽橫	
	羽植	仍向西雙羽	
	右手高舉右羽平額指	橫肩斜交	
	西左羽植交成如十字		
	面對在左面轉向東兩手相並		
	斜纒肩上下羽平指西在右對作勢		
	左手高舉左羽平額指		
	正立雙		
	正立四人排對在左面向東左羽		

【訳文】  
第五句

山 身体と顔を西に向け、顔は微かに上げて仰ぎ見るようにし、左手を伸ばして前に出し、左手の羽は柄を斜めに倒して西を指し示すようにし、右手の羽を右肩に寄りかからせる。

川 変わらず西を向いたまま、両手の羽を横に倒して肩の上で斜めに交差させる。

出 顔を回して東に向けた上で顔を微かに上げて仰ぎ見るようにし、左手の羽は左肩に寄りかからせ、右手を伸ばして前に出し、右手の羽は柄を斜めに倒して東を指し示すようにする。

雲 変わらず東を向いたまま、両手の羽を横に倒して肩の上で斜めに交差させる。

第六句

為 \*正立し、左右の青衣童子は各一人の合わせて四人が斜めに肩を突き出すようにして対面して立ち、左側の青衣童子二人は顔を東に向け、左手の羽を斜めになるように横に倒して左肩の上に寄りかからせ、右手の羽は横に倒して地面と平行にして西を指し示すようにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

霖 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

沢 続いて左手を高く挙げ、左手の羽は額の位置で横に倒して地面と平行にして東を指し示すようにし、垂直に立てたままの右手の羽と交差させて十文字の形になるようにする。

滂 それから右手を高く挙げ、右手の羽は額の位置で横に倒して地面と平行にして西を指し示すようにし、垂直に立てたままの左手の羽と交差させて十文字の形になるようにする。

第七句

雨 \*正立し、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

公 左右の青衣童子はそれぞれ顔だけを向き合わせるようにするが、その際、左側の青衣童子は顔を回して東に向け、両手を相互に少し狭めて揃えて左側に偏るようにし、両手の羽は垂直に立てたままにする。右側の青衣童子はそれに対応して鏡に映したように同じ動きをする。

及 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

私 左側の青衣童子は身体を回して東向きになり、両足を相互に交差させ、両手の羽は垂直に立てたままにする。

【舞譜】

第五句

山



身面俱向西  
東面微仰  
左手伸出



左羽柄斜指西  
右羽倚肩  
左羽倚肩

第六句

爲



正立四人排對  
在右二人面向東  
左二人面向西



右羽斜橫肩  
左羽平指西  
右羽平指東  
在左右對作勢

第七句

雨



正立



雙羽植

川



身面俱向西



雙羽橫肩斜交

霖



正立



雙羽植

公



各對面在右面轉向西  
左面轉向東  
兩手相並偏向右



雙羽植  
在左右對作勢

出



俱轉面向西  
東面微仰  
右羽倚肩  
左手伸出



右羽柄斜指西  
左羽倚肩

澤



正立



右羽平額  
左羽平額  
右羽植  
左羽植

及



正立



雙羽植

雲



俱向西



雙羽橫肩斜交

滂



正立



右手高舉  
左羽平額指西  
右羽平額指東  
左羽植交成如十字  
右羽植交成如十字

私



俱轉身  
西東向



兩足相交  
雙羽植

48a	I	2	1	8	5	47b
<b>第十句</b>	<b>農</b>	一叩首	一叩首	一叩首	一叩首	<b>第八句</b>
之	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>興</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	東向 左羽植 右羽植 肩轉 身東向 左羽倚
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>利</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	肩轉 身東向 左羽倚
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>億</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	肩轉 身東向 左羽倚
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>斯</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	後跪 左膝
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>年</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	兩手相並 高
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>萬</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	先跪 右膝
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>年</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	兩手相並 高
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>夫</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	一叩首
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>慶</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	起立
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	<b>之</b>
	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植	雙羽植

斜式：北の正面に向かって身体を斜めにする式敬（恭敬の基本姿勢）。

叩首：跪いて頭を地面に打ち付ける跪拝叩頭の礼。三跪九叩頭の礼を至上とする。

【訳文】  
第八句

興 左側の青衣童子は変わらず東を向き、左手の羽を垂直に立てたまま、右手の羽を横にして右肩の上に乗せる。

鋤 それから左側の青衣童子は\*「斜式」の恭敬姿勢になり、右足を前に出し、右手の羽は横にして右肩の上に乗せたまま、左手の羽を横に倒して地面と平行に東を指し示すようにする。

利 続いて左側の青衣童子は身体を回して東向きになり、左手の羽は左肩に寄りかからせ、右手の羽を横に倒して地面と平行に東を指し示すようにする。

眈 左側の青衣童子は変わらず東向きになったまま、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第九句

億 \*正立に戻り、両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

万 そこから先ず右膝を跪かせるが、両手の羽は変わらず垂直に立てたままにする。

斯 続いて左膝を跪かせるが、両手の羽は同じく垂直に立てたままにする。年 それから両手を相互に少し狭めて揃え、高く挙げ、持っている両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

第十句

農 それから一回\*叩首して頭を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

夫 続いてもう一回\*叩首して頭を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

之 さらにもう一回\*叩首して頭を地面に伏せるが、両手の羽はやはり垂直に立てたままにする。

慶 (最後に起き上がり) 正立して両手の羽をそれぞれ垂直に立てる。

【舞譜】

第八句



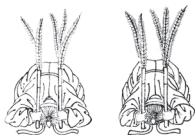
俱東西向  
右羽植  
左羽橫肩

億 第九句



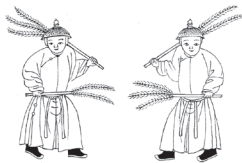
正立  
雙羽植

農 第十句



首伏地  
雙羽植

鋤



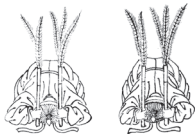
身斜式  
右左足進前  
右羽橫肩  
左羽橫肩  
右左羽平衡指西東

萬



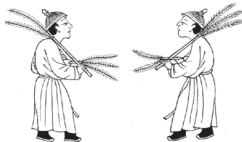
先跪右膝  
雙羽植

夫



首伏地  
雙羽植

利



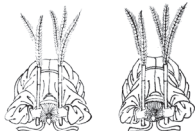
俱轉身  
西東向  
左羽倚肩  
右羽平指西東

斯



後跪左膝  
雙羽植

之



首伏地  
雙羽植

毗



各對面立  
雙羽植

年



身正  
兩手相並高  
舉雙羽植

慶



正立  
雙羽植



【訳文】

司樂官が青衣童子を引率して〔壇上から〕下らせる。



Figure 21. 大雩礼で青衣童子が持つ羽（『節次』四15b）



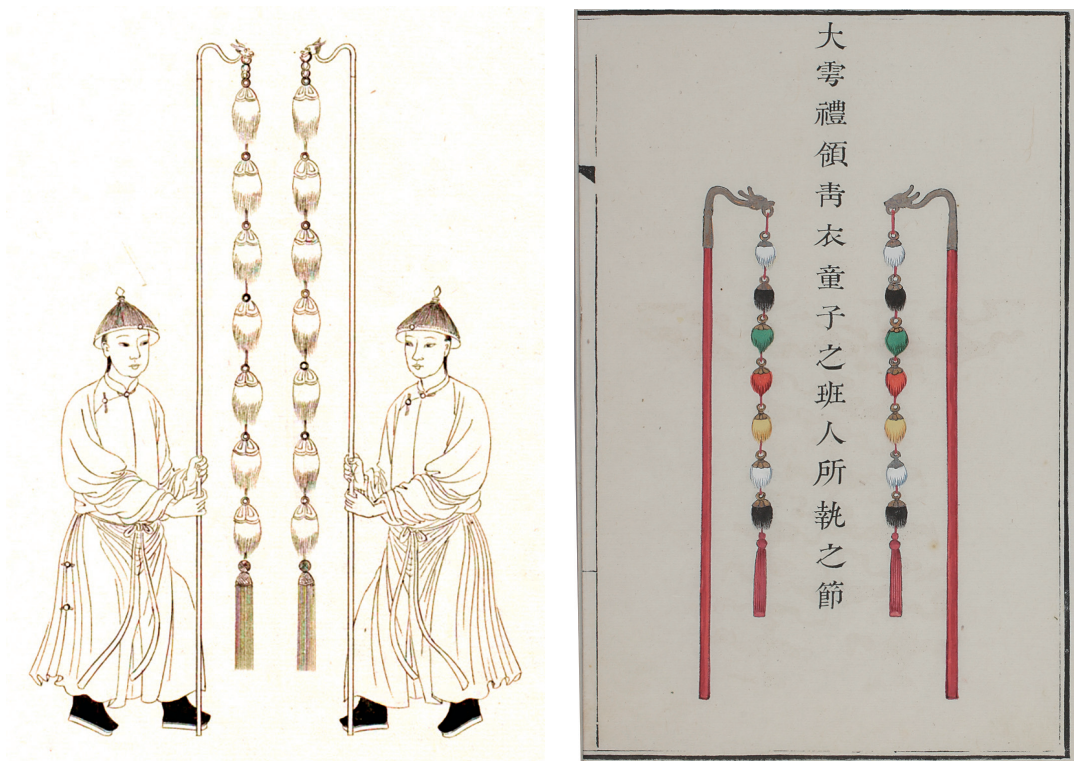


Figure 22. 大零礼で青衣童子を引率する者が持つ“節”（右：『節次』四15a）  
とその使用風景（左：『大清会典図』四七01a）

撤饌禮

撤饌禮

dorolobure hafan

樂奏靈平之章

樂奏靈平之章

doboho jakā be bederebure doroi acabuha tafin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

禮將成兮舞已終

願留福兮惠吾農

遂及私兮越我公

撤饌禮…お供え物をひきあげたもう儀礼。「饌」は、お供えした品。

dorolobure hafan

doboho jakā be bederebure seme hūlambi,

靈平之章…「まさに相応しく神々しき太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

doboho jakā be bederebure doroi acabuha tafin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

禮將成兮舞已終

願留福兮惠吾農

遂及私兮越我公

徹弗遲兮畏神恫

神之貺兮協氣融

五者來備兮錫用豊

【訳文】

\*撤饌礼

典儀官が

「饌をひきあげたまえ」と唱す。

楽奏「\*靈平之章」

唱樂官が

「撤饌礼の靈平之章を始めよ」と唱す。

祭祀の礼は今まさに成就致そうとしておりますああ

皇天上帝にお捧げ致す舞も既に完結致しております

余すところなく行き届かせることに躊躇があつてはなりませんああ

皇天上帝に御心を痛ませることなどがあつてはと畏れ憚るばかりでござ

います

乞い願わくはいつまでも変わらぬ福をああ

天恵を吾が人民に

皇天上帝が賜たまい下されます天恵こそはああ

天地の気が和らぎ一つに融とけ合致しますことなり

私祭が余すところなくゆきわたりますように成し遂げましたればああ

我が公わの祭祀にもまさるがごとき想いとらわれます

皇天上帝の天位たるものは地上にあらせられてもこれすなわち常備され

たりてああ

天恵としての賜り物は五穀豊穰をもってなされるなり

送神禮

送神禮

送神禮

樂奏霽平之章

樂奏霽平之章

仰九閭兮返御  
 左蒼龍兮右白虎  
 祥風瑞靄兮彌靈壇  
 上帝居歆兮風肅然  
 般裔裔兮紉縵縵  
 介祉釐兮康年

送神禮…神をお見送りたもう儀礼。

dorolobure hafan

enduri be fude seme hūlambi,

霽平之章…「雲厚く覆いし太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

enduri be fudere doroi hafuka taim mudan i kumun deribu seme hūlambi,

祥風瑞靄兮彌靈壇  
上帝居歆兮風肅然

左蒼龍兮右白虎  
般裔裔兮紉縵縵

仰九閭兮返御  
介祉釐兮康年

【訳文】

\*送神礼

典儀官が

「神をお見送りましたまえ」と唱す。

楽奏「\*靈平之章」

唱樂官が

「送神礼の靈平之章の樂を始めよ」と唱す。

祭祀明けのめでたき風が上帝の下されたためたき兆しの靄かすみを起ち籠らせて  
あああ

いよいよ増して深くなり覆い隠していきます皇天上帝がお越し  
になられている祭壇を

皇天上帝にはお供え物をお受けいただきしておりますああ

めでたき風は畏れ慎み静かに致しております

左の東側には天の四靈たる蒼あおき龍がああ

右の西側には天の四靈たる白き虎が

足を前に長く伸ばして座りうねうねと動き飛び舞いああ

めでたき天雲が集まっては長くたなびいております

天上で皇天上帝のおいになる紫微宮の九門を仰ぎ見ますればああ

皇天上帝の御車たる鸞輅わんらが戻つていかれます

皇天上帝が下された大いなる恵や多大なる幸いこそはああ

まさに五穀豊穰の年となることならん



望燎禮

6

8

樂奏霈平之章

望燎禮

49b

6

碧<sup>上</sup>琴<sup>凡</sup>琴<sup>合</sup>兮<sup>凡</sup>不<sup>乙</sup>可<sup>乙</sup>度<sup>工</sup>思<sup>凡</sup>  
 神<sup>工</sup>光<sup>凡</sup>四<sup>工</sup>燭<sup>上</sup>兮<sup>乙</sup>休<sup>乙</sup>氣<sup>上</sup>彫<sup>工</sup>頤<sup>凡</sup>  
 帝<sup>工</sup>求<sup>上</sup>民<sup>合</sup>莫<sup>乙</sup>兮<sup>乙</sup>日<sup>合</sup>鑒<sup>上</sup>在<sup>乙</sup>茲<sup>乙</sup>  
 錫<sup>合</sup>福<sup>合</sup>繁<sup>工</sup>祉<sup>凡</sup>兮<sup>合</sup>抑<sup>乙</sup>抑<sup>乙</sup>威<sup>合</sup>儀<sup>上</sup>  
 安<sup>合</sup>匪<sup>乙</sup>舒<sup>上</sup>兮<sup>合</sup>抑<sup>乙</sup>抑<sup>乙</sup>威<sup>合</sup>儀<sup>上</sup>  
 九<sup>合</sup>奏<sup>上</sup>終<sup>上</sup>兮<sup>乙</sup>燿<sup>上</sup>火<sup>合</sup>暫<sup>合</sup>而<sup>乙</sup>  
 望燎禮

望燎禮：燎（かがり火）所に詣でて燎を仰ぎ見たもう儀礼。

dorolobure hafan

dejire be tuwana seme hūlambi,

霈平之章：「恩沢の大雨が満ち溢れし太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

dejire be tuwanara doroi elebuhe tainm mudan i kumun deribu seme hūlambi,

碧<sup>上</sup>琴<sup>凡</sup>琴<sup>合</sup>兮<sup>凡</sup>不<sup>乙</sup>可<sup>乙</sup>度<sup>工</sup>思<sup>凡</sup>  
 神<sup>工</sup>光<sup>凡</sup>四<sup>工</sup>燭<sup>上</sup>兮<sup>乙</sup>休<sup>乙</sup>氣<sup>上</sup>彫<sup>工</sup>頤<sup>凡</sup>  
 帝<sup>工</sup>求<sup>上</sup>民<sup>合</sup>莫<sup>乙</sup>兮<sup>乙</sup>日<sup>合</sup>鑒<sup>上</sup>在<sup>乙</sup>茲<sup>乙</sup>  
 錫<sup>合</sup>福<sup>合</sup>繁<sup>工</sup>祉<sup>凡</sup>兮<sup>合</sup>抑<sup>乙</sup>抑<sup>乙</sup>威<sup>合</sup>儀<sup>上</sup>  
 安<sup>合</sup>匪<sup>乙</sup>舒<sup>上</sup>兮<sup>合</sup>抑<sup>乙</sup>抑<sup>乙</sup>威<sup>合</sup>儀<sup>上</sup>  
 九<sup>合</sup>奏<sup>上</sup>終<sup>上</sup>兮<sup>乙</sup>燿<sup>上</sup>火<sup>合</sup>暫<sup>合</sup>而<sup>乙</sup>  
 望燎禮

庶徵日時：前後の歌詞に鑑み、ここでは『書経』「洪範」にみえる「八、

庶徵。曰雨、曰暘、曰燠、曰寒、曰風、曰時」と同じ意の歌詞と解釈した。

【訳文】

\*望燎礼

典儀官が

「燎〔かがり火〕所に詣でて燎を仰ぎ見たまえ」と唱す。

楽奏「\*霈平之章」

唱楽官が

「望燎礼の霈平之章を始めよ」と唱す。

紺碧の空を風が遙か彼方から吹いてきておりまするゝああゝ

旅する思いを推しはかることなど到底できかねることでございまする

皇天上帝にお捧げする楽曲もこの楽曲で九曲が完結致しまするゝああゝ

祭祀に備えて焚いて高く挙げておりましたる火も白くなりますのみゝ

皇天上帝の天恵が天下四方を照らし尽くしゝああゝ

めでたき気が何と多いことかなゝ

どうして匪類が安穩としていられましょうかゝああゝ

ただただ慎み控えゝ厳かに威儀を正すのみゝ

皇天上帝は人民の徳が正しく和にかなうことを求めておいでになるゝああゝ

日ごと鑑みられるにゝここにありとゝ

天恵としての福を授けられゝ多くの幸いを下されてゝゝああゝ

降雨からゝ時の移り変わりに至るまでゝ全てはゝ天から賜るもろもろの象徴なりゝ

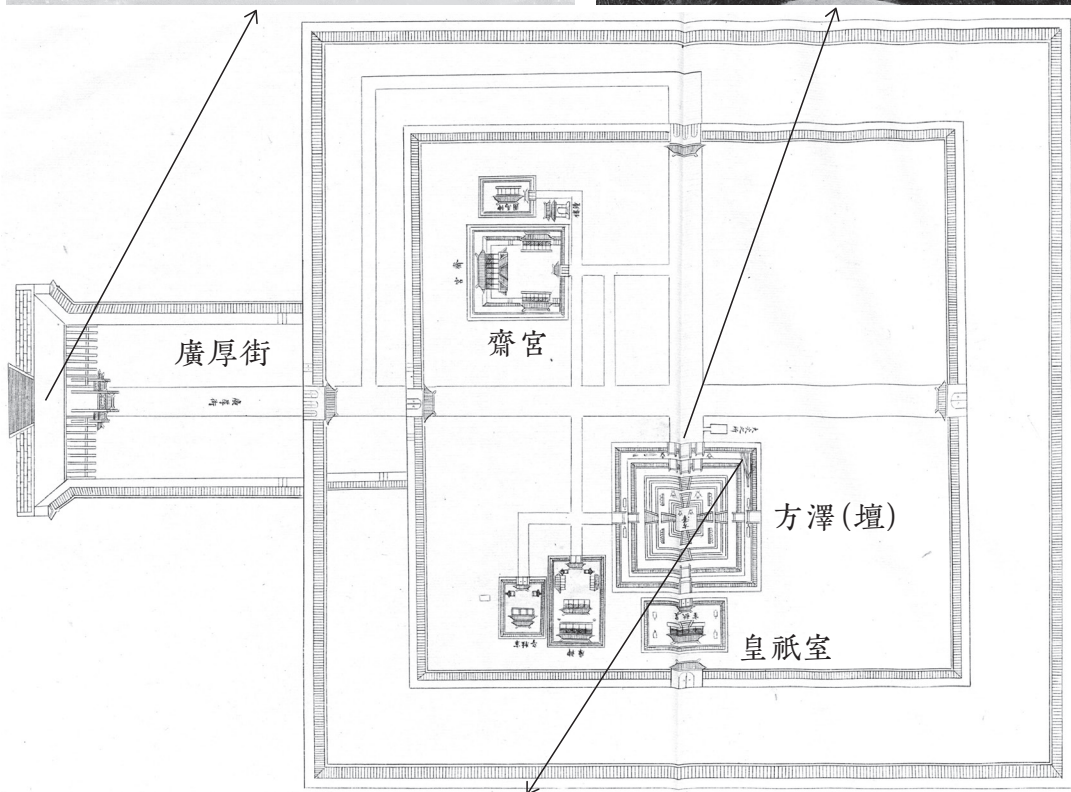


Figure 23. 方沢壇（地壇）平面図（『大清会典図』四〇一b 〇二aをもとに加工）



Figure 24. 方沢壇の各地点の様子（1940年頃撮影、左上：牌楼、右上：櫺星門、下：方沢壇）

五  
方  
沢  
壇



方澤壇

夏至日祭 致齋三日  
日出前七刻祭

樂章 林鐘宮

夾鐘 起調

簫譜 各章皆係頭一字末一字用凡字皆係伏  
笛譜 各章皆係頭一字末一字用凡字皆係伏  
迎神禮 二字除而不用

樂奏中平之章

Enduri be okdo seme hūlambi,  
dorolobure hakan

吉蠲兮玉宇開  
鳳馭紛兮後先  
肅展禮兮報功  
薰風兮自南來  
岳瀆藹兮徘徊  
沛靈澤兮九垓

1 夏至：二十四氣の一つで、1年のうち昼の長さが最も長くなる日。6月22〜23日頃。 致齋：祭祀を行うに先立ち内寝において心身を清浄に保つこと。雍正九（一七三二）年以降における清朝の皇帝は紫禁城内廷の齋宮で実施。 七刻：14.4分×7＝100.8分。 2 樂章：樂奏に合わせて歌詞を唄う樂歌。 林鐘：音律の名称。六律（黄鐘・大蕤・蕤賓・夷則・無射）六呂（大呂・夾鐘・仲呂・林鐘・南呂・応鐘）からなる十二律の一つ。

3 夾鐘：音律の一つで、中央「土」の音声。律は黄鐘に該当する。 4 譜：樂器を奏する際の曲節を記した樂譜。 6 迎神禮：神をお迎えたもう儀礼。

5 宮：宮（土）・商（金）・角（木）・徵（火）・羽（水）からなる五音（五声）の名称で十二律の一つで、六律六呂における基本となる音の黄鐘から四番目の律。

6 迎神禮：神をお迎えたもう儀礼。

dorolobure hakan

enduri be okdo seme hūlambi,

中平之章：「栄え真つただ中なる太平」という調子の樂。

kumun hūlāra hakan

enduri be okdoro doroi dulimba taifin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

\*吉蠲兮玉宇開

鳳馭紛兮後先

肅展禮兮報功

薰風兮自南來

岳瀆藹兮徘徊

沛靈澤兮九垓

吉蠲：『詩經』「小雅・天保」に「吉蠲爲饋、是以孝享」とある。

岳瀆：前後の歌詞に鑑み、ここでは「五岳（五嶽）四瀆」の略記と解釈した。五岳（五嶽）四瀆は、『礼記』「王制」に「天子祭天下大山大川、五嶽視三公、四瀆視諸侯」とある（Figure 25. 参照）。



【訳文】

方沢壇 \*夏至の日に祭を行う。\*致斎は三日間。

太陽が昇る時刻より\*七刻前から始める祭。

\*楽章\*林鐘 「楽章」は、「林鐘」の音律、「五音」の「\*宮(土)」の音声。

夾鐘 「夾鐘」の音律に合わせる。

簫\*譜 「方沢壇の祭祀において簫譜を」楽奏するそれぞれの章では、全て、

冒頭の一字と末尾の一字に「伋」字の音符を用い、全て「伋」と「伋」の二字の音符は除いて使用しない。この本楽章では全体に亘って、ただ「簫譜」だけを記載している。

笛\*譜 「方沢壇の祭祀において笛譜を」楽奏するそれぞれの章では、全て冒

頭の一字と末尾の一字に「億」字の音符を用い、全て「仕」と「伋」の二字の音符は除いて使用しない。

\*迎神礼

典儀官が

「神をお迎えたまえ」と唱す。

楽奏「\*中平之章」

唱楽官が

「迎神礼の中平之章を始めよ」と唱す。

吉日と有徳の立派な官人トを選び、斎戒沐浴して祭祀に臨めば、ああ、

天上で皇天上帝のおいでになる紫微宮の門が開かれますよ、

この上なき穏やかな風が、ああ、

南の彼方より吹いて来ておりますよ、

鳳凰が南風に乗って思いのままに飛び廻りますよ、ああ、

後になり先になり、

天下を鎮める五つの大山はすこぶる険しく四つの大河はすこぶる激しく、ああ、

一向に静まる気配がございません、

慎んで祭礼を行ない、ああ、

五つの大山と四つの大河の功に報いたく存じますよ、

大山の神神ならびに大河の神神は、ああ、

天の果てに、地の果てに、

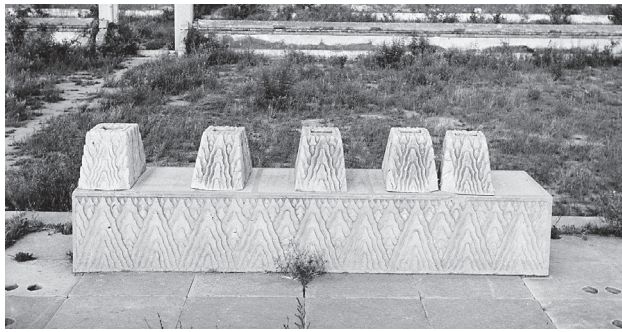


Figure 25. 方沢壇上の神座と神位

(上：五嶽ないし五鎮もしくは五陵山、下：四瀆ないし四海)

奠玉帛禮

50b  
7  
奠玉帛禮

1  
樂奏廣平之章

式時吉土兮中壇

辟公趨跽兮就列

7  
黃琮織縞兮既奠

奠玉帛禮…玉帛を供えまつる儀礼。  
dorolobure hafan

gu suje dobo seme hūlambi,

廣平之章…「普く広がりわたりける太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

gu suje dobororo doroi bireme tairin mudan i kumun derbu seme hūlambi,

式時吉土兮中壇  
式時吉土兮中壇

辟公趨跽兮就列  
辟公趨跽兮就列

\*黃琮織縞兮既奠  
\*黃琮織縞兮既奠

靈光下燭兮誠丹  
靈光下燭兮誠丹

中壇…『漢書』「郊祀志」に「帝臨中壇、四方承宇」とある。

郊兆…『漢書』「翼奉伝」に「漢家之郊兆、寢廟祭祀之禮、多不應古」とある。兆は祧のことで郊兆は都の郊外に建てた祧廟（遷主を祀る御霊屋）。

黃琮…祭祀に用いる黄色い瑞玉。『周礼』「春官・太宰伯」に「以黃琮、禮地」とある (Figure 26; Figure 27, 参照)。

【訳文】

\*奠玉帛礼

典儀官が

「玉帛を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*広平之章」

唱樂官が

「奠玉帛礼の広平之章を始めよ」と唱す。

あゝ  
古からの典に則つて相応しき良き時と相応しき良き土地を選び出しゝあ  
あゝ

祭祀を献ずる中央の壇に進みまするゝ

遠き関わりなれども郊外の地にある我が祧廟はゝああゝ

すこぶる安らかでございまするゝ

天下の諸侯はといえは我先に認められようと奔走しゝああゝ

出来るだけ高い位に就いて祭祀に加わろうと致しておりまするゝ

見事に鐘を打ち響かせゝ鼓を打ち鳴らしゝああゝ

干を持つての美しき舞をお見せ致しまするゝ

この上なき\*黄琮と手塩にかけて織りましたる白絹はゝああゝ

既に供え祀っておりまするゝ

皇天上帝による恩徳の光が地上に下りゝ恵みの光で照らしていただいでお  
りまするゝああゝ

まことにまことに赤赤とゝ

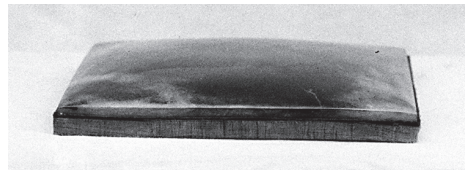
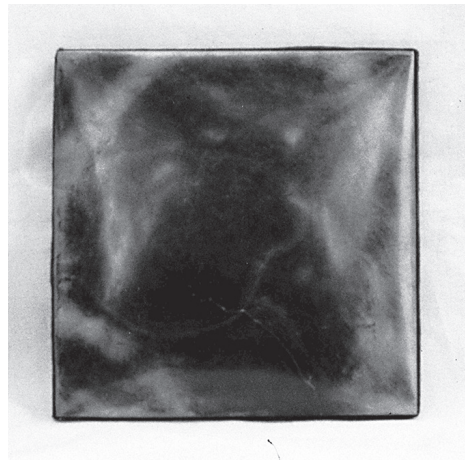


Figure 26. 天壇に保管されていた黄琮  
(上:上から、下:側面から)

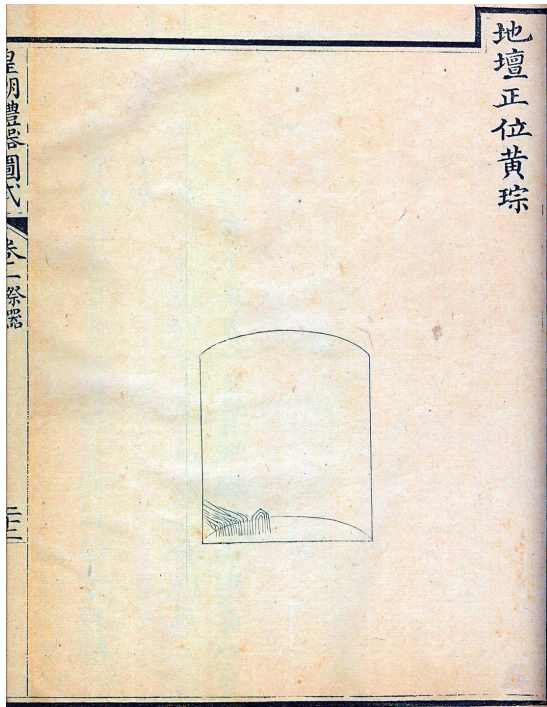


Figure 27. 地壇で使われる黄琮 (『皇朝礼器図式』二22a)



進俎禮

進俎禮

樂奏含平之章

禮行樂奏兮未央

牲牲告歆兮惟恪

厚載資生兮無外

嘉肴有踐兮大房

民力普存兮肅將

几筵來格兮洋洋

進俎禮…俎そ(まないた)に載せた肉を供えまつる儀礼。

dorolobure hafan

yali dobo seme hūlambi,

含平之章…「あまねく包容せる太平」という調子の樂。

kumun hūlara hafan

yali doboro doroi baktandara tainm mudan i kumun deribu seme hūlambi,

禮行樂奏兮未央

億伍億伍億伍  
嘉肴有踐兮大房

牲牲告歆兮惟恪

億伍億伍億伍  
民力普存兮肅將

厚載資生兮無外

億伍億伍億伍  
几筵來格兮洋洋

大房…祭祀で供える肉を盛るために用いる玉で飾った俎。

牲牲…祭祀で供える傷などの欠点が一つもない牛のことを牲というが、広

く祭祀で供える六牲(牛・馬・羊・豕・犬・鶏)のことも牲という。前後の

歌詞に鑑み、ここでは牛のことと解釈した。牲は純色で体に傷などの欠点

が一つもないこと。

厚載資生兮無外…厚載は厚くて能く物を載せている意で大地のこと。『易経』

「坤」に「象曰、至哉乾元、萬物資生、乃順承天、坤厚載物、徳合无疆、

含弘光大、品物咸亨」とあることの略記と解釈した。

几筵…几は祭祀で牲を載せて神に供える器具で俎そと同じ。筵えんは祭祀で用い

る敷物。

【訳文】

\*進組礼

典儀官が

「[俎に載せた]肉を供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*含平之章」

唱樂官が

「進組礼の含平之章を始めよ」と唱す。

祭祀の礼は奏楽を用いまするがゝああゝ

未だ程よい頃合いでございませぬゝ

美味しき肴さかなのりのつとを典のりに則のつとつて整えてありまするゝああゝ

\*大房たいぼうにゝ

純色で体に傷などの欠点が何一つない完璧な牛の肉をお歎うけいただきたく

ここに請い願ひ奉りまするゝああゝ

ただただ敬い慎んでおりまするゝ

人民の労力は普く充分に行き届いておりましてゝああゝ

皇天上帝に謹んでお捧ささげするばかりでありまするゝ

大地は天の気を受けて全てを載せゝ万物が生まれ育ちまするゝああゝ

外外というものがあり得ないほど極めて広大なものでございませぬゝ

凡きとえん筵えんのところところに皇天上帝はお越こしこになつていらつしやいまするゝああゝ

あまりの御美しさに胸がいつぱいで言葉になりませぬゝ



I

初獻禮

dorolobure hafan

sucungga dorolome dobo seme hūlambi,

樂奏太平之章

kumun hūlara hafan

sucungga dorolome doboro doroi ten i tairin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

醴齊融洽兮信芳

清風穆穆兮休氣翔

洽百禮兮禋祀

博碩升庖兮鼎方

神明和樂兮舉初觴

馨九土兮豐穰

52a

8

52b  
I

初獻禮：初獻の儀礼。「初獻」は、祭祀儀礼で初めて酒を献ずること、一番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

sucungga dorolome dobo seme hūlambi,

太平之章：「大いなる至極の太平」という調子の楽。

kumun hūlara hafan

sucungga dorolome doboro doroi ten i tairin mudan i kumun deribu seme hūlambi,

\*醴齊融洽兮信芳

博碩升庖兮鼎方

清風穆穆兮休氣翔

神明和樂兮舉初觴

洽百禮兮禋祀

馨九土兮豐穰

醴齊：祭祀に用いる五齊（五種類の混和酒）の一つ。『周礼』「天官・酒正」に「辨五齊之名、一曰泛齊、二曰醴齊、三曰盎齊、四曰緹齊、五曰沈齊」とある。

【訳文】

\*初献礼

典儀官が

「初献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*大平之章」

唱楽官が

「初献礼の大平之章を始めよ」と唱す。

\*醴れいせい齊せいは融とけ合あって湯ゆ気きが上あがりこの上うなく仕し上じやうがあつておおりまますするるゝああああ

ままここととに素す晴せいららしい香かりりが溢あれれておおりまますするるゝ

大だいききなな升ますととももに肴さかなととして用よう意い致ちししまましたたるる料りやう理りがあああ

鼎かなえに盛もつつて並ならべべてあありまますするるゝ

清せいららかかなるる風かぜがあわわららかかくく静せいかかに吹ふいいておおりりゝああああ

めめででたたきき気きがあ厳おごそかかに漂たいい溢あれれておおりりまますするるゝ

知ちの明めい明めいたたるる皇こう天てん上じやう帝ていにあ祭さい祀いの楽がく奏そうがあ始はままりりまましたたららばあああ

慎しんんんででおお捧たげげ致ちししまますするるゝ最さい初しよのさかすか觴さうをあ

数かず多たくくのの礼れいをあままねねくく合あししてあああ

皇こう天てん上じやう帝ていをあおお祀いりり申ましし上じやうげげまますするるゝ

悉しつくく地ち上じやうのの全ぜん土どはあああ

豊ほう稔れんであごござざいいまますするるゝ

武生舞譜

第一句 醴正拱手齊正沉脾融對擺脾冷再擺脾

兮正躬身信外看尖芳背一揖

第二句 博外擺手碩正揚舞升裏擺手庖對揚舞

兮正垂舞鼎背一揖方背平身

第三句 清對拱手風正開斧穆背揚舞穆背擺脾

兮朝上裏看尖休正揚舞氣對一揖翔對躬身

第四句 神正拱手明外擺手和正垂舞樂對躬身

兮對揚舞舉正開脾初正躬身觴正拱手

第五句 洽一對面百對擺脾禮微向裏兮正垂舞

禪裏一揖祀外一揖

第六句 罄對揚舞九微向外土背揚舞兮微向外

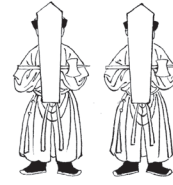
豐一長跪穰一叩首

武生舞譜：「初献礼」の「大平之章」に合わせて舞う。

【舞譜】

武生舞譜

第一句



正拱手

齊



正沉舞

融



對擺牌

治



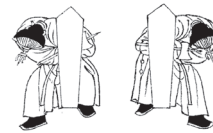
再擺牌

兮



正躬身

信



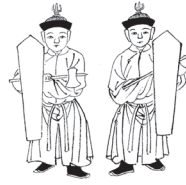
外看尖

芳



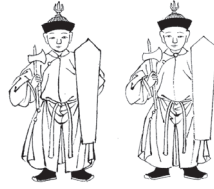
背一揖

第二句



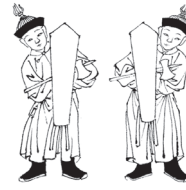
外擺手

碩



正揚舞

升



裏擺手

庖



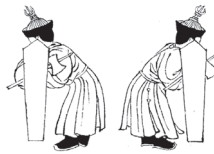
對揚舞

兮



正垂舞

鼎



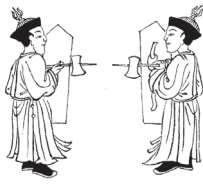
背一揖

方



背平身

第三句



對拱手

風



正開斧

穆



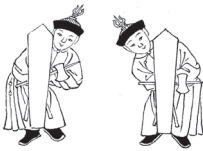
背揚舞

穆



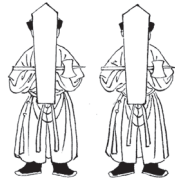
背擺牌

兮



朝上裏看尖

神 第四句



正拱手

明



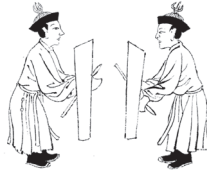
外擺手

和



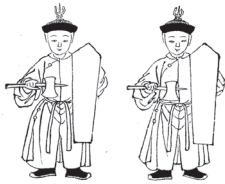
正垂舞

樂



對躬身

舉



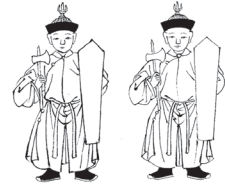
正開牌

兮



對揚舞

休



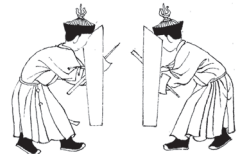
正揚舞

初



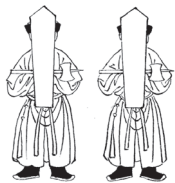
正躬身

氣



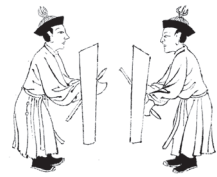
對一揖

觴



正拱手

翔



對躬身





對揚舞

第六句  
磬



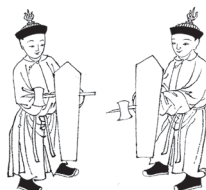
一對面

第五句  
洽



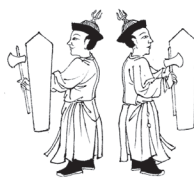
微向外

九



對擺牌

百



背揚舞

土



微向裏

禮



微向外

兮



正垂舞

兮



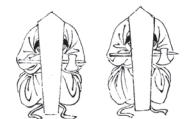
一長跪

豐



裏一揖

禋



一叩首

穰



外一揖

祀

7 亞獻禮

53a 8 7

1 樂奏安平之章

樂奏安平之章

樂奏安平之章

一茅三脊兮縮漿

介黍稷兮芳旨

樂成八變兮綴兆

7

亞獻禮：亜献の儀礼。「亜献」は、祭祀儀礼で二番目に酒を献すること、二番目の爵を奠る儀礼の行為。  
dorolobure hakan

sirame dorolome dobo seme hūlambi,

安平之章：「心安んじて和らぎたる太平」という調子の楽。

kumun hūlara hakan

sirame dorolome doboro doroi necin tain mudan i kumun deribu seme hūlambi,

\* 一茅三脊兮縮漿

介黍稷兮芳旨

樂成八變兮綴兆

山疊雲霧兮馨香

再滌犧尊兮敬將

儼皇祇兮悅康

一茅三脊：『管子』「封禪」や『漢書』「郊祀志」に「江淮之間、一茅三脊、所以爲籍也」とある。三脊は三脊茅たまはと同じで三つの角がある茅。  
漿：粟米を醸して造る酒。『周礼』「天官・酒正」に「辨四飲之物、三曰漿」とある。

山疊：夏后氏の酒樽で山と雷雲の凶柄が刻まれている。『礼記』「明堂位」に「山疊、夏后氏之尊也」とあり、その「疏」に「山疊、夏后氏之尊也者、疊爲雲雷也、畫爲山雲之形也」とある。

犧尊：諸説あるなか、ここでは前後の歌詞に鑑み、祭祀に用いる牛の形をした酒樽と解釈した。

綴兆：舞の位置。『礼記』「樂記」に「行其綴兆、要其節奏、行列得正焉、進退得齊焉」とある。

【訳文】

\* 巫献礼

典儀官が

「巫献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*安平之章」

唱楽官が

「巫献礼の安平之章を始めよ」と唱す。

\* 三脊茅は用意できておりまするゝああゝ

酒を漉して\*漿に致しまするゝ

酒を入れた\*山疊には雷雲が山に覆いかぶさるように広がる図柄が刻まれておりゝああゝ

芳しき好い香りが遠くまで広がりゝ上帝による徳の御力が地上の隅々まで行き渡っていることを象徴しておりまするゝ

これに黍と稷を合わせ加えますとゝああゝ

香りは芳しさを増しさらに美味になりまするゝ

今一度洗い清めまするゝ\*犧尊をゝああゝ

皇天上帝を敬い尊び謹んでお捧げするため

祭祀の楽奏が八たび変転致しましてゝああゝ

綴兆もそれに応じて整いおりまするゝ

皇天上帝はこの上なく厳かで大きく安らかにゝああゝ

お悦びになりゝ楽しみ和んでおられまするゝ



Figure 29. 地壇で使われる尊（『皇朝礼器図式』一30a）



Figure 28. 天壇に保管されていた尊



文生舞譜

第一句一肩羽籥茅籥蹲身三正横籥脊對擺羽

兮微向裏縮對一揖漿正一揖

第二句山一對面疊對籥舞雲一朝上羃正垂籥

兮背一召馨正別足香分羽籥

第三句介外擺手黍一對面稷正別足兮斜擊籥

芳正一揖旨高擊籥

第四句再對擺羽滌朝上平搭羽犧對籥舞尊對羽舞

兮對一揖敬朝上羽托籥將籥托羽

第五句樂外斜籥成籥支羽八背一召變朝上交羽籥

兮微向裏綴對面籥蹲身兆朝上低豎籥

第六句儼平斜籥皇正拱手祇背一揖兮一朝上

悅一長跪康一叩首

文生舞譜：「垂獻札」の「安平之章」に合わせて舞う。

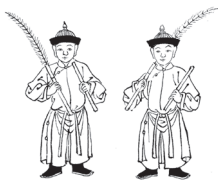
籥蹲身：原文に「籥蹲身」と記載されている「舞譜」の型が「節次」五「文生舞譜」にはみえない。この「籥蹲身」と記されている「舞譜」の型の一つ前の「舞譜」の型は「正横羽」で、「籥蹲身」の一つ後の型は「對籥舞」である。このことに鑑み、「文生舞譜」において「籥存身」と記載されている「舞譜」の型が「蹲（うづくまる）」の意と合致し、「舞譜」の型としての流れにも適合していることから、他にも見える「籥蹲身」の場合と同じく「籥存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。撃…ささげる。

對面籥蹲身：原文に「對面籥蹲身」と記載されている「舞譜」の型が「節次」五「文生舞譜」にはみえない。この「對面籥蹲身」における「籥蹲身」を他にも見える「籥蹲身」の場合と同じく「籥存身」と想定すると、この「對面籥蹲身」と記されている「舞譜」の型の一つ前の「舞譜」の型は「微向裏」で、「對面籥蹲身」の一つ後の「舞譜」の型が「朝上低豎籥」で、「舞譜」の型としての流れにも適合していることから、ここでは「對面籥存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。

【舞譜】

\*文生舞譜

一 第一句



肩羽籥

山 第二句



一對面

介 第三句



外擺手

茅



\*籥蹲身

疊



對籥舞

黍



一對面

三



正橫籥

雲



一朝上

稷



正別足

脊



對擺羽

罍



正垂籥

兮



斜擊籥

兮



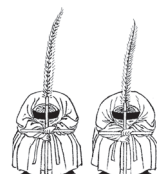
微向裏

兮



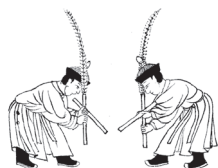
背一召

芳



正一掛

縮



對一掛

馨



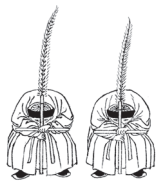
正別足

旨



高擊籥

漿



正一掛

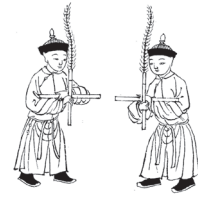
香



分羽籥



再 第四句



對擺羽

樂 第五句



外斜籥

儼 第六句



平斜籥

滌



朝上平搭羽

成



籥支羽

皇



正拱手

犧



對籥舞

八



背一召

祇



背一揖

尊



對羽舞

變



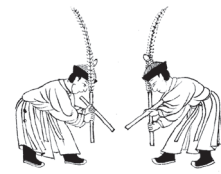
朝上交羽籥

兮



一朝上

兮



對一揖

兮



微向裏

悅



一長跪

敬



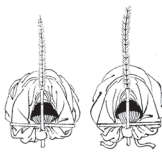
朝上羽托籥

綴



\*對面籥蹲身

康



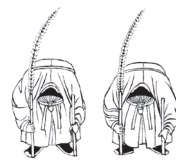
一叩首

將



籥托羽

兆



朝上低豎籥



Figure 30. 方沢壇・地祇壇で着る文舞生の衣服（左）・武舞生の衣服（右）（『節次』四03b・03a）

終獻禮

終獻禮

終獻禮

樂奏時平之章

樂奏時平之章

樂奏時平之章

紫壇兮嘉氣盈

凜茲陟降兮心屏營

含宏光大兮德厚

旨酒思柔兮和且平

禮成三獻兮薦玉觥

靈佑丕基兮永清

終獻禮…終獻の儀礼。「終獻」は、「獻」の儀礼として三番目にお開きの酒を献ずること、三番目の爵を奠る儀礼の行為。

dorolobure hafan

wajima dorolome dobo seme hūlambī,

時平之章…「好き時運を得たる太平」という調子の樂。

kunun hūlara hafan

wajima dorolome doboro doroi erin taihn mudan i kunun deribu seme hūlambī,

紫壇兮嘉氣盈

凜茲陟降兮心屏營

含宏光大兮德厚

旨酒思柔兮和且平

禮成三獻兮薦玉觥

靈佑丕基兮永清

【訳文】

\*終献礼

典儀官が

「終献の儀礼を行ない供えまつれ」と唱す。

楽奏「\*時平之章」

唱楽官が

「終献礼の時平之章を始めよ」と唱す。

紫色の祭壇にはああ

めでたき気が満ち満ちております

この上なき美酒は慈しみの心を思い起こさせああ

心andraぎます上に心穏やかになります

恐れ慎みて今ここに祭壇に昇り降り致しながらああ

これによるしかつたのかと未だ心定まらずにおります

爵を奠る儀礼もここに三度献じることを成し遂げることになりましたあ

あ

皇天上帝に献じまする玉で作りましたる觥を

皇天上帝の広なる美德は光明盛大なりてああ

恩恵の何と厚きことか

皇天上帝の御助けは天下におけます甚だ大きな礎なりてああ

永久に安寧に治まつて行きます



文生舞譜

第一句紫一對面壇朝上 豎羽籥 兮背籥舞嘉正橫羽

氣分羽籥盈正橫籥

第二句旨正籥舞酒正羽舞思正橫籥柔對擺羽

兮微向裏和對一揖且朝上 高塔羽 平豎舒籥

第三句凜背籥舞茲正羽舞陟懷羽籥降正躬身

兮分羽籥心正橫籥屏正一揖營外看尖

第四句禮裏拱手成外擺羽三外豎籥獻正拱手

兮豎羽籥薦對籥舞玉背羽舞觥正擊籥

第五句含背斜籥宏裏雙舞光對籥舞大朝上 羽蹲身

兮背羽舞德朝上 裏看尖 厚對雙舞

第六句靈高搭羽佑落羽籥丕對肩羽基對雙舞

兮正拱手承一長跪清一叩首

文生舞譜：「終獻禮」の「時平之章」に合わせて舞う。

擊：ささげる。

朝上羽蹲身：原文に「朝上羽蹲身」と記載されている「舞譜」の型が「節次」五「文生舞譜」にはみえない。この「朝上羽蹲身」の「羽蹲身」における「蹲」についても、他に見える「籥蹲身」における「蹲」を「存」と想定した場合と同様であると「羽蹲身」を「羽存身」と想定すると、この「朝上羽蹲身」と記されている「舞譜」の型の一つ前の「舞譜」の型は「対籥舞」で、「朝上羽蹲身」の一つ後の「舞譜」の型が「背羽舞」であり、「舞譜」の型としての流れにも適合していることから、ここでは「朝上羽存身」の型を示した。詳細は「研究篇」に委ねたい。



【舞譜】

文生舞譜

第一句

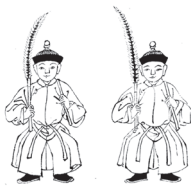
紫



一對面

第二句

旨



正籥舞

壇



朝上豎羽籥

酒



正羽舞

兮



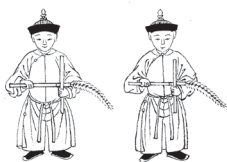
背籥舞

思



正橫籥

嘉



正橫羽

柔



對擺羽

氣



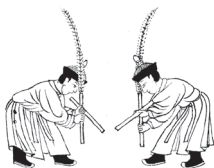
分羽籥

兮



微向裏

和



對一揖

盈



正橫籥

且



朝上高搭羽

平



豎舒籥



裏拱手

禮 第四句



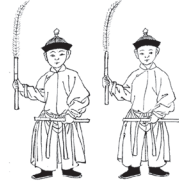
背籥舞

凜 第三句



外擺羽

成



正羽舞

茲



外豎籥

三



懷羽籥

陟



正拱手

獻



正躬身

降



豎羽籥

兮



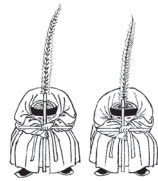
正橫籥

心



分羽籥

兮



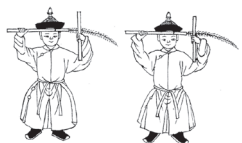
正一揖

屏



外看尖

營



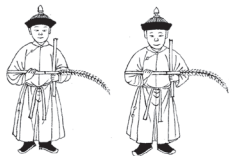
高搭羽

靈 第六句



背斜簫

含 第五句



落羽簫

佑



裏雙舞

宏



對肩羽

丕



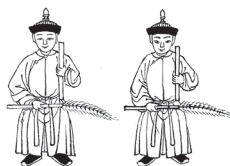
對簫舞

光



對雙舞

基



\*朝上羽蹲身

大



正拱手

兮



背羽舞

兮



對簫舞

薦



一長跪

永



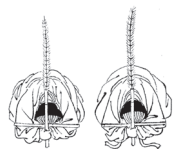
朝上裏看尖

德



背羽舞

玉



一叩首

清



對雙舞

厚



正擎\*簫

觥

撤饌禮

撤饌禮

撤饌禮

樂奏貞平之章

撤饌禮

撤饌禮…お供え物をひきあげたもう儀礼。「饌」は、お供えした品。

dorolobure hakan

doboho jaka be bederebu seme hūlambi,

貞平之章…「誠に正しき太平」という調子の樂。

kumun hūlara hakan

doboho jaka be bederebu doroi unenggi tain mudan i kumun deribu seme hūlambi,

\* 玉俎列兮庶品該

\* 黃琮告徹兮雲翔徊

晏陰定兮曦景回

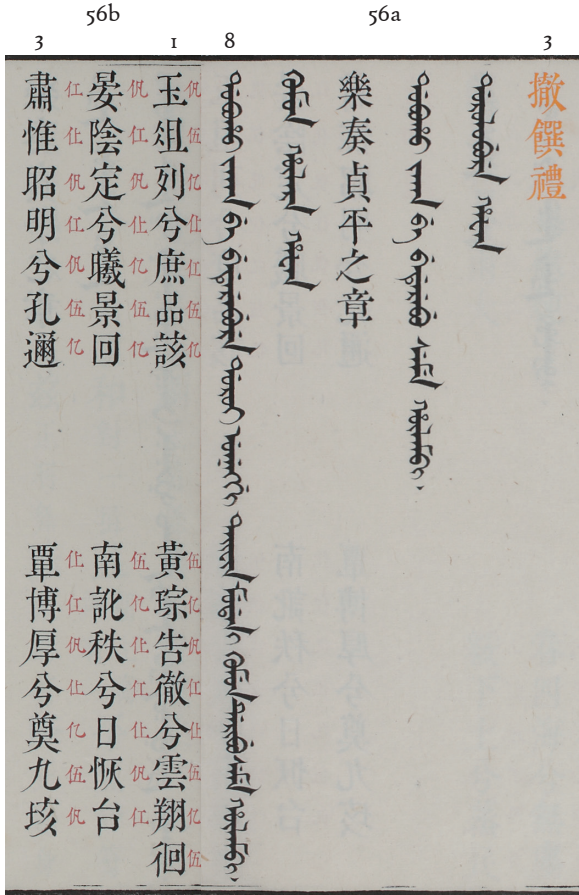
南訛秩兮日恢台

肅惟昭明兮孔邇

覃博厚兮奠九垓

玉俎：祭祀でお供えする肉を盛る玉製の俎（まないた）。

黃琮：祭祀に用いる黄色い瑞玉。『周礼』「春官・太宗伯」に「以黃琮、禮地」とある。169頁、Figure 26; Figure 27. を参照のこと。



【訳文】

\*撤饌礼

典儀官が

「饌をひきあげたまえ」と唱す。

楽奏「\*貞平之章」

唱楽官が

「撤饌礼の貞平之章を始めよ」と唱す。

\*玉俎たまひが列つらなっておりまするゝああゝ

さまざまな品ひん品ひんが載のせてありまするゝ

この上なき\*黄琮きわうに告詞こくごが重なり連なりゝああゝ

雲くもの如ごときに天地の間をまわりめぐりまするゝ

晴はれと曇くもりは定さだめでありましてゝああゝ

日の光と影かげはめぐりめぐっておりまするゝ

夏季なつに五穀ごこくが大きく生長せいじやう致しまするものは耕この秩序じつじでございまするゝああゝ

日の徳とくとはまことに広く大きなものでございまするゝ

物事ものごとの甚いただ明あらかなることを慎しんんで思おもいまするにゝああゝ

皇天こうてん上帝じていの恵めぐみはごくごく近くに溢あふれてございまするゝ

ほどこし行きいりますことは甚いただ広くこの上なく手厚てあつくゝああゝ

お奠まつり致しまするゝ天あまのはてゝ地ちのはてまでもゝ



送神禮

ᠳᠣᠷᠣᠯᠣᠪᠦᠷᠬᠠᠨ

ᠡᠨᠳᠦᠷᠢᠪᠡᠳᠡᠷᠦᠳᠣᠷᠢᠲᠣᠮᠣᠬᠣᠩᠭᠣᠲᠠᠢᠮᠤᠳᠠᠨᠢᠬᠤᠮᠤᠨᠠᠨᠢᠰᠡᠮᠡᠬᠤᠯᠠᠮᠪᠢ

樂奏寧平之章

ᠬᠤᠮᠤᠨᠬᠤᠯᠠᠷᠠᠬᠠᠶᠠᠨ

4

56b

8

送神禮…神をお見送りたもう儀礼。  
 dorolobure hafan  
 enduri be fude seme hūlambī,  
 寧平之章…「安寧の定まれしたる太平」という調子の樂。  
 kumun hūlara hafan  
 enduri be fudere doroi tomohonggo taiᠮᠤᠨᠢᠬᠤᠮᠤᠨᠠᠨᠢᠰᠡᠮᠡᠬᠤᠯᠠᠮᠪᠢ,

ᠠᠯᠠᠭᠤᠨᠠᠨᠢᠰᠡᠮᠡᠬᠤᠯᠠᠮᠪᠢ  
 配皇穹兮兩大  
 陰儀粹兮德純  
 靈旗兮雲路遵  
 飛龍婉兮高旻  
 眷四海兮無塵  
 綏下土兮蒸民

\* 靈旗兮雲路遵 飛龍婉兮高旻  
 \* 陰儀粹兮德純 眷四海兮無塵  
 配皇穹兮兩大 綏下土兮蒸民

靈旗…諸説あるなか、ここでは後に続く歌詞に鑑み、昇龍を描いた旗と解釈した。  
 陰儀…皇后のことであるが、前後の歌詞に鑑み、ここでは「皇上帝」との関係を考えて「后土皇地祇」と解釈した。

4

57a

1

【訳文】

\*送神礼

典儀官が

「神をお見送りましたまへ」と唱す。

楽奏「寧平之章」

唱楽官が

「送神礼の寧平之章を始めよ」と唱す。

昇龍を描いた皇天上帝の御旗はくああく

雲のたなびいている路みちに沿って飛翔しておりますく

皇天上帝はく飛龍の雲に乗るが如くく天に昇り帰られますくしなやかに美しくくああく

高く高く天空高くく

地神たる后土皇地祇はまことに清く美しくくああく

その徳は真心に溢れて飾り気がありませんく

天下を慈しむことくああく

少しの曇りもございませぬく

皇天上帝と后土皇地祇はくああく

二つながらにして大きな天と地なりてく

その大地を鎮め安んずるものはくああく

数多くの人民あるのみならんく

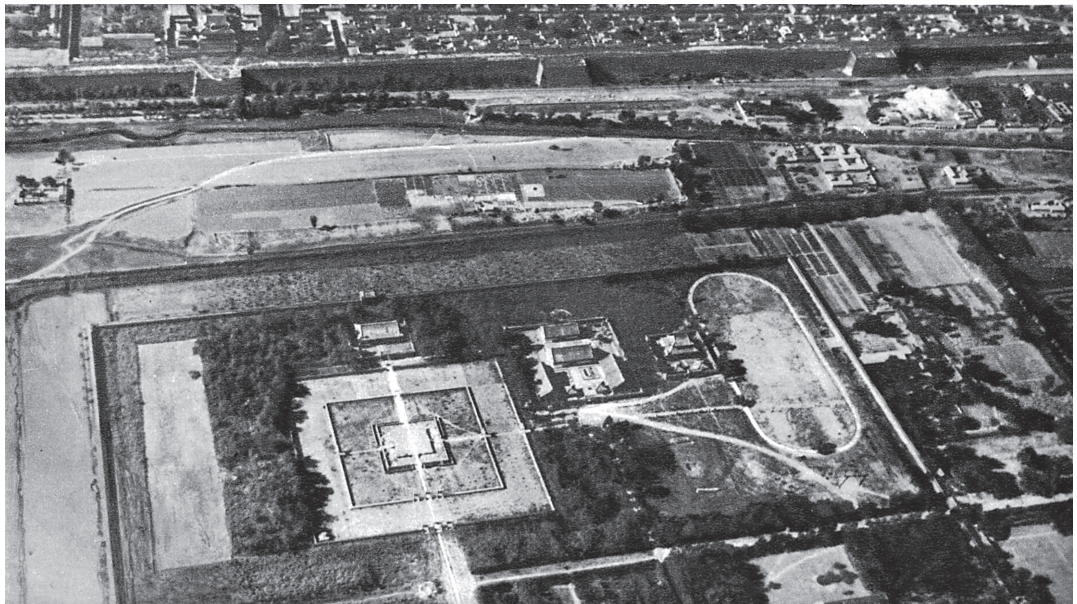


Figure 31. 北から見おろした方沢壇（1933年撮影）

図版出典 | 一覧 / List of Figures and Its Sources

- Figure 1. "Peking (Eastern China 1:50,000)", 3rd ed., Great Britain War Office General Staff Geographical Section(cartographer), Washington, D.C.: Army Map Service, U.S. Army, 1944, Princeton University Library(G7824.B4C2 1944 .A7M3) QR code A
- Figure 10-1. "Page - Temple of Heaven," Sidney D. Gamble Photographs Collection(52B-551), Duke University Library QR code B
- Figure 10-3. "Peking. Der Himmelstempel. III. Marmorterrasse, auf welcher der Kaiser opfert," In Alfons von Mumm, *Ein Tagebuch in Bildern*, 1902, p. 65, Staatsbibliothek zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz QR code C
- Figure 11; Figure 12. "Temple and Altar of Heaven, etc.," J. P. Koster(photo), Ground and Aerial Views of China, ca. 1940, East Asian Library/Berkeley Library, University of California QR code D
- Figure 13. 「圓丘の平面・側面・断面図」石橋丑雄『天壇』（山本書店 一九五七年）一三三頁
- Figure 17. (above) "Tents on the Circular Mound Altar, Temple of Heaven, Peking," George Hutton Potts(photo), 1910. Image courtesy of David Hutton-Potts and Historical Photographs of China, University of Bristol (P001-042) QR code E
- Figure 17. (middle; below) "Pekin - Temple du Ciel," [Frimin Laribel], *Chine: Temples. Tours et portes chinoises. Églises. Portiques. Ponts. La Grande Muraille de Chine*, vue 21; vue 24, Bibliothèque nationale de France QR code F
- Figure 31. "Alter der Erde," In Wulf Diether Graf zu Castell, *Chinaflug*, Atlantis-Verlag, Berlin/Zurich: 1938, p. 72.
- 次の『欽定大清会典図』は、欽定大清会典圖270卷、Staatsbibliothek zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz より引用・転載した。 QR code G
- Figure 3. 「圓丘壇正位陳設圖〈常壽陳設同〉」; Figure 8-3; Figure 14. 「祭祀中和韶樂樂懸位次圖〈慶神歡樂附説〉」;
- Figure 22. (left) 「大雩舞童持節導班之圖」; Figure 23. 「地壇総圖」
- 次の史料は、いずれも以下の東洋文庫所蔵のものから転載している。
- ・石橋丑雄氏 将来北京壇廟関係写真（石橋宗雄氏寄贈）
    - Figure 2. 整理番号（以下 略）：4-064; Figure 4: 4-034, Figure 5: 4-037, Figure 6: 4-016, Figure 10-2: 5-023, Figure 10-4: (no number);
    - Figure 16: 3-061, Figure 24. (right): 6-005, (left): 6-001, (below): 6-008; Figure 25. (above): 6-017, (below): 6-014;
    - Figure 26. (above): 4-003, (below): 4-004; Figure 28: 4-075
  - ・『壇廟祭祀節次』全六冊、東洋文庫所蔵（請求記号：真II15-C/8）
  - ・『御製律呂正義後編』乾隆一一年刊本、東洋文庫所蔵（請求記号：真XII3-A-c/66）
  - ・『皇朝礼器図式』乾隆三十二年刊本、東洋文庫所蔵（請求記号：真XII3-A-b/203）



G



F



E



D



C



B



A

清朝『壇廟祭祀節次』訳注(二)——園丘壇・方沢壇——

---

2023年3月17日 発行

非売品

編者 石橋 崇雄

編集 中村 威也

発行者 東京都文京区本駒込 2丁目 28番 21号

公益財団法人 東洋文庫

畔柳 信雄

印刷者 東京都千代田区神田司町 2丁目 14番地

富士リプロ株式会社

発行所 東京都文京区本駒込 2丁目 28番 21号

公益財団法人 東洋文庫

---

本書は公益財団法人東洋文庫に対する2022年度文部  
科学省補助金の一部に依って刊行されたものである。

ISBN 978-4-8097-0314-0

